
どうしてこうなるんだ！

みずきなな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

どうしてこうなるんだ！

【Zコード】

Z2502P

【作者名】

みずきなな

【あらすじ】

ネットゲーム大好きな男、こうさかみゆき高坂行幸がある事を切っ掛けに女になつた！？

MMOでネカマだった『行幸』が天罰だと言われて女になった。『行幸』が元の男に戻るまでの『行幸』と関わりある人物の私生活・ハプニング等を描いた小説です。

パソコンパーティ・MMO・コスプレ・メイド喫茶・アニメ・という要するにアキバ系ネタが結構入っています。しかし作者は広く浅くというレベルの知識ですのでマニア系小説ではありません。軽く気

軽に読んでください。多少はエロ要素あり。

ない！

期待するレベルでは

プロローグ 【やがていつのまにか…】（前書き）

いつもこの辺の書いてみたいなーってこの辺のがあり今回の小説をひらきました。

書きたい事を書いているだけです。深く考えるようなものにするつもりはありません。周辺描写や状況描写、人物描写等はあまり深く書いてません。どちらかと云ふと台本っぽいかもしません。気軽ににお読みください。

MMO話題・パソコン話題・コスプレ話題・架空アニメ等が出ます。抵抗のある方は読むのを控えてください。

プロローグ 【やうこそ「ひなたー」】

おー…

罰ばいがあたるつていうのは有り得る事のか？

人は嘘うそはついてはいけないのか？

人を騙す事は罪つみなのか？

人は常にそういう事を考えて生きなければいけないのか？

正直に言うと俺はまったくそんな事を気にした事はなかつた…
そうだよ、昨日まではな…

師走も迫つた12月の某日
その事件は起こつたんだ…

くわ…どうしよう、もう家を出なきゃバイトに間に合わねー！

俺は心中でそう叫びながら慌ただしくアパートのを走り回る。
時計を見るともうアパートを出る時間じゃないか。やばい…急が
なきやいけないので…このままじゃバイトの始まる時間に間に合わ
なくなるぞ…

端から見た奴らは思つだらつ。早く行けばいいじゃなかつて。

そうだよ、そんなんだよ…それが正解なんだよ…準備をしてアパートを出れば良いだけなんだ。

でもな！行けない理由つていつのがあるんだよ！

取りあえず言いたい 「ビーツしてこつなつた！」

俺に今重大な事件が発生している。何があつたんだつて？
それはな…

「朝起きたら俺が女になつてたんだよ…」

何を冗談を、最初から女なんだろ？呆けてるだけじゃないのか？
って言われそうだが違う！

それじゃ俺が単なる精神異常者みたいじゃないか！

俺は元々男だつたんだ！くそ…マジでビーツしてこつなつた…

俺は今の現実を受け入れられないで頭を悩ませていた。
そしてどうしてこうなつてしまつたのかの理由を考える。すると
ふと昨日の出来事を思い出した。

ん…ま、まかさ…罰…？なのか？

そうだ…昨日…あのMMOをやつてた時のあいつの言葉…？

「…罪深き奴め、天からの罰を受ける…」

え…？これがその天罰なのか…？つていつか天罰とかありえるのか…？

か…？

某MMO

俺はPTメンバーとダンジョンから戻ると町へとキャラを移動させる。

今日はメンバー構成も良く、結構経験も稼げて良かつた。

俺が倉庫へキャラを移動させた時、運営からの告知が流れた。

【システム放送】今から一時間に限つて特別な強化アイテムを販売します。是非この機会にお買い求めください。

強化アイテム？興味はあるけどまだどうせ課金なんだろ。
こういうMMOは基本は無料だが、アイテムを課金にしてお金を儲けている。

だからお金のある奴は高価なアイテムを買いつつて全てにおいて有利に遊んでいる。

俺？俺は時給の少ないバイト生活で金なんてない。余程の事でも無い限りは課金なんてしない。

いろいろいもんでも金が無いから買えねーんだよー運営の策略なんかに乗るかよ。

俺は心中でそう叫んだ。

…しかし多少は気になるな…少しだけ見に行くか。

俺は人混みの、じゃねーな…キャラゴリ…いや…なんか違う…まあ他プレイヤーのキャラがいっぱいのお店にキャラを移動させた。重い…キャラ居すぎだろ…

お店の中はこれでもか！と言わんばかりにキャラで溢れかえっている。俺のパソコンのスペックはそんなに良くない。ここまでいっぱいのキャラが居るとパソコンの動作がすこしく重くなりキャラが点灯を始める。

重すぎるし、アイテムだけ確認したらここから移動しよう…俺がお店のNPCをクリックしようとした時に個人チャットが入った。

【個人：フロワード】あ、みゆきじゃん！何やつてんだよ
個人チャットを送ってきたのは同じ同盟の馬鹿男のフロワードじ
やねーか…

こいつは盗賊なんだが、敏捷と器用さが無いという致命的な欠陥
を持つ。

マジでステータスリセットすればいいこと思つが、これが個性
なんだと言い切つている。

【個人：MIYUKI】え？私？ちょっとさつきシステム放送があ
つた強化アイテムが気になつて見に来たの

言葉使いで解るだろ？が、俺は女キャラを使つていて。そして女
になりますましている。要するにはネカマと言つ奴だ。だからフロワ
ードも俺を女だと思い込んでいる。と思つ。

【個人：フロワード】お、俺もなんだ…じゃあ一緒に覗いてみるか
【個人：MIYUKI】うん

俺は点滅を繰り返す店のNPCをクリックした。すると買い物メ
ニューが画面に広がる。

どれだ？さつき放送であつたやつは…ええと…お？これが？

俺はNEWと書かれたアイテムをクリックした。

ええと…この強化スクロールは武器を含む装備品全ての強化を失敗なしに+10まで強化可能にする。

なんだと！おい！待て！こんなのが売つていいのかよ！チート級の課金アイテムじゃねーか！！

ちなみにこのゲームは武器強化や防具強化には強化スクロールを使うのだが、失敗すればアイテムを五割以上の確率でそのアイテムを失う可能性があるという超リスクの高い強化なのだ。

要するに十回連續で成功するなんて神の領域だ。だからチート級なんだ。

『ついに狂つたか運営…』 そつ思いつつも俺は金額をクリックして見る。

表示されたのは十万PP…千PPがリアルマネーで百円だ。というとこの強化アイテムは一つ一万円かよ…

頭・足・手・体・武器・装飾三個全部を強化すると八万円かよ！

おいおい…廃課金者じゃないと無理じゃねーか…

くそ運営がこんなのが売るなよな…こんなのが廃人に買われまくつて強化されまくつたらゲームバランス崩れるじゃねーかよ…

運営つぶれそうなのか？資金ショートか？大丈夫なのかよ…

俺がそんな事を考えているとまたフロワードから再び個人チャヤが来た。

【個人：フロワード】 おい！見たかよ！すげーな！でも一つ一万円な上に販売時間が一時間かよ…くそ…給料まだだしな…

おい…まさかこいつ買つつもりなのか？こいつはそんなに金持ちだつたのか？

俺は力チャカチャとキーボードを叩く。

でも高いし…私は無理だから…と入力、エンターッと

【個人：M I Y U K I】でも高いし…私は無理だから…

【個人：フロワード】おー…みゅき
ん？何だ？

【個人：M I Y U K I】はい？

【個人：フロワード】これ欲しいのか？

欲しいのかって言われたら欲しいだろ？普通はそう思うだろ。

【個人：M I Y U K I】それは…ほしいけど…

【個人：フロワード】じゃあ…今度のオフ会に来てくれる？約束してくれるなら俺が買ってやるよ

「ぶ…な、何だと…買つてくれるだと…？」しかし…オフ会に参加しようと来たか…

…俺はネカマだし…行つたら正体がばれる…とてもじゃないけど行けないぞ…

でもアイテムは欲しい…どうする…どうする俺！つてどつかで聞いたなこの台詞…

【個人：フロワード】無理か？まあ無理は承知なんだけどな。お前は一度もオフ会来た事ないからな

ネカマだから行けないって言うんだよ！

【個人：M I Y U K I】「ごめんね…私は色々忙しくって…」

【個人：フロワード】全装備分買つてあげようかと思つたんだけどな…残念だ…

え？今何て？全装備分！？「おおおおおおおおおおおお…全装備つて

八万円！八万円だぞ！おい！正氣かよ！？」

待てよ…ここで行くといつておけば…このチート強化アイテムが手に入るんだぞ？

そ、そうだな…別にオフ会に行かなくてもいいじゃないか…断る

理由はなんともなる…よし…

【個人：M I Y U K I】 い、行こうかな…次のオフ会…
入力してしまったああああ！

【個人：フロワード】 おー・マジかよーやつたー約束だぞ！じゃあ買
つてやるよー

こうして俺は強化アイテムを貰つてしまつた…

【個人：フロワード】 俺さ、みゆきに逢えるの楽しみにしてるから
な！

【個人：M I Y U K I】 あはは…あまり期待しないでね？

【個人：フロワード】 オケ、オケ、よし、じゃあ俺は落ちるから。
また明日なー

【個人：M I Y U K I】 うん、おやすみなさい

その後だよ…俺がログアウトしようと思つたら…

【個人：】 わい、お前

何だ？このなれなれしい個人チャットは？

発信は誰だよ…ええと…あれ？名前が見られないぞ？バグか？
つと…一応返すか

【個人：M I Y U K I】 はい？どなたでしじょうか？

【個人：】 お前は本当に女か？

ちょ！何だよ！いきなりそんな事を聞いてくるんだ？と…まあキ
ヤラは女だし。このゲームで俺の事をネカマだつて知つてる奴はい
ないはずだ…しかし、まずはこいつ入れておくか…

【個人：M I Y U K I】キヤラは女の子ですよ

【個人：】違ひ、お前の本体、ようするにプレイしてあるお前だよ

やつぱり俺の事か？俺はどうみても男だろ…が、俺はこのゲームでは女で通ってるんだ…よし…

【個人：M I Y U K I】え？私は女ですけど？何か？

【個人：】そうか…俺はお前みたいな人を騙す奴が大嫌いなんだよな

【個人：M I Y U K I】え？何か言いたいのでしょうか？

【個人：】人を騙して生きてる奴は嫌いって言ってるんだよ

人を騙すって！？って…さっきのあれの事か！？でもこいつは現場に居なかつただろ？

知ってるはずない…じゃあ俺がネカマつて事か？確かに…俺は男だ…だから女のM I Y U K Iは存在しない…だから騙したと言えば騙した事になる。

しかし何なんだこいつは？結局何を言いたいんだ？

【個人：M I Y U K I】それで何の用事ですか？私はそういう冗談に付き合っている時間はないんです

【個人：】…わかった、お前は女なんだな？人は騙してないんだな？

【個人：M I Y U K I】はい

ここには嘘を突き通しておこいつ…

【個人：】…罪深き奴め、天からの罰を受ける！

そう言われた瞬間にリアルの俺の体に電気のようなものが走った！

「いてて！」

何だ！？漏電か！？俺は慌ててパソコンの周囲を見たが漏電した
気配もない。

パソコンだつて電源が入つたままだ。

くそ…何だつたんだよ…俺はパソコンの画面を覗き込んだ。
するとさつき俺に来ていた個人チャットが消えている。
またバグか！？運営しつかりしるよな…デバグくらいちゃんとし
ねーと人が居なくなるぞ？

再度確認したが、ログにもさつきの怪しい個人チャットのやり取
りは残っていなかつた。

うーん…結局何だつたんだ？まあいいか…もう一時だし…明日も
朝からバイトだし、寝るか…

俺はトイレに行つてから布団に入つて寝た。

確か昨日はこんな感じだつたよな…

寝るまでは男だつたんだ…寝る前にトイレに行つたから覚えてた
んだ…

で、朝起きてからトイレいつたら…無いんだよ！俺の大事な物が
！

それでまさかと思って慌てて鏡をみたら…俺は鏡を見て動搖した

んだ…

鏡の中に面たのは身長156センチくらいの黒髪でショートヘアの女の子だったんだ！

肌は色白ですべすべしてて…でもって胸も結構あって…顔だって悪くない…

でもまあ俺の女の子の総合評価としてはすごく良くもなく悪くもなく普通よりはちょっと上かなーってレベルだけどな…って何を自分で評価をつけてんだ…俺は。

そんな事じゃないんだよ…くつそー…マジで何でこうなったんだよ…
天罰とか信じるつもりはないが、取りあえず女になつた事は現実だ。

ふと時計を見るともう九時になつていて。

もう九時じやんか！やばいぞ…バイトに間に合わない…
もういい！取りあえずバイトに行く…どうせアパートに居ても何の解決にもならない！

と、俺は後先に事も考えずに取りあえずバイトに向かつた。

プロローグ 【やがてひなつたー?】（後書き）

いかがでしょ?~メイン小説の合間にの息抜きで書いてます。
更新速度は期待しないでください。といいながらこっちの更新が先
かもしれないんですけどね…それにしても性転換ものばつかだ。

第一話【俺は行幸だ！】

某街の一角にあるパソコンショップの前

とりあえずはバイトしてるパソコン店の裏口までは来てみたが：俺は裏口の前で考え込んでいた。

こんな姿で入つたら怪しまれたりするか？まあ普通に考えて怪しむだろうな。俺が女になつたなんて誰も知らない訳だし：やつぱり今日は帰るか？だがしかしだ！店長に高坂の野郎無断欠勤しやがって！と言われたくない！

別に俺は女になつた事実を人に隠す必要はないし、こうなつたのは俺のせいじゃないんだからな！

…いや、少しだけ俺が悪かつたのかもしれないけど…

よ、よし、こんな場所で悩んでも仕方ないな、入るぞ入るぞ！

「あれ？貴方は誰？バイトの面接か何かかな？」

俺が店の裏口から店内に入ろうとした時、聞き覚えのある声が…ん？この声は？

声のした方向を見るとそこにはこの店で一緒に働いている女、永井董がいた。

董の身長164センチで何時もダボダボのパークーを着ている。

これはきっとペタンコ、要するには貧乳、よつするに凸がない胸を隠す為だと予想している。

という事でこいつは多分Aカップだ。ごめん、ちがつた。絶対にAカップだ。

いつもダサい赤縁の眼鏡をしていて、茶色に染めた髪を後ろで纏

めている。

見た目がダサいのにこいつが付けている眼鏡がさらによーりアツっぽさを引き出している。

色気？色気なんてない、化粧なんかしてた時を見た事もない。ちなみに勝手な俺の考えだが、こいつは彼氏なんてメンドクサイ！っていう考え方で、家ではゲーム（主にMMOは基本）っていう奴だ。おまけだが、こいつは負けず嫌いで俺はあまり好きじゃない。

「すみれ 蓮、俺だよ行幸だよ」

「はあ？何を言つてるの？もしかしてあんたって行幸の知り合いかなんか？」

「俺がその行幸だつて言つてるんだよ」

「え？何？貴方つて女だよね？貴方の言つてる行幸つて名前は女っぽいけど男なの、わかつてるかな？」

まあこれが普通の反応だよな。しかし俺はお前に本人だと納得させる事の出来る情報を大量に持つていてる。見てろよ。

「ふふふ…俺が行幸だつていう事をお前に認めさせちゃるからなー。」

「ちょと…何？貴方本当に誰？」

「永井蓮二十歳、彼氏いない歴二十年、といつかパソコンが彼氏！好きなゲームの系列はMMOとアクションRPGで今やっているゲームは三つある。キャラ作製は男キャラが多く、職業は戦士系が好み。三つやってるゲームの中でデビルスレジェンドというMMOで戦争同盟のガイアパワーに所属。ちなみにキャラレベルは七十一で

最近の悩みは四次職を何にするかだ、そして…「

俺のマシンガントークが炸裂する度に董の顔色が変わつてゆく。

「少し別の方向から董の趣味を暴露すると、実は某アニメが大好きで、家には某アニメのポスターが大量に張つてある。今月の二十四日にクリスマス限定のブルーレイBOXが出る予定であり、既に予約済…予約特典の等身大ポスターが楽しみで仕方ない！」

「ま、まつて！わかつた！もういいから！そんな大きな声で言わないでよー」

董は顔を真っ赤にして俺の口を塞げりとした。がしかし俺はすばやく身をかわした！

「ふん、認めたか？俺が行幸だと…」

「ちよ、ちよっと取り合えずこいつちに来てよー」

董は俺の手を持つと強引に店内に連れ込んだ。

「遅いぞ！董！もうすぐ開店時間だぞ！何やつてんだ！行幸の馬鹿もきやしねーしー！今日は午前中お前と行幸しかいないんだぞ」「

大きな声でそつ言いながら奥から体格の良い男が出て來た。

こいつは雇われ店長の茨木恋次郎だ。

いばらぎではなくいばらきらしい。そんのはどうでもいいだろと突つ込みたい。俺が気になるのは名前だ！何でれんじろうなんだよーすつげー似合つてねーしー！

店長の年齢は一十六歳で身長は184センチ、体重は九十キロもある。

大学時代はアメフトをやっていたらしき。
ちなみに色黒で角刈りだ。パソコンよりは運動が好きらしい。
何故にこのパソコンショップの店長をしているのかがまったくわ
からない。
おまけだが、パソコンに対する知識はこの店の従業員では最低レ
ベルだ。

「違うのー！店長聞いてよー！」の子が俺は行幸みゆきとか言っておかしいん
だよーで、この子に裏口の前で捕まつて遅くなつたの！私はちや
んとお店のは来てたんだからー！」

「言い訳はそれだけか？」

「言ひ訳じゃないのー！本当なんだつてー！」の子がおかしいのー！」

すみれ董は懸命に店長に言い訳をするが店長は聞く耳を持つてない。

「おいー！俺はおかしくないー！俺は行幸みゆきだつて言つてるじゃねーかよ

ー！」

「ほりー！ほり聞いたでしょーー！」の子がぱりおかしいのー！ねー店長
ー！」

「そんな言い訳はいいから。あと友達がなんだか知らないが、店員
以外は裏口から店に入れるな！わかつたか？」

すみれ董が言つた事はまったく信じて貰えないみたいだな。

「こいつがいつも遅刻の時に嘘つくからだ。自業自得だ。

「だつて…」の子が行幸みゆきから聞いたのか知らないけど、私の事を色々知つてね…」

店長は董すみれの話を断ち切るかのように大声を出した。

「そうだー！行幸みゆきだー！あいつー！無断で休みやがつてー！電話だー！電話ー！」

そう言つと店長は携帯電話を取り出して電話をかけた。
といつかもだ十時三分だぞ？まだ遅刻かもしけねーってレベルだ
ぞ？なんでもう休みになつてんだよ…

「行幸の野郎、まだ寝てるとかねーよな

店長はそう言つて携帯を耳に当てるとい、すぐに俺のポケットの中
の携帯が鳴り響いた。

その瞬間にまさかという表情で店長と董すみれが俺の方を見た。
俺は平然とその携帯をポケットから取り出すと電話に出でていひ言
つてやつた。

「はい、高坂ですが？」

店長は無言のまま電話を切つた。

「あれ？切れたぞ？おかしいな…店長からだつたけど何の用事だ？」

俺はわざと大きな声で言つてやつた。

董すみれがまじまじと俺の顔を見る。そして全身をべたべたと触りだし

た。

「おこー！向すんだよー！気持ち悪いなー！」

俺がやつづつ董は俺から数歩離れた。
すみれ

「嘘……マ、マジで行幸みゆきなの？」「見ても女じょん……」

横にいる店長は俺は信じないことを表情で俺に向かって叫んだ。

「や、君は…行幸みゆきの友達かな？」

「違つ、俺が行幸みゆきだ」

「えつと…ビニでその携帯を拾つたのかな？」

「だから俺が行幸みゆきだ…」この携帯は俺のだ

「本人は何処にいるのかな？」

「俺が行幸みゆきだつて叫んでるだろー。」「…

店長は俺の前に固まつた。

「…しかし…君は女の子…だよな？」

「あー！俺は今は女だが、しかし俺が行幸みゆきだー。」

店長は頭を抱えて店の奥へと歩いて行つた。

「おー！何処いくんだよー俺が行幸みゆきだって言ってるんで信じないのかよーおいー！」

「ねえ…本当に行幸みゆき?なの?」

横から董すみれが俺に話しかけて来た。

「そりだよー最初っからそりだって言つてるじゃなーいか

「正直さ、まだ信じれないんだけど…もしさうだとすると、どうして女になつたの?もしかして性転換手術したの?」

「あほか!一日で性転換手術が出来るかよー!」

「じゃあ、元々女だったとか?」

「馬鹿か?俺が女だったとかありえるはずねーだろ?が!」

「じゃあ何でよー!」

董すみれとそんなやつとりをしてると向の間でか店長てんじょうが戻つて來ていた。

「君、ちよつと質問いいかな?」

「俺?」

「ああ、やうだ」「だ?

「いいけど?何だ?」

「じゃあひょっと質問をするから……」

俺は店長の用意した高坂行幸に関する質問にすべて即答で答えた。ついでに俺の知っている店長の秘密まで暴露してやった。すると店長はついに俺を行幸だと認めた。

「おこ……行幸、どうしてそうなったんだ……？」

店長が憤り始めた顔で俺に向かってそう言った。

何で……昨日のあの出来事を話せばいいのか？話しても信じてくれるのか？

正直あれは誰にでも信じれるような事じゃない……でもなあ……言わないと他に原因がある訳じゃないしな……

俺は昨日の事を店長と董^{すみれ}に話した。

「マジ？そんな事あるの？じゃあ何？女になつたのって天罰って事？」

「やうこいつ事になるのか？わかんねーよ、俺こも！」

「私は行幸^{みゆき}がネカマやつてた事は知つてたし、正直きもい奴だと思

つてたけど、でもまさかそれを利用して人を騙しかねうなんてね

「騙していないーまだ騙していないー」

「でも、その時点では男だった訳だしねーまさか女装してオフ会に行く気だったの?」

「女装!?.そんな事出来るか!もし女装したとしてオフ会に行ったらいどくなると思つて変な奴だと思われて誰も相手をしてくれなくなるだらうがー?」「?

「じゃあ行く気無かったって事でしょ?じゃあ結構は嘘つきやん

「うー

確かにな…俺は何も言ひ返せなかつた。

「ちよっとお前ひ、もつとの話はいい。えつと取り合はずはお前を行幸だと信じるとしてだ、で?このお店でお前は働きたいのか?」「

何て質問をしつべるんだ…俺がここに来てる理由が解りてないな…

「おー、お店

「何だ?」

「俺はここをクビになつたり路頭を迷つ事になるんだー

「ふむ…で?」

「働きたいから今日も出勤して来てるんだろ?」

「なるほどな…そんなになつてまで働きたいとか、すごいな?俺ならシヨックで立ち直れないぞ?」

「俺だつてシヨックなんだよーまるで俺が何も感じてないみたいに言つなー!」

「まあまあ…しかしだ…その格好はちょっとな…」

「そうか、俺の今の格好は男の時の服だ…上も下も全てがぶかぶかだな。」

「ん?この格好か?仕方ねーだろ…男物しかないんだからな

店長は少し考へると言つた。

「よし、俺がなんとかするか…」

何とかするつて…何するんだ?まあそれはいいとして…

「店長」

「何だ?」

「もう十一時四十分だぞ?開店しなくていいのか?」

「つむーつまつたー董^{すみれ}ー店を開けるー!」

「えー?あ、はい

まったく…まあ取り合えずは俺だと信じて貰えたからいいのか…？
こうして女としての第一日目がスタートしたのだ。

第一話【俺は行幸だ！】（後書き）

後書き人物紹介！？

高坂行幸【こうさかみゆき】

年齢二十四歳

髪の色 黒

身長一七三センチ（男）一五六センチ（女）

体重 65キロ（男）50キロ（女）

一応大学を出たがネットゲームに没頭しそぎて就職戦線から脱落した。

大学時代から働いていたパソコンショップにそこまま居座る。ある日某MMOをプレイ中に謎の人物から「…罪深き奴め、天からの罰を受ける！」と言われて女になってしまった。

元々ポジティブな性格で考えるよりは行動するタイプなのもあり、そのうちどうにかなると現在は女として生きている。

第一話【俺に変な格好させんじゃねー】

店長がボケてたせいでオープン予定の十一時をかなり過ぎてしまった。

取り合えず俺も手伝ってお店のオープン準備をする。

「店長！昨日入荷したこのマザボは何処に置けばいいんだ？」

「ん？それは特価品コーナーだな、POPを後で作つておくから取り合えず積んでおいてくれ

「特価品コーナーか、わかった」

俺はダンボールに入つたマザボに防犯タグを付けて店の入口付近の特価品コーナーに山積みにした。

「店長！防犯タグがもう少ないと…」

「わかつた！発注しておく」

俺にとつてのいつもの会話が店内に響く。

「ちわーやマソ運輸ですー」

いつも配達してくれるヤマソ運輸のお兄ちゃんが店内に荷物を持って入つて来た。

俺が店内を見渡すと董^{すみれ}も店長もいねー…仕方ない、俺が受け取つておくか…

「はい、こつもい」「苦勞様です」

俺はそつ言つてこつも配達してくれるお兄ちゃんの前に出た。

「あれ？新しく入った方ですか？」

「え？」

「え、あ、すみません、一度お会いしますつけ？僕は初めてお会いしたと思つたのでつい」

そつかそつか！俺は今女だからこのお兄ちゃんは俺を新しく入った従業員だと思つてるんだな？

「いやいや、別に構わないですよ。つとこに印鑑でいいのかな？」

「あ、はい、ここにお願いします」

俺は自分の印鑑をぽんと押した。

「どうもありがとうございます！あれ？高坂さん？ここにもう一人高坂さんって人がいませんでしたつけ？」

受領印で押した俺の印影を見て運送屋のお兄ちゃんが言った。

「ああ、俺が前からここに…こもいもー」

俺が前からここにいる高坂本人だと運送屋のお兄ちゃんに教えようとしたら、突然現れた店長に手で口を封じられた。

「ヤマソセさん、はいはい何時も」「苦勞様です。この子は今日入ったんですよ。これからも宜しくお願ひしますねー。」

「あ、そうですか。わかりました！宜しくお願ひしますーーそれじゃまた」

運送屋のお兄ちゃんは駆け足で店を出て行った。
そして店長はやっと俺の口から手を離した。

「おーー！すんだよー。これなり口癖みやきがついてー。」

「おい！行幸みゆき！お前は余計な事を話すなー！」

「何でだよー俺は高坂行幸みゆきなんだ！何で俺の事を話したらダメなんだよー！」

「馬鹿か？この世の中の何処にお前が行幸みゆきで本当は男おとこだつたけど女になっちゃつた、とか信じる奴がいるんだ？俺と董すみれだつて今だに半信半疑なんだぞ？」

「なんだー？店長と董すみれは俺が行幸みゆきだつて信じてくれるんじゃないのかよー！」

「信じてるーしかしながら信じてる中にも本当かな？つていう考えもある。仕方ないだろ？だいたい俺は男が女になつたなんて漫画かアニメがエロゲーでくらいでしか見たことがない」

「げ…そんな顔して漫画読んでアニメ見てエロゲーしてんのかよ…気持ちわるー」

店長の顔が見る見る赤くなつてゆく。

「煩い！俺にどんな趣味がある？が俺の自由だらうが！」

中々自分の事を話してくれなかつた店長がここまで簡単に自分の事を暴露するとは…
しかしまあ…このお店の店長をやつしている理由が多少はわかつた…
そうか！だから店長はエロゲーの仕入れがうまいんだな…こいつ…そっち系のマニア！？
まあいいや…別にどうでもいいか。

「はいはい、自由ね、自由ですよ、そんなにムキになるなよ。俺より大人なんだろう？」

店長の眉間にひくひくと動いている。

「みゆき行幸…お前は…」

「ちよつと…店長…みゆき行幸…二人とも何してんのよー陳列手伝つてよー」

すみれ董が店の奥からグラボが入つた箱を持って出て來た。

「おい董！すみれ店長の秘密がわかつたぞ！店長は実はエロゲーがだい…
ごもじじも…」

俺は再び店長に口を塞がれた！

「もひ…いいよな？みゆき行幸君…」

そう言つて俺を見る店長の顔がむむむくひも怖いぞ……やべ……言い過ぎたか…

流石にマジで喧嘩したら俺は殺される可能性がある…しかし苦しい…押さええる力が強すぎる…こいつ力加減を知らないのかよーく仕方ない…

「もー…もほむほー…むほほ」

俺は小さく何度も頷きながら一応謝った。

けど何を言つてゐのかわからんねーなこれは。

「え? 店長の秘密がどじつとしたつて?」

商品を陳列している董^{すみれ}が今頃になつて反応している。こいつは自分の興味のない話題だといつも反応が遅い…

「何でもない。早く陳列を終わらせるだ。行幸^{みゆき}も手伝え

店長は落ち着きを取り戻した声でそつと言つた。

取り合えず俺は大きく頷いた。するとやつと店長は手を離してくれた。

「はあはあ…店長…力強すぎだ…俺は今女なんだぞ…手加減くらうしてくれば…」

店長は蔑^{さげす}んだ田で俺を見ている。

「お前が悪いんだろう? もつ馬鹿な事はするなよ? あとお前が女になつた秘密は絶対に他人にばらすなよ? わかったな」

「う…わ…わかったよ…」

その後、俺は黙つて開店準備を手伝つた。

開店準備が完了した。

店長は俺に店の奥にある事務所に待機していふよひまつとお店から出て行つた。

という事は店には董すみれが一人でいるという事か…まあ平日の朝なんて客は来ない。ましてや火曜日なんて新商品の発売もないのに余計に来ない。

一人で大丈夫だろ…

一十分くらい事務所に籠つているとやつと店長が戻ってきた。

戻つて来た店長の手には怪しげな紙袋が…

おい…なんだ?その手にもつた紙袋は…そしてその妙に嬉しそうな表情は…

すっげー怪しい…まさか俺に何か変な事をさせるつもりじゃねーのか?

もしや…秋葉原はメイド喫茶も多し…まさかメイドの格好をさせるとか?無いよな…

しかし…もしかするともしかするぞ…

「待たせたな？お前が着れそうな服を借りて来たぞ」

「店長」

「何だ？」

「まあかその紙袋の中身はメイド服とかじゃねーよな……」

俺のその一言で店長が固まった。

そして何故わかった！？と言わんがばかりの表情で俺を見ている。
どうやらまさかの的中だったらしく……

「おい……的中かよ？しかし……なんで俺がメイド服なんか着ないとい
けないんだ？」

「う……それは……」

「別に普通の服でいいんじゃないのか？」

「いやこれには……」

「それも店長の趣味なのか？」

「いや……」

まったく……何を考えるんだか……俺は確かに女にはなったが男としてのプライドを捨てた記憶はない！

そんなメイド服なんか着れるはずないだろ！？が！

俺がそう心で思っていると店長は無言で袋から俺が予測した通りのメイド服を取り出した。

そして俺の田の前のテーブルに置く。

「何だよ？田の前に出したってこんなもん俺は着ないぞ？だいたい俺が女になつた初日からメイド服を着せようとか普通は考えないだろ？もつと^{いたわ}勞つて心配してくれんじやないのか？」

「お前は今日の朝言つたみな？女になつてもこゝで働きたいって？」

「ああ、言つた…」

「だから俺は店長としてお前の仕事を考えたんだ。今日はこれがお前の制服だ。お前がこれを着て店頭でキャンペーンをする。もしも俺の提案を拒むのであれば…今日のバイト代は払わない」

「えー？」

「な、何だこいつ一開き直りやがった…俺がメイド服を着て店頭でキャンペーンって何だよ…」

それに今日のバイト代を払わないだと…！？くそ…これって脅しじゃねーかよ…

しかし…俺は雇われバイトだ…権限は店長の方が上…

「どする？行幸君^{みゆき}

苦汁の選択だ…くそ…バイト代…バイト代がないと生活が…俺の頭の中での優先順位…バイト代>プライド…何だかちょっと悲しくなつたぞ…

「わ、わかった…やるよ…やればいいんだろ…」

俺が力の抜けた声でそう言つと店長はすくい笑顔になつた。

おいおい…何をそんなに喜んでるんだよ…俺は悲しいんだぞ…

俺は屈辱のメイド服姿をついに店長の前に晒した。

「ああー思つた以上に似合つたぞー・よかつたな行幸」

「おい、そんな事を言われても俺は全然嬉しくないぞ…逆に最悪だよこんな格好をせりれて…」

バタン！事務所の入口が開く音が聞こえた。

「うわあー何よその格好！なんで行幸がメイドの格好してんの！」

たまたま事務所に入つて来た董は俺を見るや否や驚きの表情で言った。

うわー見られたくない奴に見られたーつていつかどうせ見られるのか…

「お、董か。どうだ？行幸のメイド姿は？思つた以上に似合つだろ？」

「そうね、ちょっと顔を赤らめて恥ぢている演出なんていかにもつて感じね…悔しいけど可愛いわ…」

「お待て！俺は恥かしくって仕方ないから顔が赤くなつてんだよ！演出じゃねー！」

「くそ…恥かしい…なんで俺がこんな田舎つんだよ…」

「やうね店長、あと一つだけ気になるポイントがあるわ」

「ん？それは何だ？」

「よし、待つててね…」

そう言つと董^{すみれ}は更衣室^{すみれ}に入つて行つた。

そして一分もしないうちにピンクのポシェットを持つて出て來た。

「おい、何だよそれは」

「これ？これはお化粧道具

「ちょっと待てよ、お前は化粧しねーだろ？なんでそんな物を持つてるんだよ」

「何それ？私が化粧しないってどういう事？必要のない場面ではしないだけよー私だって女なんだから化粧する時だつてあるわよー」

董^{すみれ}はかなり不満そうな表情でそう言つた。

「俺はお前が化粧した姿みてねーからそいつただけだらうが！化粧するなら見せてみるよー」

「何よーわかったわよー今日は無理だけど今度見せてあげるわよー」

俺と董が言い合いをしていると店長が割つて入った。

「おーおー、喧嘩するんじゃない。で？董は行幸に化粧をする気なのか？」

董はニヤリと不気味な笑みを浮かべると「わうわ」と叫つて俺を見た。

「待て！なんで俺が化粧をされないと困りなんだよー。」

「何でつて？スッピンでもかわいいけど、化粧すればもっと良くなると思うからじやないの」

「いや、別にこのままいい！俺は女じやねーんだよー。」

「女だろー。」

「女でしょ？」

「こいつらハモリやがった…くそー…

「行幸にはうちの店のマスクガードになつて貰つんだから、可愛くなつたほうが良いにきまつてるだろ？行幸化粧をしろー命令だー！じゃないとバイト代出さないぞー！」

きたこれまた脅迫だよー！今日一度田の一

しかし店長つてこんなに強引だつけるなんか何時もの店長とは違ひ…

それに何なんだマスクガードって！いつそなつたんだよー！…くそー！バイト代の方が大事すぎて文句が言えない俺が情けない…

「はいはいはーい…お化粧しようつねー行幸ちやん、そこそこ座つてー」

俺が仕方なく椅子に座ると董は樂しそうに化粧道具をテーブルに広げた。

「お前ら覚えておけよ…」

で、結局俺は化粧をされる事になつた…

しかし…心の中でだけだが言つておいつ…

俺はこの店の専属マスコットガールなんかじゃねー！

第一話【俺に変な格好させんじゃねー】（後書き）

後書き人物紹介！？

茨木恋次郎【いばらきれんじろう】

年齢一十六歳

髪の色 黒 髮型 角刈り 肌色 褐色

身長一八四センチ 体重 九〇キロ

趣味 公表中 サーフィン・アメフト・マラソン

趣味 未公開 漫画・アニメ・エロゲー（マニア）・メイド喫茶通い
表はさわやかな好青年っぽいが、裏では結構マニアな趣味を持つ男。
みゆき 行幸の働くパソコンショップの店長で、店長をしている理由はメイド喫茶が近い・漫画喫茶が近い・アニメが買える・エロゲーを安く買える等があるらしい（推測）

本気で怒ると手のつけようがないほどの馬鹿力を出す。

冷静な時と興奮している時のギャップが激しい。どうも女になつた
みゆき 行幸を自分のおもちゃにしたい（彼女にしたい訳ではない）と思っているのか色々とひょつかいを出している。

第三話【俺は今日からまたやへ】（前編）

なんとか四日連続ですが……やれやれ『ぶれしす』の筆記を再開します。

第二話【俺は今日からみゅあ〜】

俺は事務所の中で董に化粧をされている。

店長は腕を組んでニヤニヤしながら俺の様子を見ている。

「おこ店長、何一ヤーヤしながら見てんだよ。レジに誰も居ないんじゃないのか? いいのかよ、こんな所にいて」

「大丈夫だ、お客様ではない。チャイムが鳴つたら店に出来るから俺の事は心配するな」

「別に店長の心配なんかしてねー! 店の心配をしてるんだよー。」

俺がいつも通り店長の顔を見上げると董に強引に顔の位置を戻された。

「行幸ちゅうとー! 動かないでよー。」

「何だよー! 俺は別に化粧がほしに訳じやなんだよー! 強引にもじすんじゃねー!」

「何よー! その言い方! 折角親切でやつてあげてるのにー。」

絶対に違うな、親切なんかじねーなー! 化粧をしている時の董の顔は妙に楽しそうだったぞ。

ただ単に楽しんでるだけだろ。

「おじおい行幸、文句言わずにちゃんとやってもらひよ。これも仕事の一環なんだぞ? バイト代が欲しくないのか?」

またまたこれ三度田の脅迫だよー！こいつのつけでやるつかー。
それになんでこんな事が仕事なんだよ。

「どうなんだ？バイト代が欲しいんだろ？」

もう言わると文句がいえねーじゃねーかよ…

「く…く…わかったよ」

「わかつたんだな？よし、それでいい

」「こつ俺が女になつたからつて遊んでるだろーすげームカツクー

「せうだー！行幸みゆき、ちよつといじりで取り決めをしておひ

「ん？取り決め？」

「ちよつと店長ー！いい加減話かけるの止めてもらえない？お化粧が出来ないじゃないのよー！」

「すまんすまん、でもこれは重要な話だし、先に話しておいた方がいいかと想つてな」

「何だよその重要な話つて。重要と言つてもまた変な事でも考へてるんじゃないだろうな？」

俺はちよつと店長を睨んだ。

「おこおこやんなに睨むなよ。別に変な事を考へてる訳じゃないし

変な事をさせよつとも黙つてない

「へえ…俺のこの格好を見て何故そつ言える?今の現時点で十分変な事をされてると思うのだが?違うのか?」

「まあそれは仕事の一環だ」

「仕事?パソコンショップの店員が何でメイド服を着て化粧されなあやこけねーんだよ!..」

「まああまり気にするな。そういう事じゃなく、これから先の行幸の扱いについてだ」

「普通は気にするだろーそれに何だ?扱いつて俺は物じゃねーぞ!..」

「ねえ行幸。みゆきあんたつて馬鹿?あんたが女になつたから今後どう風に扱うかって事でしょ?わかんないの?」

すみれ董は呆れたという感じの表情でそう言った。

「ば、馬鹿…馬鹿つて言つ奴が馬鹿なんだ!」

「煩い!何をくだらない事をムキになつてんのよ。小学生じゃあるまいし!あんたは少し黙つてよ!..」

「ぐ…ひ…くだらない…小学生…」

くせ…負けた…董に言ひ負けた…

「で?店長、どうこう風に扱う気なの?」

「えっと…男である高坂行幸は現在存在していない。今存在しているのは女になってしまった行幸だ。そして男から女になつたんですね。普通の人間は信じる訳もない。それどころか下手に信じられたらマスクに取り上げられ、人体実験サンプルとして捕獲され、そして解剖される…」

「ちょ、ちょっと待て！解剖だと…？それは嫌だ！」

「まあ解剖されるのは[冗談だ]

「何だ、冗談かよ…」

「馬鹿ね、普通に聞いてて冗談だつてわかるでしょ？」

「煩い！いちいち突っ込むな！」

「何よ…やる気…？」

「…ひー喧嘩するな！真面目に聞け！」

店長は俺達二人に向かつて怒鳴った。

「う…」

「…」

「…いちいち喧嘩するな！重要なだから聞け。えっと…何処まで話したつけな？ああ、そうだ、それで…女になつたお前はこれから先は高坂行幸のいとこの高坂みゆきになれ。同姓同名だがまあ大丈夫だろう。名前に漢字を使わなければ十分に女の名前だと思えるし、

「行幸^{みゆき}だつて名前を呼ばれても違和感^{みゆき}ないだろ? そして今日から男の行幸^{みゆき}の代わりに働き出した。男の行幸^{みゆき}は私用で田舎に帰った。これでいきたい。あ、年齢も誕生日もそのまままでいいぞ? 別にすうじこと思われるだけだろ?」

店長はどうだーと言ひ表情で俺たちを見ている。

「いいんぢやない別にそれで。私はそれでここと思つよ

「行幸^{みゆき}はどうなんだ?」

「ーん… そうだな… 確かに男の俺は存在しない。俺は別に元男だつた行幸^{みゆき}だと皆に言つてもいいのだが… ビハヤリあまつぱりしない方が得策らしいな…

「わかった。俺もそれでいい

「よしーじゃあお前は今日の今から高坂みゆきだ。俺はみゆきやんと呼ぶからな

「え? 何それきもこーちゃんとかつくるのか? 冗談はやめろよ

「おー、バイト初日から呼び捨てっておかしいだろ? 我慢しな。あと口調もなんとか直せ! 一応は女なんだぞ?」

「え? マジで? それは無理だーちゃん付けは我慢しても口調を直せとか無理」

「ねえ、やつてみるだけやつてみなさいよ? あんたネットゲーではネカマやつてんでしょ? 女の話方とか知ってるんぢやないの? 正直

今の口調はその容姿とのギャップが凄まじいからだ

「確かに俺はネカマをやつてるが、チャットで入力するのと実際に話すのじゃまつたく違うんだよー店長も董も俺が女言葉つかつたらきもち悪いって思わないのか？」

「今のお前なら違和感はない」

「店長と同じ意見」

即答かよー

「へん……でもーーひこひつ口調の女だつていいの……」

「似合つてない」

「店長と同じ意見」

まだ全部言つてない…

くそーーひつなつたら…女口調がどれほど似合わないか思い知らせてやる。

「えつと…私がこうこう話方をするのって似合つてないよね?」

「す、す、す、似合つてた」

「店長と同じ意見」

「わあわあわあわあー逆効果!」

「説めぬ…今のお前はメイドの格好をした可愛い女の子なんだ」

「うん、その通り」

黙黙だ…これ以上何を言つても無駄だ…
二人は仕方ない、やり過いりやつ…

「わかったよ…努力してみる…」

「「がんばれ」」

店長と董^{すみれ}がハモってそう言った。

なんでこいついう時にお前らは意見が一致するんだよ…
こつもはやれほど仲良くない癖しやがつて…

「どうしただからな。」の事は二人の秘密だ。わかったな?」

「はいはい、私はわかつたわ

「わかつた…」

その時、ベンボーンとお店のチャイムが鳴った。

「あ、店長、お密^{ひそ}さんかな?誰か来たみたいよ

「お~」の時間だし、お密^{ひそ}さんか?」

やつぱり店長は防犯モニターを確認した。

「お密^{ひそ}さんだな…じやあ俺はお店に戻るから、董^{すみれ}は化粧を直しくな

そう言つてお店へと戻つて行つた。

もう十分も経つたぞ？そろそろあわんねーのかな…
俺がそう思つていると董の手が止まつた。

「よーし完成！」

董の声が事務所内に響いた。

やつと終わつたか…しかし何でそんなに嬉しそうなんだよ。
俺に化粧をするのがそんなに楽しかつたのか？

しかし、こんな格好をさせられて、おまけに化粧までされて…
見た目こそ女だが、中身は男なんだよー本当に情けなくて涙が出
そうだ…

しかしバイト代を貰つたのだ。ここは我慢だ…

「終わったのか？じゃあ俺は店に行くからな

俺がやつと椅子から立ち上がると董が引き止めた。

「あー待つてよー鏡でちゃんと確認してよー」

「何で俺が自分の化粧済みメイド姿を確認しないといけないんだ？
別に見たくねーよー」

「えー？ 何で？ こんなに可愛く仕上がったの？ 何？ 女になつた自分が嫌いな訳？ 嫌な訳？ それに何よその口調… わつき直すつていつたじやないの？」

「当たり前だろ！ 俺は男だ！ なんで女の自分を好きならなきやいけねーんだよ！ それに口調は直す努力はするつて言つたがすぐに直すなんて一言もいつてねー！」

「何それ？ いいわよ！ 別にみゆきが自分の事をどう思つてたって、口調を直さなくつたつて私には関係ないわ！ でもねー… 折角私がお化粧してあげたんだから見るだけ見なさいよー！」

もう言つと董はむつとした表情のまま手鏡を俺の前に差し出した。

俺の皿の前に差し出された手鏡に俺の姿が映つて…

だ、誰だよこいつ… 俺は思わず手鏡を覗き込んだ。

朝に鏡で確認した女の時の顔とはまったく別人がそこにはいる。

「お、あいー董！ 何だこれ？ どうなつてるんだー！？」

俺が鏡を見て驚いていると董はニヤニヤと笑みを浮かべた。

「化粧つていうのは化けるつて事なのよ？ みゆきはすつぶんでも良い感じだつたし、マジで化けると思つたのよねー。」

しかし… 惨いな… マジで朝の俺とは別人だ。化粧ひとつでこんなに可愛くなるとは…

こんな子だつたら俺はマジ付き合つてもいいな… マジで可愛いいな、

すつづー可愛い…

つて何を俺は自分と付き合つてもことか可愛いとか馬鹿な事を言つてるんだ！

「どうしたの？顔が赤いけど？」

「な、何でもない！」

「しかし…自分を見て何で顔を赤くしてんだよ俺は…

「…自分を見て何で顔を赤くしてんだよ俺は…」

「ん？何？俺の事か？」

「あ、うそ…気のせいかなあ

「気のせいだろ？俺は今日女になつたんだぞ？」

「わつね？みじー店頭が待つてお店に立つか！」

「おこ董^{すみれ}、俺はマジでこの格好で出ないとダメなのかな？」

「当たり前でしょ？その格好で店頭でキャンペーンしなこと今日のバイト代が出ないんじゃないの？」

「やうだつたな…まあいいやー…深く考へるのはやめとくわー」

「やうやう…あまり考へない方がいいよ」

俺は董すみれと一緒に事務所を後にしても店へ向かった。

しかし…やっぱり何かがおかしいだろ？
そう思わないか？

第三話【俺は今日からみゅあをへ】（後書き）

後書きミー情報？（今回は人物紹介ではない）
ストレートには書いていませんが高坂行幸の住んでるのは墨田区
両国で働いているのは秋葉原です。そして自転車通勤で雨の日は電
車です。ちなみに住まいは1Kのアパートで首都高の下で日当たり
は最悪の部屋らしいです。
どうでもいい情報でした。

第四話【俺がパソコンショップでメイドアルバニーー...】

お店に入るトレジの方向から店員とお客様の話声が聞こえる。

俺は倉庫からお店に出る扉を出た所で再度自分の格好を確認した。

「どう見ても正真正銘のメイド姿だな...」

本当にこんな姿を人前に晒さないといけないのか？

さっきは割りきってやればいいやと軽く考えていたが、今になつてだんだんと恥ずかしさが心の底から湧き出ってきたぞ。

「どうしたのよ？そんな所で立ち止まっちゃってさ～もしかして今更恥ずかしくて人前に出たくなくなつたとかないよね？」

董は俺の心を見透かしたかの様にそう言った。

「おい董、そう言つがな、もしあ前が男になつてしまつて、いきなり王子様かなにかの格好をさせられて人前に出されても恥ずかしいとは思わないのか？」

「え？ 私？ 私は全然平氣よ？」

董は考える様子も無く即答した。

「返事はや～おい、マジですか？ マジでお前は平氣なのか！？」

「平氣よ～つていうかさ、今からメイドの姿になれつて言われても全然平氣だし。何でそんな事聞くのよ～。」

「何でって…普通はそんなの嫌だ！っていう奴の方が多いだろ？」

「ふーん…そうかな？」

しまった、こいつ普通じゃないんだ…
こいつに聞くだけ無駄だった…

「私ってコスプレも大好きだし！男性姿のコスプレだってやつた事あるしさー…あれよね、コスプレって恥ずかしいっていうのも少しはあるけど、でも注目の的になると主役になつたみたいでさー、いいよね…」

話をする董^{すみれ}がすっげー楽しそうに見える。

「董^{すみれ}に聞いた俺が馬鹿だったよ…」

「え？ 何それ！ それって私が変だとでも言いたい訳！？」

「世間一般的にコスプレが趣味の普通の女っていいだろ？」

「えー！ 私はどこからどう見ても普通の女の子じゃない！」

何をムキになつてんだこいつ？ ほんとにこいつと話すと疲れるな…

「はいはい、わかつたよ…で？ 僕は董^{すみれ}がコスプレしてたとか一度も聞いた記憶ないんだが？ そんな趣味まで持つてたのか？」

「だつてみゆきには話してないし。だつてコスプレの趣味のないみゆきにそんな事を話す必要ないじゃん。でも隠すつもりなんて毛頭ないよ？ あーもしかして、私のコスプレした姿が見たいとか？」

「馬鹿か！何で俺が董のコスプレを見たいとかそういう事になるんだよ！俺はそういう系の趣味はないんだよ！それにお前みたいな凹凸も無い貧疎な体の赤渕メガネ女のコスプレなんて見たくもない！」

「何よムカツク言い方するわね！何が貧疎よ…出でるとこはちゃんと出でるのよ！見せてあげようか！」

そう言ひと突然董は上着を脱げりとした。

「だー！待て！脱がなくていい！わかった！俺が悪かった！」

「本当に悪いって思つてないでしょ…やつぱり証拠を見せないと…」

「やめろー！本当に俺が悪かつたです！すみませんでした！」

董はちりつと俺の方を見ると服を脱ぐのを途中で止めた。

「ねえ？本当に謝つてるの？」

「本当にさつきは言い方が悪かったですまん」

「ふん…じゃあ仕方ないわね」

董は途中まで脱ぎかけていた服を戻した。

「ふう…あぶねーな…こんな場所で本当に脱げりとするなよな…」
「いつ何するかわかんねーから怖えな…」

「あのせ?もしかしてさ、みゆきって私が嫌いなの?」

「おい待て！今までに俺が発した言葉の中のどこに嫌いといつ言葉が入っていたんだ？」

「えー？ ジャあ… もしかして私の事が好きなの！？だからわざと強い口調でんな事を言つてたのー？」

「どうしてやうなるんだよー！」

「そつかーでも」めん、みゆきみたいな変な子は私の趣味じゃないんだよね」

「おー人の話を聞けよ！何だそれ？何で俺がお前みたいな女を好きになるんだよ！それに俺が變つて何だよ！董すみれだつて變だらうが！」

「えー？ 私は流石にMMOでネカマやつて人を騙して天罰で女にされるような事はしないし、みゆきよつはマシだと思つけど？」

「ぐ…ぐ…」

駄目だ、これ以上言ふことをしても勝てる気がしねー

「もういい…董すみれと話をすると疲れる」

「何？私は平氣だけど、もうちょっと話するへ…」

「だからもうこいつて…」

「あ、そつ…」

董は俺の顔を見てニヤリと笑みを浮かべた。
勝ち誇ったような顔しやがつて…

「おー、もうひっかれた。店長のところへぞ」

「そのノートのヒュンは昔のデュアルコアだから処理速度がイマイチなのかね？」

「でもさすが、ノートだと基本的にはデュアルコアなんじゃないの？ もともとノートに性能を求める方が間違っていると思つんだけど…」

「いや、やつでもなによ。最近はデュアルコアをノートでクアッドコアみたいな動作をするのも出てきているみたいだし、やっぱり高性能な小型ノート持ち運びが出来るって便利だし、だからこそ性能を求めるコーナーも多いんじゃないのかね」

レジカウンターに常連のお客が一人来ているな。

あれは何時ものお店に来ている大学生の佐藤さんだ。

佐藤さんも飽きずによく来るよな…ほほー田中一回は来てね…

「店長ーおまたせー！結構いい感じに仕上がったよー。」

董はいつも嬉しそうな表情を浮かべて店長の所へ走つて行つた。

「お？終わったのか？」

董^{すみれ}が横まで来ると店長が俺の方を見る。

そしてよこに横にいる常連の佐藤さんも店長に釣られる様に俺の方を見た。

「あ、ちよつと佐藤さんすみません」

そう言つて店長は俺の前まで来ると俺を上から下まで舐めるように見る。

なんか妙にいやらしい囁つきだな…

「ああー可愛いーすばらしくーいいねー」

余程満足した仕上がりなのか店長がすっげー喜んでる。

「でしょーー元の素材が良かつたのね」

董^{すみれ}…くそーなんだか董^{すみれ}と店長を喜ばせる為にメイド姿になつて化粧までされた様に思えてきたぞ…

そう考えると今更だが、滅茶苦茶腹が立つてくる…

「店長？向いの子？新しく入った子？こんな可愛い子雇つたんだ？」

佐藤さんが少し驚いた様な表情で俺を見ながら言った。

「可愛いish? 今日からここ働く事になつた高坂みゆきちゃんだよ」

「え？ 高坂みゆき？ って確か…今日はいないみたいだけど、ここで働いている…えっと…そう！ 大卒なのにバイト君みたいな店員！ あの人も同じ名前じゃ？」

佐藤さん、大卒なのにバイト君は余計だ…

「ああ、この子は実はあの高坂のいとこなんだよ。高坂が田舎に用事があつて戻ったんだ。それでその代わりにこの子に働いてもらいつ事になつたんだよ」

「へーそつなんだ？ 君はあの高坂君のいとこなんだ？」

「あ、はあ…」

よくまあそんなに嘘を平然と話せるな店長。
佐藤さんなんてまつたく疑つてないじゃないか。

「みゆきちゃん、この方はいつもこのお店に来てくれる佐藤さんだ。
挨拶して」

言われなくつても知つてるよ。つてそつか、俺は初対面なのか…

「えつ、い、高坂…みゆきです。よろしく」

「俺は佐藤つていうんだ！ 大学3年だ。よろしくな！」

そんな事は知つてゐし、それに何だ？ そのちょっと赤らめた表情
は？

それは俺に対してなのか…？ うわ…何か嫌だな…

あとこいつもと口調が違つぞ？なにがよろしくなー！だよ。

「それにしても…君、何処かで見たような気がするなあ…」

「何だ？佐藤さんは俺を見たことがある？」

「え？佐藤さんはみゆきちちゃんを見たことあるのか？」

「いや、店長違うよ。今日がもちろん初対面だよ。でも何処か見た事があるような…でもってその声も聞いたような…そんな気がしたんだ」

「ん？そりゃ…え、わざ董すみれも俺を何処かで見た事があるようなつて…」

「もしかしてこの世界の何処かに俺と同じ容姿と声の人物がいるのか…？」

「そうだ！そりゃ…世界には何人だか同じ容姿の人物がいると聞いた事あるぞ！」

「それか…きっとそれだなー！」

「つて待て！何時の間にか取り囲まれてるぞー…？」

「俺が周囲を見渡すと佐藤さんと店長と董すみれが、簡単に言えばお店にいる人間全員が俺を取り囲んでじっと見ている。」

「なー何なんだよお前らー俺を取り囲んで何見てんだよー！」

俺は思わず大きい声で叫び声を上げた。

「おー? 何だ? みゅあぢやんって結構男っぽい口調で話すんだね?」

佐藤さんが笑みを浮かべて言った。それもいきなりみゅあぢやんだと!?

その横では何故女口調で話さないんだ! といつ怒りの表情に満ちた店長が…

しかし! 僕は男だ! 女口調なんて使つてられるかよ!

「えつと、俺は男みたいに育てられたから、このこの口調のこのこの性格の女です!」

「どうだ? どう男みたいな女は? 嫌になれ!」

「へーそつなんだ? 僕、君みたいな感じの子は好きだよ!」

「…効果なし…」

「とうより、君みたいな感じの子って結構好みかな?」

「…佐藤さん、もしかして高感度アップをしようとしているのか? 口説くつもりなのか! ?」

しかし普段の佐藤さんを知ってる俺には効果ないぞ? まず佐藤さんはそういう台詞は似合つてない!

しかし、この人ってパソコンだけに興味があると思つてたけど女人も興味あつたのか…

「みゅあぢやん? 前にも言つたけどもとは女の子じゃなくて話したほうがいこよ?」

店長が眉間にひくひくと震わせながら囁つた。

「無理です」

「無理ですかなくつて、努力しなさい」

「努力の結果がこの口調です。無理です」

「いやまだ努力が足りないでしょ？常に努力して女の舌っぽくしてもらえるかな？」

「あのー俺は店長の彼女でもないし、あくまでも『意見として聞いておきますけど、いちいち指示しないで貰えます？』

店長の顔が見る見る赤くなつてゆく。
うわー怒つてる怒つてる。でもお密さんがいるのに切れたりしないだろ。

「おー！みゆきー俺がさつき言つただろ？がー女になつたんだから女の口調で話せつてーそれになー！」

「ちょっと店長ストップー！」

俺の予想を覆して店長はヒートアップして俺に怒鳴り始めた。
しかしすぐに董^{すみれ}が店長に怒鳴つて会話を止めた。

「何で店長が熱くなつてんのよーみゆきちゃんは店長の物じゃないんだし、いいじゃん。こいつ言葉使いでも可愛い事には変わりないんだし。あまり押し付けは良くないと想つよ？あと、女になつた

んじゃなくつて女なんだからでしょ？」

な。何だ？董^{すみれ}が俺を擁護してくれたのか！？

こいつって味方なのか敵なのかよくわからねーな…

店長はふうと大きく息を吐いた。

「すまん熱くなってしまった…わかつたよ…無理強こするのはやめ
る…すまん」

「あは…あはは…店長、こいつ個性的な子つて僕はここと思つよ
？僕はあまり女の子の子つてこいつ感じよりも、こいつ男っぽさ
が見える子の方が好きだしね」

「あは…あはは…佐藤さん、あ、ありがと…」

佐藤さん、擁護してもらつてるのは嬉しいのだが、こちこち俺の
顔をちりちり見るのはやめてもらえないかな…

俺にいくらアピールしても無駄だぞ…見た目は女だが中身は男だ。

「だがなみゆき、時と場合によつては女らしくじるみ？そういう場
面だつてこの先はあるはずだ」

おいおい…まだ言つのかよ？

「はいはい、わかつたわかつた！」

「俺は真面目にみゆきの事を心配してやつてんだぞ？」

「だからわかつたつて言つてるだろ？」

「あー…わかった！」

俺と店長が話していると董^{すみれ}が突然大声を出した。

「な？ 何だ？ 董^{すみれ}、何がわかつたんだ？」

店長はすぐに董^{すみれ}に問いかけた。

「みゅあちやん！ みゅあちやんが誰に似てるのかがわかつたー！」

「 「 「え？」」

その時…俺と店長と佐藤さんの言葉が見事に重なった！

無意味だけどね。

「董^{すみれ}? 俺は誰に似てるんだ?」

「それは…」

「それは?」

早く言えよ！ 誰なんだよ！ 俺に似てるんだ…

第四話【俺がパソコンショップでメイドトレーナーー?】（後書き）

後書き人物紹介？

永井董【ながいすみれ】

年齢 二十歳

身長 164センチ

体重？ 行幸の予想だと53キロ位？

MMO大好きな上にコスプレまで大好きな女性。いつも化粧をしておらず赤縁の眼鏡をかけている。髪は茶色に染めていてパソコンショップで働いている時はいつも後ろで纏めている。服装はジーパンにサイズの合つてないフード付パーカー。（スタイルを隠す為？）行幸が貧祖で凹凸が無い体と言つた時に出てる所はちゃんと出でると主張した。実際どうなのは不明。自己主張が激しく結構自分勝手でよく店長や行幸と意見がぶつかる。ちなみに彼氏居ない暦は二十年。

第五話【俺がなんでアニメキャラ…?】

「それはね…」

董は眞面目な表情で話を始めた。

「あのね、確か2年前だつてかな？深夜アニメで『わたしがメイドでごめんなさい』っていうのを放送してたの」

何だ？その『わたし가メイドでごめんなさい』っていう変な名前のアニメは…

名前からしても普通じゃないだろ…マニア向けの深夜アニメか？で、そのアニメと俺がどんな関係があるんだよ？

と俺が思つていると突然店長が満面の笑みを浮かべて話を始めた。

「おお！知つてるぞそのアニメ！確かに、制作会社がエンジュルふれしそつて会社の処女作だったはずだ。しかし、結局はその一作だけしか製作してないんだよな」

「そのアニメは放送当時の前評判もまったく良くなかったので視聴率も低かったのだが、数話進んだくらいからいきなり評価が上がりだして人気が出て凄かつたんだ。俺はワンクールで終わったのがすごく残念だったな…続きそうな最後だったんだぞ！俺はあの作品は大好きなんだ！」

おい、店長だけに詳しすぎるだる…

誰もそこまで詳しく話してほしいとか言つてないぞ。

やつぱり店長はアニメ大好、メイド大好きだったのか…確信した。

「ねえ店長……やけに詳しいわね……いや、詳しそぎて正直氣持ち悪いんだけど」

董がかなりドン引きしてゐる…

そうか、まだ董は店長がアニメオタクだって知らないんだ。

董の表情を見た店長はしまったという表情に変わった。

おいおい、今更そんな顔をしても遅いだろ……まったく馬鹿だな。

「いや、これは……ちょ、ちょっと友人にDVDを借りたんだ！それ
で知ってるだけだ！す、董だって知ってるじゃないか」

「え？私はアニメの題名とキャラを知ってるだけだよ？アニメは数
話は見たけど、全話は見てないし、内容もそこまで詳しく覚えてな
いし」

「お、俺も数回見ただけだぞ」

「うーむ…店長、その言い訳はかなり苦しいだろ？」

俺が思うには数回見ただけでそんなに詳しくくなれない。
絶対に見まくったはずだ。

俺は少し焦つた表情の店長を見て思つた。
よし…ちょっと店長を引っ掛けみてるか…

「俺そのアニメに興味あるなーー店長はそのアニメ大好きなんだろ
？そのアニメって本当は何回くらい見たんだ？俺もそのアニメの続
き見たいから色々教えて欲しいな」

俺がそう言つと店長はすぐ嬉しそうな表情に変わつた。

「おおー…そうか！興味があるのかー…なら後でゆっくり内容を教えてあげよーうーあと、見た回数だけど、自慢じやないが五十回以上は見ただと思うなー！」

店長は再度興奮してそう話した。

「おー…五十回以上つて…見すぎだろ…」

「店長五十回以上も見たの？へえ…」

「え？何だ？みゆきが見た回数を聞いたから答えただけだろ？興味があるんだろう？」

「いや、興味は無い」

「おー…ちつき興味があるつて言つたじゃないか

「もう無くなつた」

「みゆき…まさか…俺を騙したな…」

店長は俺とみゆきの顔を見渡した。

「騙した記憶はない。あの一瞬だけ興味があつた」

「く…ま、まあ…面白いから何度か見ただけだ、五十回とこつのは大袈裟に言つただけだ」

「大袈裟ねえ…へえ…どちらにせよ店長つてアニメオタクだつたつ

て解った…まあ別にいいけど…私的には店長がアニメ見てるとか想像するとひょっと気持ち悪いわね…」

店長の趣味がついに董^{すみれ}にもばれた。

「待て待て！俺は単なるこのアニメのファンだ。オタクではない」「はいはい、そんな事は私にどうでもいいわ。店長がオタクでも気にしないから」

「だからオタクじゃないと言つたらどうやないか！」

「あ、あの…盛り上がりがって申し訳ないんだけど…」

佐藤さんは少し引きついた表情でそう言った。
そういうえば佐藤さんの存在をすっかり忘れていた。
この人は存在感がないなあ…

「あ、や、佐藤さんすみません…じゃ、じゃ あ今度発売するグラフ
イックボードが入つたら連絡しますから」

「え？あ…はい…宜しくお願ひしますってえ？僕はまだ帰るとな…」

「入荷したら連絡しますね！」

「えー？あ…はい…じゃ、じゃ あ帰ります…」

佐藤さんかわいそう」、結局追いつかれてる羽田になつてる…
佐藤さんだつてこのアニメを知ってるんだろ？
さつき俺の事を見たことがあるつて言つてたし…

店長も董^{すみれ}も話題に入れてやれよ…

佐藤さん…すまん！こんなメンバーで「めん！」仕方ないな…俺が…

「「めんね佐藤さん…また来てね

俺は佐藤さんご申し訳なくって、出で行こうとした佐藤さんについそう言つた。

すると出口に向かつていた佐藤さんが立ち止まつて振り向いた。

「ああ！大丈夫だよ！みゆきちさんは気にしないでー僕は君にまた逢いにくるからねーまたー」

「…すっ…」とい笑顔で返事を返されてしまった…

おまけに既にみゆきちさんつて言われてるし…

「あ…はあ…」

「ではーー！」

佐藤さんは机嫌なままお店を出て行った。

「…うーむ…佐藤さんはいつもキャララだったのかよ…意外だな。しかしじつするかな…絶対に佐藤さんに気に入られてしました…

…まあ、まあなせばなるかな？深く考えるのは止めとひ。

そして会話が再開する。

「おーー！董^{すみれ}店長がオタクとかもうビリでもこから、そのメイドが

うんたらとか『うアニメがビリしたんだよ』

「うんたらかんたらじやなくって『わたしがメイドで』『めんなさい』つてアニメよ！」

「俺はそんな題名とかどうでもいいんだよ！で？そのアニメが俺とどう関係があるんだ？」

その時、横からすり『じく』嫌な感じがした。

首元に生暖かい風を感じた…

俺がゆっくりと横を見ると何時のまにか真横に店長が来てるじゃないか！？

そして店長は生暖かい鼻息を勢いよく出しながら俺をのつねじを見ている。

「うわああああああ！おー！じらー！何じるじる見てるんだよー！氣持ちわるいーあと何だその鼻息はー離れろー離れろー！」

「ふふふ…『氣』するなみゆき」

「氣になるー」

「大丈夫だみゆき」

「大丈夫じゃないから言つてるんだろうが！」

「俺は大丈夫だぞ？」

「俺が大丈夫じゃないんだよー！」

「で？何が言いたい？」

「あーもうこーいー！俺が移動するー店長はそこから動くなよー。」

俺は店長の横からすばやく移動した。

「おかしい奴だな？」

「おかしいのは店長だろ？がー！」

「ちよつとー漫才はもつこいからー話を戻してよー。」

すみれ
董がイライラした表情で俺たちに怒鳴った。

「すまんすまん、えつと『わたしがメイドで『めんなさい』とみゆきの関係についてだな？俺なりの意見がある。聞いてくれ

そういう言ひ方で店長は腕を組むと険しい表情で語り始めた。

「みゆきは『わたしがメイドで『めんなさい』』というアニメに登場するヒロイン一人、神無月みゆきっていう子に似てるんだ。いや、今みゆきが着ているそのメイド服をアニメに出でていたメイド服に代えればそっくりだと言つても過言じやない」

「えーー？何だよ、じゃあ俺はアニメキャラに似てるって言ひつか？」「？」

「ああ、髪形、髪の色、瞳の色、そして容姿…おまけにすごい事に気がついた。それは今キャラの声を思い出したのだが、女の子っぽ

く話した時のみゆきの声とそのキャラの声がそつそつだといつ事だ

「へえ…店長はさすがマニアね…私は容姿は似てるとは思つたけど、まさか声まで似てるとか…」

「おじおじー何で俺がアニメキャラに似てないといけねーんだよー。ふざけるなよー！」

「別にふざけてなんていなーぞ? マジでせつへりなんだよ!」

「俺は三次元に存在する人間で一次元のキャラじゃねー!」

しかもアニメキャラの名前…みゆきとか言つたか? 俺と同じ名前じゃねーかよ…

「店長、もう一度聞くが俺がアニメキャラに似てるとか嘘だよな?」

「おい、董は何でそのアニメを知つたんだ?」

えー!? 無視!?

「え? 私? 店長に前話したけど私つてコスプレしてゐるじやん」

董まで無視!?

「ああ、言つてたな? 夏コリの時だっけ?」

「そう! それでその時にアニメのキャラのコスプレも人気があつてね。それでそこからこのアニメを知つた訳なの」

「…無視しやがって…

「なるほどな…そうこう経路で知ったのか」

「そうよ?だから内容は深くは知らない訳

「おい」「…一人とも俺を無視すんなよ!人の話を聞けよ。」

店長と董^{すみれ}が俺の方をじーと見てる。

「な、何だよ…」

「…くらみゆきが怒つても、否定しても、似てるものは似てるんだ、仕方ないじゃないか」

「店長と同じ意見」

「だ、だが…いくら何でもアニメキャラとか…ないと思つただけど」

「いや、そつくりだぞ?よかつたじゃないか?可憐にアニメキャラに似てて」

「店長と同じ意見」

「あ、までよ…」

「以上…」

「以上だつてや」

「…」

「それで董は…」

店長と董は俺を無視して先ほどのアニメの話をしている。

「こつら…くそ…」

俺が一人を睨んでいると店長が俺の方を見た。

「何か?」

「何かじゃねー!」

店長は董との会話に戻った。

「うがああああー駄目だ…くそーこうなつたら…仕方ない…出した
くないこの声で…」

「あ、あのぉ…店長…し、質問してもいいですか?」

「おー? 何かみなみゆきちゃん」

女の子口調だと反応しやがった…

「俺つてその何だ? その神無月みゆきってキャラにマジで似てるの
か? つていうかさ…名前が一緒なんだけど…どうじつ事だ」

「男口調に戻つたから答えたくなー」

「こつら…くそ…」

「ど、どいつ事なんでしょう?」

「仕方ないな、答えてやるわ。わざわざから言つてるがそつくりだ。名前が一緒なのは気がつかなかつた。名前まで一緒とかすこい発見だな…」

「おいおい…わざわざキャラの名前ついとただらうが…名前が一緒くらこ気がつけよ…」

「みゆあ、店長の言葉は確かに信用度が低いけど、マジで似てるんだよ?」にアーメでもあれば見せてあげるんだけどね…私は數度しかアーメは見てないけど、記憶だけ辿つても似てると思つのよね。まあ名前が一緒なのは偶然だと思つけど」

「やうなのか…おー、店長!…そのアーメを実は持つてたりしないのかつて?いなーぞ!…?」

「俺が店長にそう問い合わせたが周囲には店長の姿がない!…?

「おい、^{すみれ}董店長は?」

「あれ?店長?何処いつたんだろうね?呼んでようか?おーい!…んちょー!…」

^{すみれ}董が大きな声で店長を呼ぶと店の奥から店長が自分のノートパソコンを持って来た。

いつの間に奥に引っ込んだんだ?気がつかなかつたぞ。

「思い出したんだ!」のノートに全話保存してあつた事を

えー? 何だと? と訝り事は今そのアニメが今見れるのか?

「店娘? まさかそのノートに『わたしがメイドでいめんなさい』が全話入ってるの?」

「ああ、わうだ!」

「うわ… キモ…」

「なー?」

「メイド好き、アニメ好きまでは許してあげよつと黙つたけど、仕事場にアニメを持ち込むほどオタクだったとはすくなく残念だわ。まあ別に趣味を否定するつもりはないけど…」

「こいつ… 性格悪いよな… お前だつてコスプレとか変わった趣味もつてるだろ?」

「それにネットゲームもはまつてるし。普通の女じやねーだろ? が!」

「これはまたまだ! たまたまこのノートに入つてただけだ」

「へえ… たまたまなんだ? で? そのノートにはアニメが何作品入ってるの?」

「そ、それは言えない…」

「… くえ… そつか… まあ言いたくないならいいわ。そんな事を聞いても仕方ないし、じゃあ見せてみそのアニメ」

「…」

店長は肩を落としたまま無言でノートパソコンをレジカウンターに置くとアニメを再生した。

がんばれよ店長…大丈夫だ俺はアニメオタクな店長でもキモイとは思わないからな…

…

って何で店長を俺がフォローしてんだよ…

第五話【俺がなんでアニメキャラー?】（後書き）

後書き人物紹介？

佐藤純一【さとうじゅんいち】

年齢二十一歳

身長177センチ

体重63キロ

某大学の三年生で、行幸^{みゆき}の働くパソコンショップの常連。細身の体で黒髪短髪眼鏡姿。服装はジーパンにチェックのシャツを着ている。パソコンについては性能フェチでゲームをすると言うよりはパーツを最新にしてゆく事を楽しんでいる。ほぼ一日に一回は顔を見せるほどお店には良く来る。女になった行幸^{みゆき}を見て惚れたらしく、気を引く為に精一杯のアピールをしている模様。正直キャラが薄いので再登場するのか作者すらわかつていない。

第六話【俺は男？それとも… オンナノ「？」】（前書き）

かよつと極じい方向に行つてゐる氣もします…

第六話【俺は男？それとも… オンナノ「？」】

店長のノートパソコンからアニメのオープニングテーマらしき音楽が聞こえる。

董の一言に意氣消沈していたはずの店長だったがアニメが始まると先ほどとは打って変わり表情はあつと言う間に元に戻っている。というかさつきより笑顔に？いや、ニヤケ顔になつてゐるじゃないか。

それほどにこのアニメが好きなのかよ…

董はと言つと店長と一緒にノートパソコンの画面を見ている。俺はこんなアニメは見たても無いのだが、見ない事には何も始まらない。仕方なくノートパソコンの画面を覗いてアニメを見た。

そして約二十数分後に第一話が終了。

俺の感想はと言つと…

マニアックすぎてダメだ…

なんだあの登場人物は？何でメイドがあんなにこいつぱい出るんだ？ストーリーもよくわからんねーぞ…

俺には全くもって面白さが理解できないアニメだった。

まったくなんでこんなアニメを店長は好きなんだ？

「つて…うわ…」

ふと横にいた店長を見ると店長はニヤケ顔で余韻に浸つてゐる…

「店長…なんて顔してんだよ…おこ…」

「何度見てもかわいいよなあ、神無月みゆき…」

「店長…おつアーメは終わつたるや…」

「可愛こよな…」

「無視かよ…」

しかし、店長のイメージが今日一日ドリームで崩壊するとは思わなかつた…

昨日まではスポーツマン店長のイメージだったのに、今はオタク店長だ…

まあこれが本来の店長なんだろうが…

「みゆき、店長はまつて置いてこいわ」

董はすみれ董はまつたと思つたと正面から俺の顔をじつと見始めた。

「な、何だよ?俺の顔に何かついているのか?…」

「…」

「そんなに見るなよ…」

「…」

「おこ…聞こてるのかよ…」

「ちよつと、大声出さなくつても聞こえてるよ……ふーん……それにしても良く似てるわね」

董は俺の顔をまじまじと見た後にそう言った。

「本当にか？俺はよくわかんねーけど……」

「そりやみゆきは自分の姿を自分で確認出来ないだろし、声だつて自分で聞く声は私達が聞く声とは違つて聞くこえるからね。そうだ！みゆきーちよつといいかな？そこには立て！」

「え？立つ？立てばいいのか？」

「ええ、やつよ」

何故か俺は言われるままにレジの前に立つた。

董はノートパソコンを覗きながら俺に色々と指示してくれる。
何故だか俺は言われるままに格好をつける。

ちなみに店長はいつの間にか元に戻り、画面と俺をずっと見比べている。

「やうやく、そこで両手を胸の前で手を組んで……うんーいい感じよー！」

「いい感じって……写真撮影か何かをされてる気分だぞ？」

「いじじyanー気にしないのーはー、そこでいいわよーあとはそこでこの台詞を言うのよ！『私はご主人様が大好きです』って

「え？ おいーちょっと待て！ 何だよその台詞は！ そんな台詞言えるか！」

「今は重要な検証中なんだよ？ いいからやりなさい。」

「何で俺がそんな恥かしい台詞を…」

「みゆきの為でしょ！ これで何かが解れば、もしかすると男に戻る方法が解るかも知れないんだよ？」

「何だと！？ 男に戻る方法が解るだと！？」

「そう言わると協力しない訳にはゆかない！」

「おいーマジで男に戻る方法が解るのか！？」

「だから、戻る方法が見つかる可能性があるってこと！ わかった？ だから協力して！」

「あ、ああ… でもさつきの台詞は流石に恥ずかしいな…」

「そんな事を言つても駄目… 早く… さつさとしないとお密さんちやうかもしねないじゃん！」

「う…」

「あーもう… うこうつ感じよ… ややこしくね、ややこしいう、胸の前で手を組んで…」

「私は…」主人様が大好きです…」

董は恥ずかしげもなく、少しもじもじと格好をつけながら台詞を言った。

聞いてる俺の方がはずかしくなる。

しかし…董には似合つてない台詞だな…

声は思つたよりも可愛かつたが、その容姿があ…

「ちょっとみゆきー言い方はわかつたでしょ～卑く言つてよー」

「え？あ、ああ…」

仕方ないな…くそ…俺は覚悟を決めて言つた。

『私は…』、主人様が…大好き…大好きです』

言い終わつた瞬間に顔がすごく熱くなつてゆくのが解つた。
うわあああ！言つてしまつた！くそー！恥ずかしい！

「おいー言つたぞーもういいだろー」

俺がレジを見るど董と店長が俺の事をあよとんとした表情で見て
いる。

「お、おい？董？店長？どうしたんだよ？」

俺がそう言つとハツとした感じで董と店長が動き出した。

「よ、よかつたわよ…なかなか…ね、店長」

「え？ああ、すいべ可愛かつたぞ？台詞を言つて顔を赤らめた所な

んてすばりじこアドリブだつた

「アドリブじゃねえ…マジで恥かしかったんだよ…」

「やうなの？本当に女の子っぽくって可愛かったわよ…悔しいけど認めなげるわ」

「別に認めなくていい…」

「おー、やうだやうだー！今の会話を録音したからみゆきも聞いてみる」

店長はノートパソコンをカチャカチャと動かし始めた。

「え？何だと！？録音した！？」

「やうよ、検証の為だしね」

「聞いてないぞ…録音するとか」

「言ひてないし」

「…」

「…」

「みゆき、ちょっとうちへ来てよー検証するからね」

「あ…わかった…」

「どうせ聞きたくなこと言ひても無駄なのはよくわかつてこな。

だから俺は仕方なくノートパソコンの前へと移動した。

「いい?」これがアニメの方…」

『私は』主人様が大好きです』

「でもって、これがみゆき」

『私は…』ご主人様が…大好き…大好きです』

自分で自分の声を聞くのはなんとも嫌なものだな…
それも女になつた自分の声とか…

「結論から言つと、みゆきはこのアニメのヒロインである神無月みゆきに容姿も声も両方そつくりである。しかし…台詞についてはみゆきの方がぶっちゃけ可愛いと私は思つ。それにさつきの顔を赤らめていたみゆきは…女の私から見てもマジ可愛かった…」

「可愛いとかそんなのはどうでもいい。それより俺が男に戻る方法とか解つたのかよ?」

「そんなのそう簡単に見つかるはずないじやん」

「おい…お前はさつき見つかるかもしれないって言つただろうが…」

「かもよ…かも…かもつて…」うのは絶対じゃないの…」

「董は元々見つかるはずないと思つてたんだろ…」

「そ、そんな事は…」

「ほりー！ 答えられねーじゃねーかー！ やっぱりな…俺は男に戻る方法が見つかるかもって言つからあんな恥ずかしい台詞を言つたのに…」

「ま、まあまあ…そのうち戻れる方法も見つかるかもしれないしさ、そんなに気を落とさないでよ」

「お前はなあ…実際に性別が変わった事が無いからそんなに簡単に言えるんだ…俺はなー！ 俺は今すっげー辛いんだぞ！ わかつてんのかよー…わかつてねーから軽々しくそんな台詞が言えるんだろー！」

俺が怒鳴ると董は言葉を失い俯いた。

あれ…ちよっと強く言い過ぎたかな…

俺の横にゆつくつと店長が側に寄ってきた。

「おーいみゆき…」

「何だよ…」

「大丈夫だ…俺はお前をすゞしく心配してる…俺は例えお前が女のままでもずっと支えてやるからな」

「断る」

「みゆき、もし戻れなくっても本当に俺が支えてやるー…」

「だから断るー…」

「安心じひ

店長は真剣な眼差しでそう言つといきなり俺の両手を握り締めた。店手を握られた瞬間に背筋が凍るほどにぞっとし、体に震えが走った。

「うわああああー何をするー離せーひきから断るって言つてるだろーがー俺は絶対に男に戻るんだー!店長に支えて貰いたいと思つてない!」

俺は強引に店長の手を振りほどいた。

「俺に気を使わなくつてもいいんだぞ?」

「使つてないー・マジで遠慮するー」

「あ、きもひ悪い…危険だー!店長が危険すぎるんだー!すっげー真剣な所が危険さを際立たせてる…

そう俺が思つてゐる…

「店長…そうこつきもい行動はマジでやめなよ…」

俯いたまま動かなかつた董すみれが声を発した。

「え?何だ?何が駄目なんだ!」

「きもい…元々男のみゆきの手を握つたりしてマジできむかー…

「だから言つてるじゃないか、俺はみゆきが女のままで大丈夫と

「 いつ事を言いたいだけで…」

「 店長はさわりあみゆきが私に言った言葉を聞いてなかつたの？私は…」

…

「 そこで董は再び言葉を失つた。

「 おい？ 董大丈夫か？俺がわざ強く言つ過ぎたから…」

董は俯いたまま首を横に振つた。

「 大丈夫…ごめんねみゆき、私はみゆきが女の子のなつた事を少し面白がつてた。そうだよね、好きで女の子になつた訳じやないのに…私はみゆき事を…」

再び董は言葉を詰まらせた。

「 らしくない…普段の董とはまったく別人みたいだ。
俺はそんなになるまで強く言い過ぎたのか？」

…
少し言い過ぎたのかもしれないな…

「 董、お前らしくないぞ？そんなに元気を無くすなよ。俺はそんな董を見ていると何だかすこく悪い事をしたみたいに感じるじやないか」

「 みゆきは悪くないよ…」「めんね、ちょっとわざみゆきのみゆきの言つた事が胸に突き刺されるような感じがして…」

「 まあ…やうだな…強く言い過ぎたかもしれないけど、でもあれだ

ぞ？俺は本当に男に戻りたいんだぞ？」

「…「ん」

「だから男に戻る方法を本当に早く見つけたいんだよ」

「そりだよね…解った、私はみゆきが男に戻れる方法を見つける為に協力するからね」

「え？本当にか？」

「うん、本当にだよ。それと…店長…」

「何だ？」

「店長もみゆきが男に戻れるように協力しなさいよねー」

「えー？俺もー？あ、わ、わかった」

「あと…みゆきに手を出したら私が許さないからねー」

「…？」

何だかわかんねーけど、知らない間に董^{すみれ}が完全に俺の味方になつたらしいぞ。

「ちよつといいかな、早速なんだけど、みゆきの事を考えると今日の店頭でのキャンペーンは止めたほうがいいと思つ」

店長は董^{すみれ}がそつ言つと呟嗟に言ひ返した。

「え？ 何でだ？ いいじゃ ないかそれ位は？ 僕がみゆきに手を出すとかそういうんじやないんだぞ？ 何がダメなんだ？」

「みゆきが神無月みゆきにそつくりと言つ事がわかつたでしょ？ それに声までそつくりという事もわかつた。という事はあのアニメを知つてゐる人がこの秋葉原に来ていた場合にみゆき寄つて集つてくる可能性がある。正直言つてあの系統のアニメはオタク系だから正直ファンも危険な可能性が…だから一人で立たせるとみゆきが危ないかも」

「ふむ… 確かにな。正直俺はやりたくなかったんだ」

「ちょっと待て！ それは偏見だ！ 僕みたいにあのアニメが好きでも健全な男だつている！」

「『めん店姫』既に店長は健全じや ないわ…」

「俺もそつ思ひ」

「店長が崩れるように床にへたり込んだ。

「自業自得だな」

「実は止めた方がいい理由はもう一つあるの」

「ん？ まだあるのか？」

「さう… それはね…」

董は俺の胸の辺りをじっとみた。

「ど、ど！」見てるんだよ

「みゆあは下着をつけてないよね

「え？ 何だと…本当かみゆあ…」

床にへたり込んでいたはずの店長が董の一言で完全復活を果した！

「おーー…そういう事に素早く反応するんじゃねー！」

「みゆあよ、今の言葉に反応しない男なんていないだ？ で？ 本當なのか…？ 下着を身につけていないこと…」

「おー…俺は男だぞ？ 俺が文物の下着とか持ってるはずないだろ？ 普通に考えればわかるだろ？ 」

俺が店長に向かつて怒鳴つていると董がいきなりメイド服の上から俺の胸を掴んだ。

「うわーー」、「うーー董ー何すんだよー」

「確認よ」

そう言つて董は数度俺の胸を揉んだ。

董が胸を揉む度にむにゅつとしたなんとも言えない感触が伝わつてくる。

「確認つて何だよーおーーー」、「うーー董ーやめろー停止ー！」

「…思つた以上に大きいのね…みゆき」

むにゅ むにゅ むにゅ…

うわー揉むなって言つてるの!」ー

「揉むなーもう確認終わっただろ? 終わり終わり!」

と言つても董はまつたく揉む事を止めない。

むにゅ むにゅ…

「…結構弾力もあるのね…」

おい…既に下着の確認なんでどうでもよくなつてゐる感じはないのか!?

それに何だ!? 結局俺は董に遊ばれてるじゃないか!
さつきの言葉は何だったんだよ…

むにゅ むにゅ…

「…こんな胸があるのに下着つけないと肩が凝るわよ?」

「つ、つけ…るつて…持つて…な…い…もんは…く…やめてくれ」

くわ…こつはなんでやめねーんだよ…
うーん…あれ…何だこの感覚は…あ…何だ…

「あん…」

俺は変な感覚のせいなのだろうか? 無意識に體や声を出してしま

つた。

「わあああーしまった…俺は向で「あん…」とか言つてるんだ
よー」

^{すみれ}董は俺が発したあえぎ声に驚いて慌てて胸から手を離した。
その瞬間に俺は慌てて両胸を両手で隠した。

「も、もつ触るなよー」

「みゆきー今…あんつて言つた?」

「ば、馬鹿ー^{すみれ}董が悪いんだろ…お前が…くや…」

「まさか…か、感じちゃったとか!…もしかして心も女になっちゃ
つてたつて事!…?」

「うわー…やめりやめりやめりー馬鹿か!俺は男…のはずなのに…ああ、
もう駄目だ…俺はもう駄目だ…わかんねー俺つて何なんだ…」

店長がゆっくりと俺の正面に歩いてきた。

「店長…」

「大丈夫だ…みゆき」

「え? 大丈夫つて? も、俺は男つて事だよな?」

店長は俺の肩をぽんと叩くと止めの一撃を放つた。

「それがのみを立派に女の方だったぞ」

「へ? オンナ? 」

俺は気が遠くなりその場でがつゝっと膝をついた。

第六話【俺は男？それとも… オンナノㄇ？】（後書き）

後書き内容紹介？

アニメ『わたしがメイドで』めんなさい

制作会社はエンジエルぶれしす

2年前の深夜アニメで毎週月曜日の「十五時」から放映していた。全十一話で終了。続きそうであつたが続編は制作されなかつた。続編を望む声も多かつたが、続編以前に制作会社が倒産した。あるお金持ちの我がまま息子の元に来たメイド達の物語で、ヒロインは神無月みゆき。他にも数人のメイドがいた。内容は恋愛系でとにかくメイドが可愛い。私の妄想アニメなのでこんなもんでも簡便を…

第七話【俺に訪れた悪夢?】（前書き）

重視^{すみれ}点から始まります。これから先の小説では何度もそういう事がある予定です。

第七話【俺に訪れた悪夢？】

みゆきは店長の一言を聞い後、突然生気が抜けたようになつたかと思つと放心状態になつてそのまま床にがっくりと膝をついてしまつた。

床で四つん這い状態になつたみゆきはそのまま固まつて動かなくなつた。

「あれ？ みゆき？ ビリした？」

店長は先ほどの一言に対する悪気などまったくないみたい。首を傾げて四つん這いになつたみゆきを見てる。

まつたく… 店長はこんなんだから彼女の一人も出来ないのね…

つと… そうじやない… みゆき…

うーん… みゆきの声があまりにも女っぽかったからついつい心も女になつたんじゃ… なんて言つちやつたけど…

それと、店長がまさかみゆきに止めを刺すなんてね… そしてみゆきは撃沈…

それにしてもみゆき… まつたく動かないわね…
かなりショックだつた様子ね。

私はしゃがみ込んでみゆきの表情を確認した。

「うわ… やばい… 田が完全に死んでるよ…

「み、みゆき？ 大丈夫？」

声を掛けてみるもまつたく反応なし。 ビリしようかな…

「みゅき～ねえ～」めんね、私もひょいとここ過ぎたかも…

ダメだわ…

「董^{すみれ}? みゅきはどうしたんだ?」

私は店長を睨んだ。

「な、なんだ? 何でそんなに怖い顔をしてるんだ?」

「店長! 店長の止めた一言でみゅきがこんなになつちやつたんだよ! わかつてんの?」

「何を言つてるんだ? 僕はみゅきが女の子らしい反応をしたから女の子だと言つただけだ。その前に董^{すみれ}も心も女になつたとか言つてたじゃないか」

「な、何よその言い方! 確かに私もそういう事を言つたけど、でも店長の余計な一言でいつなつたんじやないこのよー。」

「待て待て、だから何で僕が董^{すみれ}にそんなに怒られなきゃいけないんだ? 取り合はず言えるのは、僕にも董^{すみれ}にも原因があるって事だろ?」

確かに…

「ま…まあそつだけビ…」

「しかし…みゅきはどうなつてるんだ?」

店長は放心状態になつて固まつてこぬみゅきを見た。

「私の予想だけど、たぶんみゅきはさつきの女っぽい聲を出してしまつたのと私と店長に女だと言われたショックで意識が飛んじやつてゐるんだと思つ」

「何だそれ……あれしきの事でか？」

「うん、だつて……田も死んでるし、放心状態で固まつてゐるし……」

「みゅき……なんて弱い奴なんだ……」

「うーん……みゅきは思つた以上に女になつた事を気にしてたみたいね……」

「俺は女になつても全然平氣だけどな」

「げ……何それ？私は店長の女になつた姿とか見たくもないよ……」

「ん？もしかすると結構かわいいかもしれないぞ？」

「うわー……ないない、私は怪物女しか想像できない……」

「おいや……それって偏見だろ？」

「え？つていうか……店長つてもしかして女になりたいの？」

「……」

店長が私から田を逸らした……これは……

「マジ…ひ…かも…やうこつ願望があつたんだ…」

「ち、違つー俺は女になつてみたいなんてこれっぽちしか思つてない…」

「思つてるんじょん…」

「いや、世の中の男は少しさは女になつてみたいとか思つものだぞ？董すみれだつて男になつてみたいとか思わないのか？」

「思はない。コスプレで十分」

「…」

「何か言いたい事でも？」

店長は拳動不審に店内を見渡すとみゆきに皿をやつた。

「やつだーと、とつあえずこの放心状態になつたみゆきをどうにかしない」と…

「話を逸らしたわね…」

「違うー。話を逸らした訳じゃないー。こんな場所で放心状態になつたみゆきを放置出来ないだろ」

「どう考へても話を逸らしてるとわね…まあいか…

「まあ確かにね…レジカウンターの前でメイド姿の女の子が囮つん

「ここになつて放心状態つてこつのは頂けないわよね……」

「やうだらへ今はお密せきがいなからいいが、お密さんガ来たら
びっくりするぞ?」

「やうね…でも、もう五分くらいに経つたし、やうやう自動的に立ち
直つてくれないかな……」

かなりの時間店長とやり取りしていたが、みゆきは放心状態のま
まぴくっとも動かない。

「動きやうもないな……」

「やうね…よし…私がもう一回呼んでみるわ。反応するかもしれな
い」

「やうだな、やつてみてくれ」

「うそ」

私はやうしだきめな声でみゆきを呼んだ。

「みゆき?大丈夫?ねえーみゆきー」

「…」

全然反応がないわ…もう一度呼んでみよ?…

「みゆきー…ちよつと…ひとつかづしてよ、みゆきー」

その瞬間、ぴくりとみゆきが少し動いた。

「みゆきーへ。気がついたの？みゆきーあれ…動かなくなつた…一瞬動いたのに…」

「董^{すみれ}、もう一回呼んでみたらどうだ？」

「そうね…」

私はもう一度大きな声でみゆきを呼んでみた。

「みゆきーみゆきーーみ・ゆ・せーみゆきーいー！げほ・・・げほ
げほ」

「おい、董^{すみれ}…大丈夫か？」

「はあはあはあ…ひょっと噎^むせただけよ…」

「やうか、しかし、みゆきはまったく反応がないな

「そうね…」

私がふうと溜息をついていると店長が突然四つん這いのみゆきの両脇を掴むと強引に持ち上げた。

「え？ちよ、ちよと店長ー！？何をする気よー？」

「少しハードだが、いつこの場合に揺らす起きるだら」

「え？揺らすって…」

「いわゆるショック療法だ！」

「えー？ 何それ！？」

「呼んでも意識が戻らないんだから仕方ないだろ？」

「で、でも……揺らすとかどうなの？」

「どうもこいつも無一実行あるのみー。」

店長は私の田の前でみゆきを上下左右に激しく揺らし始めた。

「これは行幸の閉鎖された思考空間

しまった…俺は何を女にみたいな鬱々声なんか出してるんだ！？
それも意識して出したんじゃない…自然と出た…
や、やっぱいぞ…もしかして董の言つ通り、俺はマジで心まで女になつたとか？

…いや、ない！ない！ない！そんな事は絶対にない！

おい、行幸、よく考えてみろよ…

董にちょっと胸を揉まれて思わず出た声がちょっと鬱々ぽかっただけだろ？

そ、そ、うだ…そ、うだ…その通りだ！

そうだ！それだけの事だ！気にするな！お前は男だ！

そうだ！俺は男なんだ！

：

でもあれだよな

男は胸を揉まれても声なんで出れないよなー！？

え？また…よく考える？わざわざどうだつたんだ？

俺は胸を揉まれてたらだんだんと変な気分になつていつて…
それも何て言つか、男の時には感じなかつた変な感覚だつたんだ
よなあ…

ちょっと気持ちがいいといつか…

つてーつわああああー

俺は何を考へてるんだー！？

ダメだ…今は何も考へるな！

：

よし…落ち着け…

：

ああ…これが夢ならいいのに…

…夢？

そ、そつかー…ひとつ夢だー…これは夢なんだー！

俺が女になるなんて有り得ない！現実的に考えろよ、男が女になる？そんな事が現実に起つてはなんて無いだろ？

あはは… そうだ、そうだよな…なるほどな…夢だったのか…しかしリアルな夢だな…それも悪夢つていう奴だ。

「ゆき？」

ん？誰かが俺を呼んでる？

「………… ゆきー。」

誰だ？俺を呼んでるのは？

俺をこの悪夢から覚ましてくれるのか？早くこの悪夢から田覚めをさせてくれ……

その瞬間、ふわっと体が軽くなつた。

ん？何だ？なんか体が宙に浮いてるような感覚が…
と思つたその瞬間！俺の体は突然震度八の地震でも直撃したのか
といつ位に激しく揺れ始めた！

えー！？何だー？どうなつてんだー？

「いりーみゆきー起きるーつおおおおー。」

店長の叫び声にも似た大きな声が聞こえる。つていうか店長の声だ…

俺はあまりにも激しい衝撃で我に返った！

気がつぐと俺は両脇をがつちつと掴まれて店長に持ち上げられて
いる！？

そして店長は大声をあげながら俺を両手で上下左右に揺すってい
るじゃないか！

な、なにやつてんだよ店長はー！

く…しかし「れはあつこ…激しそぎる！

俺は何とか脱出しようかとジタバタと動いてみたが、激しく揺す
られてる上に空中に持ち上げられてるせいもあって体の自由がきか
ない！

でも何で俺は店長にこんなに激しく揺すられてるんだよー！？
まさか！俺が女になつたのは夢じゃないといふ現実を俺に教えた
いのか！？

とか考えてる暇はないな…「え…なんか目が回ってきたぞ…気持
ちも悪い…

と、取り合えずこの状態から脱出しなければー！

再度俺は体を動かそつとがんばった。
ダメだ…やつぱり動けない…

俺の両脇の下を掴んでいる店長の手をなんとか振り払おうとした
が揺れすぎているせいもありうまく両手も動かない。
おまけにがつちつ掴みますわ…

「解ったー店長ー俺は今女ですー認めるー認めたくないが」
「…

「…あれ？ 店長？ …

「…あれ？ 店長？ …

「…あれ？ 店長？ …

「…

「…あれ？ 店長？ …

「…あれ？ 店長？ …

「…あれ？ 店長？ …

109

「…あれ？ 店長？ …

「…やっぱ…気が遠くなってきた…

「お願いだから…やめて…」

せっぱつ聞こえない…

「…田が回ってほととど声もでねえ…

「…」

ああ…ダメだ完全に声も出なくなつた…
何でだ…何で俺がこんな田に遭うんだ…
ダメだ、頭の中が真っ白になつてきた…真っ白だ…

じつじつじつとなつた…

ガク…

みゆきはあまりの揺れの衝撃で意識を失つた。

店長に激しく搖すられたみゆきはすぐに意識を取り戻した。

「うわー…あー…店長、みゆきが気がついたよー。」

「ひおおおー…みゆき…」

しかし店長は揺するのを止めな。

「えー? 店長?」

その時、みゆきが何かを言つたのが聞こえた。それでも店長は躊躇無くみゆきを揺らし続けている。

「店長ー! ちよつとー私の声もみゆきの声も聞こえてないの?」

私の田の前でみゆきの顔色がどんどん白く変化してゆく。
店長は田を閉じて揺らすのに一生懸命だ。その顔は真っ赤になつていてる。

「ちよーー! ちよつと店長ー! やつすがだつてー! ストップー! ちよとーー! のまじやみゆきが危ない! ？」

私は大声で店長を制止しようとした。しかし店長は揺ゆのを止めない。

「ちよーー! ちよつと店長ー! やつすがだつてー! ストップー! 」

私は咄嗟にみゆきを見た。するとそのままで揺れに抵抗しているように見えたみゆきが、今はされるがままに布拉布拉と頭と手足を揺らしている。そう、まるで壊れた人形みたいになつてゐる。

「うわ! もしかして氣を失つたとか! ?
こうなつたら手段を選んでられないわ...」

「店長やめてー! 」

私はそう言いながら店長に抱きついた。

第七話【俺に訪れた悪夢?】（後書き）

おまけ？作者と対談その〇
作者「今日のお客様は行幸さんです」
行幸「作者…これは何だ？」
作者「いやー後書きの内容を思いつかなかつたからつい…」
行幸「で？俺は何をすればいいんだ？」
作者「えつと…じゃあ…質問するので答えてください」
行幸「え？えつと…了解」
作者「えつと…彼女居ない歴は何年ですか？」
行幸「聞く必要ないだろ…」
作者「えつと…彼女は欲しいですか？」
行幸「そりや…多少…」
作者「へえ…そうなんだ…」
行幸「な！何なんだその言い方は！」
作者「いや…何でもないですよ？彼女を作る為にはまずは男に戻らないとね」
行幸「今すぐ戻せよ」
作者「えーそうしたらこの小説終わるじゃん」
行幸「いいよ終わつても」
作者「一応は終わりまでもう考えてあるんだよね」
行幸「おおーそうなのかー…じゃあ俺は男に戻れるんだな！」
作者「おつと…次話を書かないよ…それじゃ…」
行幸「ちょ、ちょつと待てー…答えてから行けー」
つて何よこれw

第八話【俺に訪れた悪夢？】

私は店長に抱きついて制止した。そして店長はやつと離さすのを止めた。

「ふう……せつと止まつた…」

店長はよきよとんとした表情で私を見てくる。

「何だ！？どうした董^{すみれ}？俺にいきなり抱きつくなんて…ま、まさか！ダメだ！俺は店長でお前は店員だぞ！」

何この人！？何を勘違いしてるの！？

私は慌てて店長から離れた。

「店長！何を変な勘違いしてるのよ！」

「勘違い？じゃあ何で俺に抱きつく！抱きつくのは愛情表現じゃないのか？」

「私は別に店長に抱きつきたくなんてなかつたの！店長がみゆきを揺らすのを止めないから体を張つて止めただけ！だいたい何で私が店長なんに愛情表現とかしないといけない訳？キモイ！」

「おいおい、キモイとか酷くないか？大体、俺はみゆきの意識が戻らないから揺らしてただけだぞ？そうしたら董^{すみれ}が突然抱きついて来たんじゃないか」

「あのね…店長が揺らし初めてからすぐみゆきは涙がついたの…それに何かやめてほしいって事を懸命に訴えてたんだよ…」

「え…? それは本当なのか?」

「何で私がウソをつかなきやいけないのよ…まつたく…」

「だが今おれが持ち上げるみゆき…」

店長はみゆきの顔を見上げた。

「あ…」

「あ…じょなこよ…」

みゆきは店長に両脇をしっかりと掴まれて持ち上げられたままつな垂れていた。

その姿は本当に糸の切れた操り人形のように見えた。

真横から見たら何かの対戦格闘ゲームでメイドの格好をしたキャラが店員の格好をしたキャラに吊り上げる技か何かでK.Oされた姿にも見えなくもないけど…

「ひつじこじれ…ちよつと店長やつすぞ…みゆきが完全に氣を失つてゐじやないのよ」

「みゆきが」「うなつたのはもしかして俺のせいか?」

「もしかしても何も、じつ考へても店長のせいでしょ…」

「いや、だから俺はただみゆきを起しやつとしただけで…」

「だから、わざわざいつたたびみゆきは店長に説教されてから、べに気がついたの。それなのに気が付かないで、絶せたんでしょう。」

「え……ああさ、遙ひすの元夢中で……」

「せ……おまつね……まつたぐ……」

流口の店長も今回も懲罰を感じてこの様子だ。

「よしわかった、俺が責任もってみゆきを起しゃ」

「え？ ちょっと待つてよ店長。向かってみゆきと回脇を掴み直して伸び持ち上げた。

「ん？ 殺すだと？ 大丈夫だ！ 今度は田を開けて遙ひすからな
いよね？」

「ん？ せつだが？」

「ちゅうと何を考へてるの？ みゆきを殺す気？」

「ん？ 殺すだと？ 大丈夫だ！ 今度は田を開けて遙ひすからな

「やうこいつ事じやなくつてー。」

「じやあじつこいつ事だ？」

「せひ見てよー！」 こんな壊れたお人形みたいになつちつてるの、元のもの強引に揺らして首の骨とか折れたりばつする気よー。みゆきは今は女

の子なのよへもしかしたら「アリ」へ柔に体質になつてゐかもしけないんだよへ。」

店長はみゆきの全裸をじらじらと見た。

「確かに壊れてるな…ふむ…しかし、力が抜けているからやうやく簡単には骨は折れないと思つんだが…まあそつだな…董の言つ通りに身長も変わつてゐ所を見ても体質も変わつてゐかもしれないな…やつなると関節を痛める可能性は否定出来ないな」

「そんな醜^{うんちく}いじぱらでここの一も「やめなせこいつ」事…」

店長はしづかに腰^{こし}を下ろして立った。

「わかった、やめてね」

「だがしかしだ…」

「え? しかし?」

「みゆきは本当に女になつたんだな…すつ「アリ」へ柔らかー…」

「え?」

良く見れば店長の手がみゆきのふくよかな胸に若干かかつてゐるじ
ゃん!」

そして店長は普通を装つてゐけど、すこし顔が一ヤケてる…

「スプレーした私を興味ないねーつていいながら実は興味があつて

じりじる見てる人みたいだわ…さつと同じ部類ね…

「うと…店長…じれくれに紛れて」を触ってるのよ…」

「何だ？ちょっと胸に手が触れただけだろ、これは不可抗力だ。俺はみゆきを起しあうとしてたまたまこいつなっただけだぞ」

「店長…それは言い訳よね…言い訳するなんて男らしくない」

「なー？何だとーお前、それが目上の人に対してもう事か？」

「あーそつか！わかった！店長はみゆきの胸に手が触ってたからそつちに意識がいっちゃってみゆきが起きたのに気がつかなかつたんだ！」

「ち、違つー」

店長はどう見ても動搖している。図星かな？

「気を失つた女の子の胸を触るなんてやつぱり変態ね…」

「待て待て！俺は変態じゃない。考えてみろーみゆきは男だろ？が

…」

「ほんとにだけ男だと…なんて都合の良い言い訳…」

「言い訳じゃない！俺は事実を言つていいだけだ」

「真実って…じゃあ言い直すわよ。真実、今のみゆきの体は女の子です！」

「う…だが、やつらも言ったが、これは不可抗力であつて俺は変態ではない!」

「うし…ムキになつたし…」のまま相手をしても疲れるだけね…

「ふつ…こわよ…もうこいわよ。店長が変態だろうが変人だろうが変質者だろうが犯罪者だろうが私には関係ないもの」

「待て…どんどん言い方が酷くなつてないか? 犯罪者とか…」

「気のせいじゃない? 別に気にしなくていいわよ。で、ちょっと店長、みゆきを事務所のソファーまで運んでくれる? 但し、今度は胸を触りなによつとしてね」

「な…俺はそんなに信用ないのか?」

「無いよ。」

「…」

「さあ、私も手伝つかうぞ」

「…」

「店長…お尻も触るな…」

私は店長と一緒に氣を失つたみゆきを事務所まで運んだ。

「…みゆきっ」

誰かが俺を呼んでる…
あれ？俺は寝てたのか…なんだろ？、ひどく嫌な悪夢を見ていた
気がするな。

なんだつたつけ…えつと…確か…
そうだ！俺が女になつた上に酷く遭つてしまつ夢だー！

「…みゆきっ」

また呼ばれた…ふい…みし、起きなきゃ…

俺はゆっくりと目を開けた。
すると俺の目の前にすみれの姿が…

「あれ？董？何で董がいるんだ？」

「あ、やっと起きたー！」

「え？やっと起きたって？」

俺はゆっくりと周囲を見渡した。

暗へつて窓の無いと機械油の匂このする個室…

そっか……ここは俺の働くパソコンショップの事務所だ……

俺はこんな場所で寝てしまつてたのかよ……何時の間に寝たんだろう

う…

あれ？何かあつたつけ？確かに何かあつたような気もする……あれ？
思い出せない……

「董^{すみれ}、もしかして俺はずつといいで寝てたのか？」

「うん、さうだよ……三時間くらい寝てたかな？」

「三時間！？って今は何時だよー？」

「え？もうすぐ四時かな？」

「四時！？ってバイトが終わる時間だみな？」

「そうだね」

「で、何で俺はここに寝てたんだ？」

「えー？何？わああつた事を何も覚えてないの？」

董^{すみれ}が驚いた表情で俺を見てくる。

「え？えっと……何かすっげー変な夢みちやつたような気がする」

「え？夢？」

「さうさう、俺が女になつちやつと夢なんだよね……それで店舗にメイ

ド服を着せられたも… マジで最悪な悪夢だった

「みゅあ…」

「すみれ
董じつした？」

「みゅあ…ひょっと記憶が飛んでるかも…」

「え…記憶が飛んでるって何を言つてんだよ

「気持ちは解るナビ、ダメよ…現実逃避しちゃ…」

「現実逃避…？何だそれ？」

「何だ！？董^{すみれ}は何を言つてるんだ？」

「そりゃシロツクだと思つよ…突然女の子になつたり、店長にメイド服を着せられたり、私もみゅきの胸を揉んだりしちやつたけど…」

「え…？まあ…まさか…やつの出来事は夢じゃなかつたのか？」

俺は慌てて自分の格好を確認した。

「何だこの格好は…メ、メイド服…？それにこの違和感のある感覚
みはもしかして…？」

俺は慌てて自分の胸を触った。ふにゃふにゃと柔らかい感触が…

「！」の感触は…って事は…俺は…

「だから言つてるじゃないの… 女の子になつて店長にメイド服を着せられたんだって」

「一六〇」

「ちよつと！ 落ち着いてよみゆき！ いくら騒いでも男に戻れる訳じやないのよー私も一緒に男に戻る方法をちゃんと探してあげるから！」

「ダメだ…俺はもうダメだ…夢だと信じてたのに…」

よ、
一 だから私が一緒に男に戻る方法を探してあけるって書いてあるでし

「悪だ、悪だ… 悪であつてへれ」

- 1 -

「そ、そつか…まだこれも夢なんだ…もう一度寝ればきっと…」

俺は先ほどまで寝ていたソファーに再び横になつた。
そしてふと董すみれを見ると何かすっげー機嫌が悪くなつてる…

「ねえ！みゆきーあんた男でしょー（今は女だけぢ）だつたら今の現実をちゃんと受け止めてよー私が一緒に男に戻る方法を見つけてあげるつて…言つてるのに…もう…」

その時、ガチャー！という音がして事務所の扉が開いた。

そして店長が部屋の中へ入つて来た。

「お~みゆき、やっと起きたのか?..」

俺は店の顔を見た瞬間に店に激しく揺すられた事を鮮明に思い出した。

「ん? どうした? 俺をそんなに見て?..」

もうだ…すまつじやなー…俺は店に揺すられて…

「お~…みゆきで俺をそんなに睨んでるんだ?..」

「おこ店…みゆき俺をふるふるゼロ一出みたこシヨイクしづが
つたな!..」

俺はソファーから立ち上がると店に詰め寄った。

「え?あ、ああ…あれか…いやすまん、あれはみゆきを起こさうと
思つてだな…」

「何が起こりうと思つてだ! ホントにマジで死ぬかと思つたじゃね
ーか! 三途の川が見えかけてたぞ! 急に視界が明るくなつて記憶も
飛んだんだぞ!..」

「まあまあみゆき、落ち着け、あれはもうひとつやつ過ぎた。謝るか
り落り着け」

「許さない! 絶対に本氣で悪かったと思つてなこだりー。」

「寝てるから寝てるんだろ? ひ、みゆきが寝てた時間もひも

「そんなに当たり前だろー、バイト代金が貰えなかつたら、こんな店なんか！」

「こんな店なんか？」

「こんな店なんか？」

しまつた！バイト代が無いと生活が…や、やめれねええ！

「…い、今まで通りに働く…」

悲しい…すっげー悲しい…これが現実だ…

「ファイトよ…みゆわ」

董は俺の横まで来ると俺の肩をぽんぽんと軽く叩きながらさつ

つた。

「大丈夫だみゆき。お前はここずっとと働いていいからな

「あ、はい…これからも直しくお願いします…」

情けない…あそこでやめてやる…って言えない俺つてかなり情けない…

「しかしあ前の体は本当に柔らかいな…」

店長は俺を舐めまわすように見ながらさつ

そして俺は一瞬背筋がゾッとした。

「え？ そ、それはビリビリの意味だよ？」

「店長… 体じやなくって胸がでしょ？」

董^{すみれは} そうい言ことながら店長をすり下ろす冷たい視線で見ていく。

「えー？ て、店長… 僕の… 僕の胸に触ったのか…」

「え… いや…」

よく見れば店長の視線が俺の胸でロックオンされてる！
俺は咄嗟に胸を両手で隠した。

「見るな変態！」

「変態じやない！ 男は自然と視線を胸に持つてゆくものだ… それに
さつき董^{すみれ} が言つていた事はみゆきを起こそうとした時にちょっと胸
に… 本当にちよつと触れただけなんだ！ 不可抗力だ！」

「店長はみゆきのふくよかな胸に触れたせいで意識がそっちにいって
ちゃつたから、みゆきの声に気がつかなかつたのよね？」

「げ… マジかよ… 僕が懸命に訴えかけても搖れが收まらなかつたの
はそういう事なのかな？」

「いや、だから… それは…」

董^{すみれ} に胸を揉まれるわ、店長に触られるわ、揺らされて氣を失うわ
俺はお前らのおもちゃか！」

「……」

「おこー・杏[エンドウ]子ー。」

「あまた…あまつだけおもひやだつた

「逆に貢[アシ]するなよ…」

「馬鹿店長ー何を言つてゐるよーそんな事を言つてるとまたみゆきが放心状態になつちやうじやんーみゆき、本当じよあん、私達が悪かつたよ…」

「どひせ董[すみれ]だつて本当は俺の事…おもちやみたいと思つてたんだろか……」

「え?..違ひつて…あー。」

「違うひつて言われてもそんな簡単に言じりやるかよー。」

俺は怒鳴りながら董[すみれ]を睨んだ。

第八話【俺に訪れた悪夢?】（後書き）

おまけ情報

みゆきの出身地は何処なのか？答へは埼玉県です。
え？近いのになんで両国に住んでいるのか？

それは家にいると自由にパソコンが出来ないからといつて、埼玉
は埼玉でもちよと遠い所だからです。

まあ結局一番は自由にパソコンが出来ない（ＭＭＯが）って事です
ね。

あと、小説に出てませんけど妹がいます。現在高校3年です。
登場するかは未定ですが…妹はＭＭＯなんか興味なくってパソコン
＝オタクっていう偏見の目で見ていたようです。

決して嫌われていた訳ではありません。
という事で今回はこの辺で…

第九話【俺に訪れた悪夢?】

俺にいきなり怒鳴られた董は悲しそうな表情で俯いた。

「な、何だよ…そんな表情すれば許して貰えるとでも思つてゐるのか
よ」

「本当に悪いこと…」

董は俺に聞こえなか聞こえないか位の小さな声で言つた。

「本当にかよ?」

「本当だよ…」

「…でも、本当はやせうつて謝れば済むと悪いてるんだり?」

「…思つてないよ」

董は再び小声でやうつた。

俺は董の沈んだ姿を見て少し気持ちを押さえ込んだ。

「おひみゆき、董がちゃんと謝つてるんだ、許してやれ」

店長がまるで他人事の様にいきなり俺と董との会話の間に入つてく。

何が許してやれだ!俺は店長も許してないんだぞ!…
ここで一緒に謝らない店長は見るだけムカツク。

普通は店長が先に謝るべきだろ？結局は俺に対して悪い事をしたとかまったく思っていないんだな。

「へー、すっげー文句言ひてやりたいけどアルバイトをクビになると困るしな…

よ、よし…これからは店長を無視してやるからな…

「本当にやめんね、みゆき…」

再び董が謝つて来た。

董の表情を見てこいつは本当に悪いって思つてるんだなと感じた…俺も男だ、これ以上年下の女に対してムキになつて怒つても仕方ないな。

ここは寛大に許すか…と思つているとまた店長が割り込む。

「ほら、みゆき、こんなに謝つてるんだ。許してやれ

…何が許してやれだ…お前が先に謝れよ…と…無視するんだつた無視つと…

「わかつたよ…董。お前は反省してるみたいだし許してやるよ…だけどな、このシチュエーションはさつきもあつただろ。董は一度は謝つたのにすぐにその事を忘れて俺の胸を…も…揉んだ…よな…」

董は少し顔を上げた。

「私は謝つた事は忘れてなかつたよ、ただ…私は店長にみゆきが下着を付けてないという事を証明したくつ…つい…やつすがひやつた…」

「証明するにしても本当にやりますがだろ…」

「だつて…みゆきの胸って私よりも柔らかいし…揉んで気持ちよかつたし…」

「ちょ、ちょっと待て！何だそれは！？」

「どうか比較対象がお前の胸なのか？っていう事は董の胸は俺の胸よりもちょっと硬いのかな…って何を俺は考えてるんだ！」

「何だそれは…言つたまんまだよ？みゆきの胸って大きいのに柔らかいんだもん…ふにゅふにゅしてたよ」

「何だそのふにゅふにゅって…も、もしかして董は女に興味があるのか？そななのか！？そういう系なのか！？」

「え！？な、何を言つてるのよ！私は店長じゃないし…そういう趣味はないもん！店長みたいに変人じゃないよ…」

董は顔を真っ赤にして否定した。

「おーおいー待て待て、聞き捨てならんな！俺は変人じゃないぞ？俺は普通だ」

「ひひひひひ事にはすぐに反応するんだな店長。」

「え！？店長は絶対普通じゃないよ！だつて今日の行動とか、秘密にしていたアニメの趣味とか、私には理解出来ないし」

「な、何を言つてゐんだ？俺だつて董のコスプレの趣味は理解出来ないぞ？」

「私の趣味を店長に理解して欲しいとか思つた事なんてないわ、ただ、店長は自分の趣味を人に言えなかつたんじよ？要するに自分の趣味を隠すつていうのが理解出来ないの。私は隠したりしないし、聞かれれば話すし。自分の趣味に自信がないつて事は変な趣味なんだつていう自覚があるつて事でしょ？」

「く…それは…」

「一人の言い合いの内容はとてもくだらない事だが、それにしても今日の董は店長に強い…俺と違つて金があるから辞めさせられる恐怖感がないんだろうか…

「と言う事でみゆき、私は決して女性に興味なんてないからね！誤解しないでね」

「つーん…まあいいか…

「董、もう一度と俺の胸を揉んだりするなよ」

「うん、わかつた…本当に」「めんね」

「もういい、許してやるよ

「ありがとう…」

董はもう許してやるわ。しかし、ここでスパッと許せる俺つてやっぱり男だよな！

で…今だに謝らない店長はどうするか…と云つても何も出来ないし
な…やっぱり無視しかないか。

「みゆきーお前は俺が変人だなんて思つてないよな？」

店長が唐突に質問をしてきた。
何を質問して来てるんだよ…結論から云つと俺は店長が変人だと
思つてるんだが…
しかし、あまりに不利な事をハツキリ言つとこりで働くにしても
職場環境とかに悪い影響が出そうだし…無難に相手するか…

「えつと…わかりません」

「わかりません？それじゃ俺が変人かもしれないですって言つてる
ようなものじゃないか」

「はい」

「はい…？」

あ…しまつた…つい「はい」とか言つてしまつた。

「あ…いや…普段の店長は普通でした」

「でしたって過去形だよな…」

「あ…」

しまつた…その通りだ。

「どうなんだ？みゆきはどう思つてるんだ？ハツキリ言え！」

店長は厳しい表情で俺に詰め寄つた。

「ふ…普通だと思います…」

「そうだろ！やつぱりそうだよな？おい董聞いたか？みゆきは俺の事を変人だと思ってないぞ？」

董が俺の方を見る。その表情は仕方無い人ね…って感じに思える。

「うなんだよ…仕方ないんだよ…しかし弱い…俺はかなり立場が弱いな…」

「董だけだぞ？俺が変人だと思ってるのは」

いや、俺もそう思うけど言えないだけだ…

「そうですかー？別にみゆきがどう想つても私は店長は変人だと思つてゐりますから！」

「ちょー！まだ言つのか？董も強情な奴だな

「強情じやなくつて素直な意見ですけど？」

「く…」

言い合ひは相変わらず董優勢だな…

「 もつここですか？」^{おお}

「 ……」

「 店長は無言で董を見ている。聞こ返したいのに何も言えないって
いつ表情だな…」

「 みゆきも立場はわかるけど、思つてる事は素直に言つたまうが
いよ…」

董が俺の方を見ながら言つた。

今ここで余計な事を言わないでくれよ…ほりー店長が俺を睨んで
るじゃないか！

俺は変な事を言つたら店長に辞めるとか言われかねないんだ！

「え…こや…うそ…あは…」

「みゆき…お前はやっぱ俺の事を？」

「え？こや、ふ、普通だと思こます。誰でも隠し事はあるし…」

俺はそう言いながら董を見た。董は俺の言つた事に不満そうな顔
をしている。

そして声は聞こえないが口が動いた…何か言いたいのか…えつと
…い？く？じ？な…「意氣地なし！」だと…?
くそー…何が意氣地なし！…つていうか…意氣地なしよな…今
の俺は…

「 店長、店長は何でみゆきに謝らないの？」

董は店長に向かって言った。

「ん？ 僕が何でみゅきに謝る必要があるんだ？」

「…はい…もうここです…」

董はやつぱりと大きな溜息をついた。

どうやら店長の相手をするのはやめたらしい。

俺も今更店長に謝られても氣分がすつきつする訳じゃないし、もううづうでもいい。

「やつだみゅきー。私ね、お詫びどころ訳じやないけど、みゅきが男に戻る方法！ 本当に一緒に探してあげるからねー！」

董は俺の方を向くと突然大きな声でやつぱりした。

「え？あ、ああ、ありがとー」

「おー、みゅきー。俺も一緒に探してやつぱりー。」

「え？あ、じつも…」

突然話題が変わつてびっくりした…

しかし…董は確かに一緒に探してくれたが…店長はどうなんだ？

どうも勢いだけで言つてゐる気がするな…でもまあ…探してくれると言つてゐるんだから断るのもおかしいしな…

「しかし… 本当にどうすれば俺は男に戻るんだ？」「

「あ、う… どうすれば戻れるのかな…」

「お、みゆき…」

「え？ な、何ですか店長」

「俺も一緒に捜してやるが…」

「は、…やるが…？」

「捜してやるが… もしも… もしも万が一だぞ？ もしもみゆきが男に戻れ無くっても大丈夫だぞ？ 俺は今のお前を受け止めてやる覚悟は出来ていてるからな…」

受け止める覚悟は出来てる… こんな… こんなすげえ… そんな覚悟は必要ない！

「げー店長ー、みゆきが男に戻れ無くっても受け止めてやるって… 本当は戻つて欲しくないんでしょー、みゆきの体が田舎なんじょー、キモイ… いやらしく…」

「董何を言つたかー、違うー、俺はそんな事はまったく微塵にも思つてないぞー？」

「ふーん… でもね、みゆきがもしも女の子のままだつたら…」

「ん？ だつたら何なんだ？」

「わ、私が…面倒見る…」

え…? 何だ? 董は何を言つてゐんだ…? 僕の面倒見るつて何だ…?

「す、董! ? どういう意味だよ」

俺が動搖してゐるのを見て董は慌てて自分で自分をフォローした。

「へ、変な意味で取らないで! 私は店長が危険だからそれならつて意味で言つただけ! 別に何をしたい訳じゃないからね!」

董の顔が真っ赤になつてゐる。

「そ、そつか…びつくつした」

「待て! 何だ? やつぱつお前らは俺が信用出来ないのか? みゆきは俺を信用してるだろ?」

「うーん…何で…店長は…店長は…」

董と店長なら確実に董の方が信用出来るな。

だからと言つても董に面倒を見て貰つのもあり得ないし…

「あのれ…信用とかそういう事よりも、俺はもしも戻れなくとも一人で生活するし…別に店長や董を頼つたりしないから…というか…絶対に男に戻るからそんな心配はいらないし」

「みゆき? 別に遠慮しなくていいんだぞ? 僕はみゆきの力になりたいんだからな」

と言つてゐる店長の不気味な笑み。視線は完全に俺の胸にロックオンされてゐる…下心が見え見えで危険だ…

「店長の視線がいやらしい…みゆきの胸ばつか見てる…」

俺の思つてゐ事を董^{すみれ}がハツキリ言いやがつた。

「み、見てないぞ！」

店長は慌てて視線を外した…

「あ、そつだ！みゆき」

「ん？」

「店長と話をした？何をだよ？」

「みゆきが氣を失つてゐ間に店長と話をしたんだけどど」

俺はちらりと店長を見た。視線が何時の間にか俺の胸に戻つてゐるじゃないか！

あれだ…こ^う立場になつて解つたが、男の視線つて思つた以上にハツキリわかるんだな…女の子か男にじつと見られるのが嫌つて気持ちがすづ^づげーわかる…

「ねえ？みゆき聞いてる？」

「あ…ああ…聞いてるぞ」

やばい、聞いてなかつた…

「もう一回呑うよ～まず一つ田舎みゆきは今日まだ下着をつけてないから店頭キャンペーンはなしとこいつ事ね」

「なしが…でもあれだぞ？下着も問題だが時計を見ろよ、バイトの終わる時間になってる。時間的に考えてももつ無理だぞ？」

俺がそういうながら再びひらりと店長を見ると今度は店長と田舎が合ってしまった。

店長は怪しい笑みを浮かべると俺の方へと歩き出す。そして俺の真横まで来た。

真横に立たれると改めてその身長のでかさが際立つ…威圧感をすごい感じじる。

「な、何だよ店長ー？何の用事だよ…た、触つたら怒るぞー。」

「大丈夫だ、触つたりしない」

「じゃあ何だよ」

「いや、あれだ、みゆきのやる気があるのなら今からでもキャンペーンOKだぞ？」

そう言つて店長は俺の肩に手を置いた。その瞬間に背筋がゾッとした。

おこ一触りないつて言つてこいつそり触つてぬじやないかーと心の中で文句を言つた…

「みゆき…」

「な、何だよ

「キャンペー... やりなこか?」

「わー田がー店長の田が怖いーだ、だが断るぞ! 流石に断らないとー。

「えっと、お、俺は...」

俺が途中まで断つて文句を言いかけていたと董^{すみれ}がそれに割り込むように大きな声で店長に向かって言った。

「ちよっとーれつて店長と私で話をしたばっかなのに今更何を言つてゐるの? 今日は店頭キャンペーンはなしつて決めたんだから何でみゆき!』やらないか?』とか馬鹿な事を言つてるのよ!」

「え? いや、俺は別に強要してない感じじゃないぞ?」

「私が見れば脅して強要してるよつしか見えないわよ!」

「俺はみゆきのやる気があればと叫んでただろ? そいつをからいらむる事に突つかつてくるな!」

「私はみゆきの事を考えてあざてるのー店長には任せられないから

「何だそれ? みゆきの事を考えてあざてる? 俺だつて考えてるんだぞー!」

「私の方がちやんと考えてるわよー。」

「おー…何だ？そんなにムキになつて…もしかしてお前…みゆきが好きなのか？」

て、店長…何を突然言い出すんだよ…？

「えー…な、何で私がみゆきなんかを…わ、わ、私はね…男になんて興味ないんだから…」

「ほつ…興味ないと…じゃあなんでそんなに動搖してるんだ？怪しいな」

確かに…董は動搖してゐるよつとも見えるが…でもまさか俺を…な
いだろ？

「い、今はそういう話ぢやないでしょ…みゆきの事を話てるのに何
で私の事なんか…」

董はそういうと俺の方を向いて俺を指差した。

「見なせ…」こんな状態になつてゐるから心配してあげてるだけだし
よ…」

店長は俺の方をじつと見た。

「まあ…お前が誰を好きにならつが俺の知つたこいつぢやないけどな」

「だから何で私がみゆきなんか好きになるのよ…私の理想はもつと
レベルが高いんだからね…」

おーおー何だか酷い言い方されてるな…その台詞は俺はレベルが

「わかつたからムキになるな、キャンペーンは無しでいい」

「だから最初からそつまつてゐるじやん…みゆきは解ったの? やんな
くといいんだからね」

「どうか最初からやる気なんて無いんだナゾな…」

「ああ…わかつた」

「あとせ、もひ四時だから私とみゆきは上がりつて〇くつて事」

董すみれがそつまつた瞬間に店長は驚いた表情になつた。

「ちよつと待て…みゆきはシフトで四時までだつたからいいが、
は五時までだら…お前まで上がるなんて聞いてないぞ! ?」

「店長、もう僕からのバイト君は来たんでしょ?」

「来てるが、それは関係ないだろ?」

「関係あるよ。私もみゆきも休憩とつてないし、バイト君がいるな
ら休憩の一時間分早く終つてもいいじゃん」

「待て! 僕だつて休憩を取つてないぞ?」

「それは店長だから仕方ないでしょ?」

「何だその言い方は? そんな我慢を言つてるとお前のバイト代カツ

トするぞ?」

「何それ? 私まで脅すつもり? いいわよ? 別に私はお金に困ってないし、一時間分引けば? 何なら今日の分もいらないわよ?」

「いや、そういう事じゃなくって…俺は董^{すみれ}に時間まで仕事をお願いしたいだけなんだが」

「うわ…董^{すみれ}の言い方は強いな…流石お金に困つてないだけある。正直うらやましい…しかし…」^{ここは店長の言い分もわかる気がする…}
これは董^{すみれ}の我傍^{そば}だろ?」

「と詰^つう事なの…もう私もあがるからね! はいはい…着替えの邪魔^{すみれ}! 出ていって!」

「待て! まだ話は終わってないぞ!」

「煩い! もう終わったの!」

「ちよーちよーと待て勝手に決めるな

「何よ! 店長まさか私の裸を見る気なの?」

「え? いや、そういう訳じやない

「じゃあ出て行つて下さー! 女子は着替^えです

「まひーみゆきは男だらうか!」

「今は女だからここのー!」

董はそのまま店長をグイグイと事務所の外へと押し出した。

無理やり追い出しだぞ……なんて強引なんだ……

「おーーーううとま……」

バタンーかちやー

董は店長を追い出すと扉に鍵をかけた。

第九話【俺に訪れた悪夢?】（後書き）

（後書き）（永井董【ながいすみれ】について？）

董^{すみれ}は裕福な家庭に育つた一人娘です。

実は勉強も出来るとしても優秀な女の子ですが、どうも遅い反抗期なのが親の言う事を聞いていません。それで実家を飛び出て都内に一人暮らしをしています。（しかし親の持っているマンションに住んでる）

パソコンは中学時代からやつており、親に隠れて遊んでいました。コスプレはあるMMOのオフに行つた時に誘われたからやり始め、それから嵌つてしまつた様です。（もちろん親に内緒で行つてますし、コスプレも内緒です）

この子は恋愛に関しては相當に初心です。だつてまともに恋愛した事がないのだから…

しかし、一人娘で裕福に不自由なく育つた為に相当に我が儘です。彼氏なんて出来るのでしょうかね…最後までパソコンが恋人とか？読者の皆様も寛大な気持ちで見守つてあげて下さい。

第十話【俺に訪れた悪夢?】

「ドンドンドン...」と店長が激しく扉を叩く音が室内に響く。
店長は董に無理矢理事務室から外へ出されてかなり怒っているだ
けり...

しかし、そんな事なんて一切気にしていない董は扉の前で勝ち誇
った表情で腕を組んでいる。

「ふう... 邪魔者は居なくなつたわね...」

「いや... お前が追い出したんだろ...」

「え? 別にいいじゃないのよ何だつて、居なくなつたのは本当なん
だから」

「いや、よくないだろ...」

その時、「おいー開けろー」話はまだ終わっていないぞ」と扉の外か
ら店長の怒鳴り声が聞こえた。

そしてドンドンドン...と再び扉を叩く音が室内に響く。

「おい董、マジでこんな事してもいいのかよ? 店長はかなりお怒り
モードだぞ? 董はバイト代がカツトされても平気なのか? いや、バ
イト代ならまだいい、バイトを辞められたらどうする気なんだ
よ」

俺がそう言つと董はドンドン...と叩かれて今も振動している扉
を見ながら言つた。

「別にいいよ。私はお金に困つてる訳じゃないし、辞めりつて言わ
れればこんな店なんて辞めて…」

董の話が途中で突然途切れた。

そして董は俺の顔をじっと見ている。

ん? 何だよ、俺にここまで話して察しりつて事なのか?

「どうしたんだよ? 金に困つてないから辞めてもいいって言いたい
のか?」

俺がやつぱり董は不満そつな顔に変化した。

なんだよこいつ… 何が言いたいんだよ…

董に先ほどまでの威勢の良さは無くなつた。

「辞めてもいいわよ… こゝけど…」

「何だよ… 結局は辞めたくないんだろ?」

「違う、こんな事で辞めるのは馬鹿じやん。私の負けみたいにな
るでしょ」

「だから何だかんだ言つても結局は辞めたくないんだろ? じゃあ店
長にお前が嫌でも謝つた方がいいんじゃないかな?」

「… それはやだ」

「おこおこ… 何が「やだ」だ… 予供じやあるまこし」

「いいじゃないのよ…どうせ私は子供よ…別にみゆきには関係ないでしょ！」

先程まで元気の無かった董が、今度は顔を真っ赤にして俺に怒鳴つてきやがつた。何だ？ 逆切れかよ？

「ああ、別に俺には関係ねーよ。だけどな？ 色々と事情があつたにせよ、俺に関わったせいでお前がこの店を辞めた！ っていうのは俺はやなんだよ！」

俺も董に向かつて怒鳴つた。すると董は何も言い返さずに不満そな顔で俺の顔を見ている。

「何だよ？ 言いたい事があれば言えよ」

俺がそう言うと董は唇を噛んで俯いた。

そしてこきなり「…ごめん」と小さな声で謝つてきた。

何だこいつは… 喜怒哀樂が激しいといつか… 難しい女だな…
しかし… 逆に考えれば自分の考えに対して素直なんだろう。でもまあ感情のコントロールが出来ないって事はまだまだ子供だよな。

「みゆき…」 めんね… そうだよね、みゆきには迷惑かけれないし…
でも大丈夫だよ！ きっと店長は私に辞めろなつて言わないよ。それ
に私も辞めるつて言わない、だから今日は終わりでもう着替えて帰
ろう」

しかし結局そういう結論になるらしい…

前言撤回、こいつは素直じゃなくつて自分勝手で我慢なだけなんだな。

まあもういいか…これ以上俺が何か言うのも面倒すぎる。
確かに店長はああは見えても結構へたれだから董に辞めろとか言
わないだろうしな。

「わかつたよ…それにしても今日の董は店長に対して超強気だった
な」

俺がそう言つと董は赤渕の眼鏡を右手で触りながら言つた。

「私はいつもは我慢してただけなの！今日は我慢しきれなくつて思
つてることをハツキリ言つただけ。ほら、今日の店長は何かおかしか
つたつていうかさ…変な事ばかり言つてたし、怪しい趣味も発覚し
たでしょ？」

「まあ…確かに…おかしかつたし、変な趣味も発覚した」

「私ね、まさか店長があそこまで変人だと思つて無かつた」

「確かに…って、また、あそこまでつて…董は前から店長が変人だ
と思つてたのかよ？」

「え？何それ？当たり前でしょ？みゆきこそ店長が普通の人だと思
つてたの？ただのパソコンショップだつたらまだしもこのお店は同
人系や十八禁のソフト、コスプレグッズまで取り扱つてのお店
よ？こんなお店の店長が常人に務まるはずないじゃん。何かあるつ
て思わない普通？」

「…俺はそんな事をまったく思つた事のなかつた…気にした事も
無かつた…

もしかして俺も董に怪しい奴とか思っていたのか？店長が常人

で務まらないと言つのであれば、店員も常人では務まらないて考
るだろ。

そうなると董自身はどうなんだ！？人の事を言えるのかよ！だい
たいコスプレグッズはお前がこのお店でバイトを始めた時に店長を
そそのかして取り扱う様にしたんだろうが…なんて俺からは言えな
いよな…

俺がこのお店が働く事になつた切欠はこの店の前に張つてあつた
バイト募集！の求人ポスターだ。細かい事なんて考えて入つた訳じ
やない。

しかし、よく考えれば何で董はこの店で働く事にしたんだ？金の
困つてないし、18禁ゲームに興味ある訳でもないし、同人系ゲー
ムソフトまで扱つてるこのお店に…何でだ？

「ねえ…みゆきつひそ…」

「え…？」

「何を驚いてるのよ？」

びっくりした…ちょっとと考え込みすぎていた…

「何でもない！で、何だよ？」

「みゆきつひそ、自分しか見えてないでしょ？」

何だそれ？といふか、お前が人の事を言えるのか？と言い返した
くなる。

「それってどうこいつ意味だよ」

「え？……えっと、店長が普通だと思っていたとか……そういう事よ

「俺は他人の事なんてあまり気にしない性格なんだよ」

「そういう性格だからみゆきは…」

董^{すみれ}はまた途中まで言いかけた所で話を止めた。

「何だよ？俺がどうしたんだよ？」

「……」

董^{すみれ}は何も答えずただ呆れた表情で俺を見ている。

「おい、董^{すみれ}?だから何だつて聞いてるんだろ?いきなり黙るなよ」

「別に…もういいよ…」

「言いかけて止めるな、気になるじゃないか」

「気にしなくてもいいよ、今はそんな事よりも今は男に戻る方法を見つけるのが先決でしょ？やつきの事はまた今度話すからいいよ」

「確かに、今は男に戻る方が先決だ。だけどな、気になるものは気になるんだよ」

「だからもういいって、気にしないで」

董^{すみれ}はそう言って俺から視線を外した。

「おい！」

董は俺の呼び声を無視して自分の鞄を『ソノソト』^{いじ}弄り始めた。

くそ……無視かよ……しかし結局なんだつたんだ？

董の奴は何が言いたかったんだ？俺にもつと他人の事を観察しきるか？

俺はあれだぞ？別に自分の事しか考えていらないなんて事はないし、最低限は近くにいる人の事を考えている。現にさっきは董の事だつて心配してやつてるし。

ましてや俺は董に迷惑をかけた記憶もない。だから董にあんな事を言われる筋合いなんか……

と考えていたら突然『ぐにゅ…』っと胸を驚撃みにされたような感触が！

俺は慌てて自分の胸を見た。すると董が両手で俺の胸を驚撃みにされてるじゃないか！

「お、おいー何してんだよ！胸はもう揉むなつて言つただろー！」

「まだ揉んでない！掴んだだけよ！」

「同じだー同じー触った時点でアウトー早く他の手を離せー！」

俺はそのまま董の両手を振りほどいた。

「まったくー何するんだー！」

「何つて？私が何度もみゆきーって呼んでもみゆきが返事しかったのが悪いんでしょ？私は自分の世界に入り込んでたみゆきをこっち

の世界に連れ戻してあげたんだからね

ぐ…確かに俺はまた考え耽つていたが…

「だ、だからと言つて何故俺の胸を掴む…」

俺は両胸を両手で隠しながら呟ついた。

「何でつて、胸を掴むのが一番効果的だと思つただけ。別に揉みた
いとか思った訳じゃないよ」

「どんな理由だろうがもう触るなって言つたじやないか！もう一度
と触るなよーわかったか？」

「はいはい、わかつたわかつた、触らない触らない

」こいつ絶対わかってねー！

「よーし、みゆきが我に戻った所で変態店長をほつておいて帰ろう
よ。扉を叩くも聞こえなくなつたからきっと諦めてお店に戻つたん
だと思つし」

「ん？確かに扉を叩く音が聞こえなくなつたな…マジで諦めたのか
？」

「多分お密さんすみれが來たんじゃないの？」

そう言つと董は扉の鍵を外すと躊躇なく扉を開いて外を覗いてい
る。

「うん…せっぱばはいつ」

董^{すみれ}は再び扉を閉めて鍵をかけた。そして振り返ると何故か俺の方をじっと見る。

「何だよ？」

「みゆき…本当に女の子になっちゃったんだよね…」

「おーおー、何を今更言つてるんだよ」

俺がやつ言つと董^{すみれ}は俺の横まで歩み寄り、突然俺の周りを廻りながらジロジロと全身を見はじめた。

そして董^{すみれ}は俺の田の前で立ち止まり俺の瞳をじっと見ながら言つた。

「ねえ…貴方つて本当はみゆきじゃないんじゃないの？」

「え？…ちょっと待て…何でそつなるんだ？俺はみゆきだ」

「本当？」

「本当だ…今朝俺がみゆきだつて検証したじゃないか！」

「…でも…実は無線機が耳に仕掛けあって、それで貴方は本当のみゆきからの指示で動いているとか？」

「無い…見ひ…無線機なんて何処にもないだろ？が…」

「じゃあ、実は本物のみゆきを拉致監禁していて、そこで私達の情

報を聞いた上で準備万端にして「」に乗り込んできたとか?」

「無い! 大体そんな事をしても何のメリットもないだろ? うが!」

「じゃあ、やっぱり本当にみゆきなの?」

「だから本物の^{みゆき}行幸だつて言つてるだろ? 何で俺が嘘をつく必要があるんだ?」

「…そつか…やっぱり本当にみゆきなんだ」

「俺だつて信じたくないんだ…」「んな事…」

俺はそう言つて事務所の奥に視線をやつた。するとそこにある姿
見に映るメイドの格好の自分の姿が目に入った。

「やつぱり…俺は女になつたんだよな…」

^{すみれ}董に言われたからといつ訳じやないが、今更ながら女になつた事
はショックかなりだ…

そしてこのメイド姿…情けなくて涙が出そうだ。マジでどうして
こうなつたんだ。

「みゆき、そんなに落ち込まないでよ」

「これが落ち込まずにいられるか…女になつた事もだが、俺は」の
先ずつと店長にこんな変なメイドの格好とかを強要されるかもしれ
ないんだぞ? それを考へると…最悪だ…考へたくない…」

「だ、大丈夫だよ

「おい… そんな簡単に大丈夫なんて言つなよ… お前はもう解つてると思つが、このバイトに俺の生活がかかつてるんだよ！ 生命線なんだ！だから店長にまたメイドの格好をしりつて言われても断れないんだよ…」

俺はそう言つと「ふう」と大きな溜息をついた。

すると董^{すみれ}は今度はいきなり俺の両肩を両手で掴んだ。そして眞面目な表情で言つた。

「みゆき、大丈夫！ 私がみゆきをメイドの格好なんかさせない！ 断固として拒んでもげる！ それでももし店長が無理矢理にさせたらセクハラで訴えればいいの！」

「何だ！？ 何なんだ！？」

「え？ セ、セクハラ？？？ 僕が店長を訴える？？？」

「うんー… どう訴えてやるのー？」

「待て、俺は男だぞ？ 男でも訴えられるのか？」

「大丈夫よ、セクハラに男も女も関係ない！ それに今のみゆきは女の子なんだからOKよー！」

「…」… 憎く眞面目に言つてゐるが、もし俺が店長を訴えたりしたらこのお店を辞める事になるじゃないか… 俺はこのバイトを続けたって言つてるんだぞ… 別に店長をどうにかしたいんじゃないんだ。

「だけど… あれだ… ま、まあ… 一つの手法として参考にしておく…」

だからもう一つ理由で俺は店長を訴える立て出来ないんだよ。

「何でそんなに弱氣なの？よしーもしみゆきが訴えれないのなら、私が店長を訴えるわ！」

「えー？^{すみれ}董が！？待て、何でお前が俺の代わりとか、別にセクハラとかされてないだろ？」

「されてない！だから私の場合は婦女暴行で訴えるの」

「ちよ、ちよっと待て！いつお前が店長に暴行されたんだよ」

「されてない！」

「セクハラも暴行もどっちもされてないんだろう？ダメだろ？そんなのダメだろ！？」

「大丈夫！私と店長の話を警察官が聞いた場合、絶対に私の話を信じるはず！それにセクハラよりも婦女暴行の方が効果発動が早いわ！どうせやるなら即効性がある方がいいでしょ？ほら、MMOでも効果が高くて即効性がある魔法とか薬が一番いいじゃない」

「待て！確かにMMOでは董の言つ通りかもしない。しかしここは現実社会だ。お前のやううとしているそれは犯罪だ！いくら何でも無実の罪を店長に被せるのはよくないだろ？」

「え？何よ？みゆきって結局は店長の味方なの？」

「馬鹿か！そういう問題じゃない！」

「じゃあ、やつぱつみんなを守るには…私が鬼になるしかない！」

「おこ待て、鬼にならぬべしろか犯罪者になるわ」

「…仕方ないわね…未成年ならきっと…」

「やめろー何を言つてるんだ！大丈夫だからー俺はちゃんと店長に
断るからーよーし断るぞー！絶対断るぞー！」

「え？本当に？別に無理しなくてもいいよ？」

「大丈夫だー俺も男だーやる時はやるーそれにお前にそんな事をやらせて警察に捕まつたなんてなつたら洒落にもならない」

「え？それってもしかして私の事を心配してくれてるって事？？」

「違うーお前の無謀な行動計画を心配してるので事だー」

「えー…やつか…でもやつよね…まあ多少のリスクはあるよね…」

「いや、多少ビリのリスクしかない」

「わかった、みゆきがちゃんと断われるんならこよ

「こつマジ危ないな…マジで言つてゐのか[冗談なのかわかんね
けど…

しかしそうきの表情、董りじくないといつかすゞく真面目だった
董なら店長を訴えたり平氣そつだし、犯罪に加担しかねない…
ここは俺がメイドの格好をされられる事より、こいつが変な行動

を起こさない様に俺は大丈夫だつてもう一回言つておかないとな…

「董^{すみれ}、もう一回言つておぐが、俺は自分の事は自分でなんとかするから、お前は俺が男に戻る方法だけを探してくれ」

「うん、わかった」

そう言つと董^{すみれ}は二口づと微笑んで俺の両肩からやつと手を外した。そして董^{すみれ}はロッカーの前へ移動した。

ふう…危なかつたな…ここは何とか収まつたか?

「よし、今日は上がるよ?私は家に戻つたら早速ググツて男に戻る方法を探してみるからね!」

「えググる?女になつた俺が男に戻る方法なんてググツても出ないだろ?」

「え?出ないかな?やつてみないとわかんないじゃん?」

「いや…それは…」

「大丈夫、ヤフーもあるから!」

いやいや、そういう事ぢやない…ネット検索なんてやつてみなくとも解るだろ…

普通そんなのググツても出ない…もちろんヤフーでも出るはずもない。

精々出たとしても今の俺には関係ない事ばつかだと思つが…
例えば…女装して女になる方法とか性転換手術で女になる方法とか…そつち系しか出ないと思うんだよな…

でもまあ俺の為にやつてくれるんだし……文句は言えないよな……

「心配なうううとかライブニアとかもやつてみようか?」

「いや、いい……多分結果は見えてるから」

「わづかな?結構すぐ見つかってー!」

すみれ
董のそんなポジティブさが羨ましそうな…

「よし、私は着替えるね?」

「あ、ああ、そうだな……よし……着替えるか……つてーお、おこーお前
せじいで着替えるんだよ」

「え? もちろん! ジムよ」

「い、いじだとー?」

俺は思わず数歩後ろに下がった。

ふと董を見ると、董はニヤリと不気味な笑みを浮かべながら俺を見ていた。

続く

第十話【俺に訪れた悪夢?】（後書き）

人物の性格？永井董の性格

本文を読んでわかるとおもいますが、董はかなり喜怒哀楽の激しい性格の子です。友達として付き合うと面白いかもしませんが、親友として付き合うのはちょっと大変かもしれません。あと、彼女にするにはちょっと性格上の問題も大きいかもしません。あと、悪い性格として、自分の事は棚にあげますw

やつてる事は悪い事ではないと勝手に思い込みます。後でもちろん悪かった場合は悪いと気が付くのですが…

強情の性格なのでわかつていても曲げるのが苦手です。これから先の成長に期待したい所ですね。

第十一話【俺の田の前にいた小悪魔？】

「ねえねえみゅきい？もしかしてわあ…変な想像してるんじゃないの？」

すみれ董は怪しい笑みを浮かべてながら言った。

「え？何を言つてるんだ、何で俺が変な想像なんてしないといけないんだ！」

すみれ董は俺の話なんか聞いてない…いや、無視している。

「おい、何だよそれ？」

「だから、体が女になつても中身は男なのねつて事よ」

すみれ腕組みをした董は首を小さく縦にふりながら勝手に納得している。

「当たり前だろ？俺は男だ！っていうか俺は変な想像なんてしないつて言つてるんだよーちゃんと聞けよー！」

すみれ俺の言葉は董には効果が薄いのか聞いていないのか、いくら怒鳴つても董の表情に変化は見えない。それどころか更に楽しげな表情に変化している。

「聞いてるよ？一応…でもさ、いくら変な想像なんてしてないって言わてもそんなに顔を真っ赤してたら何の説得力もないんですけど

ど？」

董は楽しげに、そして勝ち誇ったようにそう言つた。

俺は董に言われる前から俺は赤面していると気が付いていた。自分の顔がものすごく熱くなっているのがわかつていた。しかし…

「これは…」の部屋が暑いからだ

負けたくない！

「ふーん…別に私は暑くないけど？」

「俺は暑いんだよ！」

「へえ…」

「その…信じてないだろ？」

「そりやそうでしょ？さつきまで暑いなんて一言も言つてなかつたじゃん。それにさつきまでそんなに顔も赤くなかった。」

確かにその通りだ…董は自分が優位に立つた時に変に洞察力が働く。しかし逆に追い込まれると冷静さを失う。

どうして解るのかつて？それは…実は俺は董のやつているMMOのアカウントを持っている。そしてちゃんとキャラもいる。

俺は董のキャラ名を知っているから、以前に董のプレイを見た事があった。

PvPと言われる対人対戦を観戦した時、たまたま董仲間が全員死んでしまった。

しかし圧倒的な火力を誇る董のキャラであればそこからでも勝てるんでしまった。

董は董のキャラであればそこからでも勝てるんでしまった。

たはず。それにもかかわらず簡単なミスを繰り返して簡単に死んでいた。動搖していた訳だ。

まあ一言加えると、俺のキャラはそれ以来ENしていない。

要するに、董に言い負けない為には、俺が董より優位に立たないといけないんだ。

朝の店長の様に圧倒的に優位な立場だった時は董には言い争つても勝てる。

しかし、今の状況的に優位に立つのは不可能に近い……だいたい俺はもう見下されてい……

「何？みゆき？何を考え込んでもるのよ」

とりあえず、JICOは優位に立つのは無理だからJICOの場を凌ぐまつが先決か……

「別に……言つとくけどな、俺は本当に変な事なんて想像してないからな」

俺がそつ言つと董は腕組みをやめて今度は腰に手をやつた。

「まあいいわよ……別にみゆきが何を考えてようが私には関係ないもの。でもね」

「でも何だよ……」

「よく考えてみてよ、今まで私がJICOで服を脱いだ事なんてある？着替えるって言つてもお店のHプロンを取つてロッカーに入れるだけだよっ！」

俺はその一言でハツとした。

「そ、そつだ…そつだつた」

自分の顔がさらになくなるのがわかる。頭から湯気が出るかと思
う程に熱く汗が滲み出でてきている。

今の俺は相当顔が真っ赤になつてているのだろう。

しくじつた…俺の方が冷静さを失っていた…

俺がメイド服を脱がないといけないからつい董も服を脱ぐのかと
勝手に思つてしまつた…

そして董の下着姿も思いつきり妄想してしまつた…

そうだよな…俺だつてそうじやないか…ここのお店は私服にエプロンでOKなんだよな…

「あつと私の下着姿でも妄想してたんでしょ？」

いきなり俺の心を読まれたかのような質問をしてきやがつた！？

「…………え、な、な、何で俺がお前のし、下着姿とか…」

「…す「ぐわかりやすい反応…でもまあ……男なんだから当たり前よね」

正直、男と付き合つた事すらない董に言われるとかなり悔しい。
お前に男の何か解るんだと言つてやりたい…

「でもね、私、みゆきになら下着姿くらいなら見られても平氣かな
？もしかして本当に見たいの？私の下着姿」

董はそう言いながらエプロンを取つて机の上に置いた。

「、」こつは何を言に出すんじゃ！…そつこつ事を何故に平氣で言える！

俺は男だぞ！？いくら女らしさが見えない董すみれでも一応は女。

興味が無いない奴は男じゃないだろ！？

……じゃない！…そつじゃないだろ！？…びつしたんだ行幸みゆき、しつ

かりしろよ…

ダメだ…今の俺は完全に翻弄されている…

「な、何を言い出すんだ！…何で俺がお前の下着姿なんか！…まったく興味は無い！」

と言いつつも俺の視線は無意識に董すみれの胸に…
これじゃあ、まったく説得力がない…

「みゆき、そつ言いながら私の胸見てたでしょ、いやらしい…」

「い、いやらしくとか言つな！…だいたい、お前が変な事を言つから
だらうが！…これは男子として健全な反応だ！」

俺は開き直つた言い訳を言つてみた。

「何？それって私を女として見てくれてるつて事？」

「お前は元から女だらうが…」

「そつ意味じやなくつてさ、ほら、一人の女性として見てくれてる
の？」

「だから、前からお前は女性だらうが、それ以上でもそれ以下でも
ない」

俺がいつ言つと董は蔑んだ田で俺を見た。

「な、何だよ…」

「顔も耳もすつじぐく真つ赤にしちやつて、たかが下着くらいで真つ赤になるとか、ばつかじやないの？」

そう言つ董の機嫌は先ほどとは一転してかなり悪くなつてゐる。

「俺は馬鹿じやないー。どつするんだよ？俺がもし平然とお前の下着姿を見たいとか言い出したら」

「え？何言つてるの？私がみゆきに下着姿なんて見せるはずないじやん。さつきの話は冗談よ、冗談だつてわからなかつたの？」

「わ、わかつて言つたんだ！」

「顔がまた真つ赤！みゆきて面白いー！」

董はいつ言つとこきなつ声を出して笑いだした。

な、何だよー！つ…何でいきなり笑う！？

ああ、もう怒る氣にもならない…しかし何だ？こいつは二重人格か？いや三重人格か？

それとも女という生き物はこんなもんなのか？泣いたり、怒ったり、笑つたり忙しい生き物だ…

しかし何故にこんなに態度を口口口口と変化出来るんだよ…意味わからねえ…

「あははは、ひこ…お腹痛いよ…」

何がそこまで面白いのか理解出来ないが、俺の田の前では董はすみれお腹を抱えて大笑いをしている。

「おこ…そんなに笑わなくつてもいいだろ…」

「あははは…ふうう…あー苦しい…」

「何がそんなに面白こんだよ?」

「あはは、だつて…あはは」

「…」

「あはは…あはあ…ふつ…」

じざめじへじして董はすみれやつと笑つのを止めた。

「あ一面白かつた」

「俺はまつたく面白くなかった…」

「ちなみにね、コスプレで下着姿に近いものだつてあるんだよ?」

「何でそんな話を今更する…」

「一応、報告」

「そんな報告なんて必要ない…」

「え？ 興味あるでしょ？」

「ないー。」

とは言つたものの… 実際はどうなんだ？ 僕は董の下着姿もコスプレ姿も興味は… 多分ないのか？

と思いつつ俺は董の全身を上から下へと流して見ている。
見た感じ董は寸胴に見える… しかし、午前中ここでは董は「貧疎だ
つて出でるところはそれなにに出でるのよー」とか言つていた…
もしかしてここ… 本当はスタイルいいのだろうか？ マジで出で
る所は出でるのだろうか？ しかし確認するには…

そつか… ここでの下着姿に近いコスプレを見ればわかるつて事だ
よな…

つて何だー？ 僕は何を考えてるんだー危ない… 今日の僕はおかし
い…

「みゅあ～。」

「え？ 何だよ」

「みゅきも女の中になつたんだしゃ、記念にコスプレでもするべ。」

「こいつはまた変な事を唐突に言つ出しあがつた。」

「えー？ 何で俺がコスプレー？ やらないー！ 絶対やらないー。」

「えー？ 勿体ないなあ… 素材は抜群なのに… つてーあー『めん！ 今
の格好はすでにコスプレだったねー。』

「待て待て、違う！これはコスプレじゃない！単なるメイド姿だ！」
店長に無理矢理やらせられただけだ！」

「え？何を言つてゐるのよ？ハツキリ言つてその格好はコスプレでしょ？みゆきだつて解つてでしょ？」

「う…それは…えつと」

確かに…今の俺はメイドでごめんなさいだか何だか忘れたが、そのアニメのキャラに似てて、そのメイドの格好が今の俺の格好に似てるんだよな。

「うふ、やつぱり見ても『神無月みゆき』のコスプレだね」

「やつぱりそうなのか…」

俺ががつくりと肩を落としていると、^{すみれ}董が鞄から何かを取り出しお机の上に置いた。ガチャガチャとそれを弄ると俺の横まで小走りで来ていきなり肩を組んできた。

「す、董！？何するんだよ」

「え？単なる記念写真よ」

「え…記念写真？何だそれ？」

「だから記念写真。カメラはセルフタイマーでもう少しだけナビゲーションか？」「う…」

^{すみれ}董はそう言つと机の上を指差した。机の上を見るとナビゲーション

カメがちやつかり設置されている。

「ちよつと待て！俺は写真を撮つてもいいなんて言つた記憶はないぞ！」

「え？ダメ？別にいいでしょ？減るもんじゃあるまいし！あーほら、みゆき笑つて！」

「え？あーえ？」

「いいからーほらー笑つてよー。」

「あ、はいー。」

董の言葉に圧倒されて俺はカメラに向かつて笑顔を作つてしまつた。そしてそれと同時にカシヤリと音が聞こえた。

どうやら写真を撮られてしまつたらしい…しかし弱いな…何で俺は笑顔を作つてしまつたんだ…逃げればいいだけじやないか…俺のそんな残念な気持ちを知るはずもなく董はデジカメの確認をしていく。

「みゆきがはじ見てーよく撮れてるよー。」

「はいはい、そうですか…」

「結構いい感じだよ？これ今度印刷してきてあげるねー。」

「いや…こりないし」

まつたく…何を言つてるんだ。自分が女だった時の写真なんて欲

しへもない…

「え？ いらぬいの？ 記念に持つておいたほうがいいんじゃない？」

「おい… どこの世界に男だつた自分が女になつてしまつた時の写真を記念に持つている人間がいるんだ？」

董は首を傾げてすこし考えた。

「わうよね… だいたい女になつた事がある人間なんてみゆき以外に居るとは思えないし… だから写真なんて持つてる人はいないよね… つていう事は… やっぱり記念に持つておいたほうがいいと思つよ？ いいえ！ 持つておかないとダメだよ！」

「おい、何でそつなるんだよ」

「こいつは頭がいいのやけに悪いやけに… 考えてる事がわからな… やっぱりこいつは苦手だな…

「大丈夫！ 光沢用紙だから綺麗よ」

「違う… 僕はそんな答えを求めるような質問はした記憶はない…」

「でもエプソンじゃなくつてキャノンなの」

「だから、そんなのどうでもいいって…」

「何ならもう一枚撮る？」

「いや、もういい…」

何だよこの会話は……董はマジで皿几を中心的にやるだろ……

「でも?みゆき?こつまでメイド服を着てるの?もしかして氣に入つたとか?」

「お前が写真を撮つたりしてたからだろ!こんな格好を氣に入つてるはずないだろ!脱ぐとこだ!」

「あつそう

董はそつけないくせに言つとトジカメを大事そうに鞄に仕舞いこんだ。

「……で……董、このメイド服はここで脱いで放置してもいいのか?」

「え?別にいいんじゃない?そこに置いておけば店長がどうにかすると思うよ。それより早くいつものダボダボのダサイ服に着替れば?」

「ダボダボのダサイ服…」

俺はメイド服を脱いで董の言つ所の「ダボダボのダサイ服」へ着替えた。

ふと横を見ると着替え終わつた俺を董がジロジロと見ている。

「ん?ビーフした?」

「メイド服を着ていないと一田じや『神無月みゆき』に似てるなんて氣づかれそうもないわね」

「そりゃ?俺はその方が助かる」

「うん、大丈夫そうね、そのダサい服装が折角の可愛さを台無しにしているから」

「それってどうなんだ…」

そりゃ俺は服装はあまり気にしないし、格好をつけようなんて思つた事もない。

しかしここ今までダサイと連呼されると少し傷つく…これからは少しほつがいいのか?

「おい董^{すみれ}、ちよつと聞くが、男の時の俺ももしかしてダサイって事か?」

「え?えつと…ほらーえつと…人は格好じゃなにって言ひじゃないのよ」

「おー…何だよそれ?それってまさか俺をフォローしたつもりなんか?」

「え?う、うん」

「ついで言つた時^点でフォローになつてないだろ…

「……………そりゃ?」

「え?と…みゆきも着替えたみたいだし、そろそろお店を出ようか?」

董はそつと鞄を肩に掛けた。

あ、そうだ…俺は一つかかる事があつたんだ…ちょっと董に質問してみようかな…

「おー、董」

董は丁度扉の鍵を開けようとしている所だった。しかし俺の声に反応して董は一ちらに振り返った。

「え?何?どうしたの?」

「あのや、何で俺は『神無用みゆわ』っていうアニメのキャラをくつの女にされたんだと思つ?」

「え?何で?」

「俺がやっているマミオとまつたく関連がないだろ?」

「うーん…関連が完全に無いかどうかはネットで調べばすぐに解ると思うナビ…」

「でもな、多少は関連があつたとしてもわざわざ俺をアニメキャラにする必要はないだろ?」

「そうね…もしかすると、みゆきを女にした人の趣味なのかもしないわね」

「え?趣味!?といつ事は俺を女にした奴はマニア系なのか?」

「わかんない、でもナレもちゃんと調べてみるから。今日はもう帰
ろうよ」

「あ、ああ… そりだな…」

「……いつは何でもググれば解るとでも思ってるのか？わかんねーだろ……マニアとか…

俺と董は事務所の電気を消して通路に出た。
すみれ

「そりお店の方を覗くと先ほどまで居なかつたお客様だが今は店内に5、6人おり、店長ともう一人のバイトの男の子は忙しそうに動いている。

事に決めた。
すみれ

お店から出た俺は少し離れた場所に駐めてある自転車まで歩いて

俺が数十メートル歩いた所で後ろから人の気配を感じる。振り返ると何故か董^{すみれ}がついて来てるじゃないか！？

「おい何だよ？董は電車だろ？」^{すみれ}反対方向じゃないのか？」

「え…えつと…あれよ…あれ」

「あれ？ あれって何だよ？」

「み、みゆき… 明日は暇なの？」

「え？ 何をいきなり？」

「あ、明日は休みでしょ？」

「え？ ああ、休みだけ？」

「どうせあれでしょ！ 水曜日だからみゆきのやつてるMMOも私のやつてる奴も十時から十六時までメンテナンスなんだし… 彼女も居ない訳で、他に趣味もないんだし…」

「それで… 何が言いたいんだよ…」

「だから… 一緒にみゆきの服を買いに行つてあげてもいいわよ」

「え？ 何だそれ？ 僕の服？ それつてもしかして女物つて事なのか？」

「そうだよ？ そんなガボガボのダサ服じや駄目だと思つし。下着だつて買わないと駄目だし」

「し、下着！？ 僕はそんなもんいらぬー！」

「いろいろじゃないのー！ 下着は必要なー！ 今は女なんだよ？ 下はどうでもいいけど、ブラはちゃんとつけなさいよー！みゆきは胸でつかいんだし、つけてないとすぐに乳が垂れるわよ？」

「お、おーー乳とか言つなー！ お前女だらうがー…」

「俺は思わず大きな声で董すみかに向かつて怒鳴つた。

「ちよ、ちよつとーみゆき声が大きこよーほら、みんなこつち見て

るじゃん

董の一言で俺ははつと我に返った。

そうだ、ここは店の外だつた！つい大きな声で乳とか言つてしまつたぞ！？

周囲を確認すると人通りが少ない裏道にも関わらず数人が立ち止まつて俺達の方を見ている。

おいおい…怪しいオタク系男子ばかりじゃないか…すつごく危険な視線を感じる…それも俺の胸に集中しているじゃないか…何て奴らだ…

「み、みゆき…なんか視線が…」

「董、走るぞ！」

俺はそつ言つて董の手を握ると急いで自転車置き場まで走つた。

第十一話【俺の田の前にいた小悪魔？】（後書き）

パソコンショップのもう一人のバイト君

本題の中にもう一人のバイト君がいると表現がある。

名前は上尾孝一と言つて、某都内大学二年生。

こつそりとこのお店で一番まとも？な男子です。

ああ、名前はあげおではなく、かみおです。かみおひじ君です
であしからず。

身長178センチで体重60キロ。中肉中背でちよつと童顔っぽい。
髪は短髪で黒。パソコンもするけどスポーツもある。

決してマニアではなく、ちゃんとした彼女がいる。

ここで働いた理由は単にバイトを探してたらここを見つけたという
つまらない理由。

あまりにも普通すぎて本来は本小説のもうと前の回に少し登場の予
定でしたが、予定がなくなりました！

そのうち登場するような機会はあるのでしょうかね…

第十一話【俺の目の前にいた小悪魔？】

俺は董^{すみれ}の手を握つて自転車置き場へ向かって走る。人通りの激しい大通りを横切り、数十メートル離れた場所に自転車置き場がある。

俺は後ろを振り返らずにとにかく全力で走った。いつもは必ずひつかかる大通りの信号が、今回は丁度青だった事も手伝つて二分程で自転車置き場へと到着。到着してすぐにだれか付いていなか後ろを確認した。誰も付いて来た気配はない。当たり前の事だが少し安心した…

しかし、もしここで俺達を追つて来た奴が居たとしたら、そいつは確実にストーカーか痴漢か変質者だろう。

俺はそんな事を考えながら自転車置き場の中も確認した。数人の人はいるがいたつて普通そうな人ばかりだ。先程のようなマニアックオーラを感じる人はいない。と思う。

ふと気が付くと俺の左横では董^{すみれ}がしゃがみ込んでいるじゃないか。そして「はあはあ…」と息を切らしながら左手で胸を押さえている。見た感じ相当辛そうだな。

しかし、俺も多少は息切れしているが、それ程きつくは感じない。この程度でそんな状態になるなんて、董^{すみれ}はかなりの運動不足だろ…

俺がじつと董^{すみれ}を見ていると、董^{すみれ}は突然に俺の方を見ると睨んだ。まさか俺の心のを読まれたか！？つてあるはずないよな？

「なんだよ？」

「はあはあ…なんだよ…じゃ…ないわよ！はあはあ…みゆき…手、

そろそろ……離してくれない？……痛いんだけど……」

董は息を切らしながら言った。

「あー。」

俺は左手でしつかりと董の右手を握っているじゃないか。
そして今になつて手に柔らかい感触が伝わってくる
俺は慌てて手を離した。

そうだ、あの時、俺は慌てて董の手を握って走り出したんだった。
董は数回深呼吸をした。すると呼吸が整ってきていた。やっと落
ち着いてきたみたいだ。

「ふう……あのや、もうちょっと優しくしてよね……私だって一応は女
なんだからね……」

董はそう言いながら先ほどまで俺が握っていた右手をじっと見て
いる。

俺も自分の左手を見た。手にはまだ董の手の感触が残つていて。
董の手は暖かく、そしてやわらかかった。そう、まさに女の子の子の
手だ……

女の子の手を握るなんて何年ぶりだろう……女を意思していなかつ
た時代、そうだな小学校以来か？
っていうか……俺は何を躊躇もせずにこの女の手を握ってるんだよ……

「ちょっと、みゆき、聞いてるの？」

董は立ち上がりながら言った。

「聞いてるよ、あれはあれだ…あの場からお前を連れて逃げる為に無我夢中で握ったんだ。だから力加減なんて考へてる余裕はなかつた」

「わかつたわよその件はもういいわ…でもさ、私も一緒に逃げちゃつてから言つのも何なんだけど、別にあの場から逃げなくつても良かったんじやないの？」

「え？馬鹿！お前は感じなかつたのか？あの危険な視線を…お前だつて「なんか視線が…」とか言つてたじやないか」

「ああ、確かに言つたよ。そう思つたから」

「じゃあ逃げるだろ！？」

「え？逃げないよ。それと逃げるは別だから」

「え？どうしてそつなるんだ？いや、マジ危ないって、あれは危ないって、襲われたらどうするんだ？」

董^{すみれ}は俺の顔を見ながら「ふう」と溜息をついた。

「何それ？危険な視線を感じたのは確かだけど、の人達は襲つて來ないよ。だつて見た目こそマニア系のオタクかもしれないけど、別に犯罪者つて訳じやないんだよ？コスプレの時に来てくれる人も見た目はちょっと危ない人もいるけど、でもいい人だつて多いんだから」

何という冷静モードだ…確かに董^{すみれ}の言つ通りかもしれない…

「みゆき、人を見かけで判断するとか一種の差別だよねー。」

「う……いや……それは……」

言い返せない…

考えてみれば俺が男の時の普段の格好はどうなんだ?十分に座り見られそうじゃないか…

という事は…俺もあそこにいた奴らと同じ立場になる場合だったあるつる訳だ。

そう考えると…もし俺があこいつらの立場だったらどうだった?

田の前でいきなり『乳』とか叫んだ女が俺を見て逃げる…

……何故逃げる…って思ひ…俺ってそんなに座りいかつて凹む…

うわー…やつぱり最低最悪の結果だ…

原因は俺達にあるのに…あいつらが失礼な事をしてしまった…

「やつだよな…董の言つ通りかもな…」

「でもねみゆき、やつは言つたけどあれは私の意見。やつきの場面の場合、普通の女子なら危険な視線を感じて逃げると思うんだ…だからみゆきの行動的には完全に間違ってる訳じゃないと思うよ。でもね、何が言いたいかつて言つと、みゆきの反応はまさに女の子の反応だったという事…本当に本物のみゆきなの?って疑いたくなっちゃうよ」

「……俺は…本物みゆきだ。董の言つ事はもつともだと思う。でも俺があの場から逃げたのは、あれだよ、俺は元々女じゃない。だか

ら女のとしてあのシチュエーションの時にあいつらに向かわれるか
わからないっていう恐怖感が先行したからだ。店長のあの件もあつ
たからな」

「なるほど……そうね……でも結局それってやつぱり自分を女として考
えたって事でしょ？……やつぱり体が女になると……心も女になつて
いくのかな……」

すみれ
董は少し寂しそうに呟いた。

「違う！そんな事は無い！確かに反応は女っぽかったかもしけない
が、完全に『女』として意識した行動じゃない。男の俺が女をやら
されているからこそああいう行動に出たんだ」

「……なるせじね……そうこう考えもあるんだ」

すみれ
董は少しく頷いた。

俺の言いたい事を少しほ理解出来たのか？

「でも、やつぱり逃げる必要は無かつたと黙つたさ～？」

やつぱりつけてないな…

すみれ
「おい董、だいたい元を正せばお前が悪いんじやないか。いきなり
『乳』とか言つから」

「え？ 何それ？ どうしてそうなるの？ 私は『乳』だから『乳』って
言つただけじゃないのよー。それとも何？ その『豊満な乳房』が垂れ
るよ。とでも言つてほしかった訳？」

「ち、違つて…そういう意味じゃない…やつこいつ事を露骨に言つた事だ！」

俺がそつ言つと董はムツとした表情になつた。
そして眼鏡の縁を右手で持ちながら俺を睨んだ。

「何だよ？そんなに睨むなよ」

俺がやつ言つと今度は両手で顔を掩つて俯いた。

「みゆきの馬鹿…」

「あ、おー…何だよ？ば、馬鹿！？」

「私は…みゆきの事を考えて言つただけなのに…そんなに強く言わなくつても…ぐす」

董は小さく声を震わせながら言つた。そして鞄からハンカチを取り出す。

「何だ！？」といつ泣いてるのか…？

待てよ、待て待て！俺はそんなに酷い事を言つたか？言つてないだろ…

「おい、董？」

何も返事をしてくれない…これは謝らないといけないフラグなんか？しかし何で俺が謝るんだ？

しばらく董様子を伺つたが、ずっと俯いたまま…
場の空気がかなり悪いぞ…

「……そりだよな……俺も男だ……そしてこんな奴だけど一応は女だ。
やつぱり男が女を泣かしたらダメだよな……こには俺が折れて謝る
か……納得はいかないが……」

「すみれ、わかつたよ、俺が悪かった……強く言つてすまん」

「ぐす……本当にひつひつなの?」

「ああ、本當だ。悪かったよ」

「じゃあ……下着もちやんとつけさせてくれる?」

「え? 下着? ……えつと…つけた方がいいのなら…か、買つよ…買え
ばいいんだろ? ……」

「ぐす……うん……」

「すみれ
董は相変らず俯いたままだ。

「えつと…明日だよな…明日か……あれだ、俺は、その…下着とか
…服とか…そういうのを買うのにどうこうのを選べばいいかわから
ないし…董、買い物につきあつてくれよ? ……」

「…買い物…私が必要?」

「あ、ああ…俺一人じゃ買えないし、女物なんて俺にはわかんねえ
し」

「……仕方ないわね…付き合つてあげる…」

董はやつ言いながらもくつと顔を上げた。

「…で…俺はやつすればいいんだ?」

「えつとねー私がスケジュールを組み立てるから…やつねー今日の夜にでも電話するからー。」

董は笑顔でやつ言つた。

「了解…じゃあ俺は電話を待つてればいいんだな?つておい待て!何だその笑顔は!…え?…まさか…わつきのは嘘泣きか!?」

「記憶にござりません」

「な、何だと…?わつき泣いてただろ?」

「記憶にござりません」

しまつた!…やつぱり嘘泣きかよ…くそおおお…董に騙された…これが女の武器つてこいつ奴なのか…なんどこいつ卑劣な…この小悪魔め…

「おい…董…お前…そういう人を騙すような行為はダメだろ?」

「えつと…じゃあ後で電話するからね…ゲームに夢中になつて気が付かないなんてないようにね!…じゃあまたねー!…」

董は俺の話を聞かず、言いたい事だけ言つと自転車置き場から走つて出て行こうとする。

「おーいーちよつと待て！俺の話を聞けー！」

俺の声が聞こえたのか、董は自転車置き場を出た所で立ち止まつた。

そしてこちらを振り向く。俺はそれを見てから慌てて董に駆け寄つた。

「お、おい董、嘘泣きとか無いだろ？あれはちょっといかがな物かと思つぞ？だからな……」

董は俺が話をしている途中にも関わらず、それを無視して一方的に話出した。

「せうだー！言い忘れたけど、お買いものに付いてお礼はランチ口チでいいからねー！」

そう言い残して董は凄い勢いで駅の方向へと走り去つた。

「お、おーいーちよつとまーー何だそれー？そんな話は聞いてないぞー！あとお前ー俺の話の続き……」

俺は懸命に叫んだが、時は既に遅く董の姿は既に見えない。

「な、何だよあいつ…血口の中すげだらーくそー！」

何だかすげく悔しい。悔しいけど自分が情けない。

「ふう…結局あいつと明口買い物に行く事になつてしまつたのか…しかもあこつにランチを奢るとか…何でそなるんだよ…しかしま

あ、確かにこんなにダブダブの服をずっと着るのもあれだし、下着
だつて…いるのか?な?…き、せつと必要なんだ…そつだ…つて考
えよつ…」

俺は何か訥然としないまま自転車を漕いで自宅へと向かった。

しかし何だよな…あいつ…嘘泣きとか普通するか?

健全な男子を騙して何が面白いんだ?俺つて素直でいい奴だし、
このままだと女に騙されて、不幸な人生を歩んでいきそうだぞ…そ
んな悲惨な人生は歩みたくない!

マジでやばい…これで教訓にしてこれからは気をつけないとな…

しかし、どうしてアイツは俺にこんなにもチョッカイを出すんだ?
俺が男の時はこんなにチョッカイを出してこなかつたのになあ。

あいつ実は心配性なのか?おせっかいやきとか?

それとも女になつた俺の事が好き?無いよなあ…わからん…

態々『わざわざ』嘘泣きまでして俺と買い物に行きたいとか普通
はしないだろ?

あいつ何かを企んでいるのか?それがランチを奢つてもらう事な
のか?

俺の妄想は尽きない。

色々な妄想をしているとふとメイド姿をさせられた事を思い出し
た。

え?まさか…あいつは俺にコスプレをさせようと思つてるんじや?
買い物とかいいつつ、危険なコスプレショッピングに連れて行つて俺
を変な道へと…

つて疑つても仕方ないか…まあ…とつあえずはなりゆきに任せよ

う…

もし俺の不利になるような状況になつたら逃げればいいしな。

とか考えているうちにアパートに到着！

俺は夕暮れのアパートを見上げた。首都高のほぼ真下にある外に洗濯物すら干せないアパート。日当たり最低。騒音抜群！まじで腐つてるアパートだ…

しかし仕方ない。なんせ家賃が激安だ。

ちなみに、このアパートには独身のオタク系男子しか住んでない。全部で八部屋ある。ちなみに引っ越して来た時に全員も容姿は確認済だ。

住人の数人とは話をたまにしている。

全員きっと彼女もいないし、女に縁のない人ばかりだ。

人は見かけによらないと言うが…多分俺の予測は当たっているだろう。

そういうえば六号室の人…この前の夜にアダルトゲームだと思われる音声が思いつきり俺の部屋まで聞こえてきてたよな…普通のアパートだとクレームじゃ済まなそうだよな…つて…ちょっと待てよ…今俺は何か重要な事を…

このアパートの男子に俺の事がばれたらどうなるんだ？
もしも住人が皆で俺の部屋に押しかけてきたら…

そうしたら俺は拉致監禁されて…あんな事やそんな事を！【ありえない様な事を妄想中】

うわあああああ！やめてくれー！【見た目、頭をかかえてアパートの前で叫ぶ変な女】

ちょ、ちょっと待てよ…何を変な妄想してるんだ…
さつきの件もあるだろ…あまり人を疑うなよ…

彼らもきっと俺と同じ健全な男子なはずだ……変な事なんてはしないだろ……信じるんだ！

つて……俺って健全だっけ……やっぱり怖いものは怖いー…とにかくばれる前に部屋に入れ！

俺は自転車に急いで鍵を掛けると慌てて自分の部屋へと入った。

俺はアパートの部屋に入るとまず真っ先に玄関の鍵を閉める。よし、これで安心だ…

安心した所で次の行動は……パソコンの電源を入れる！やつぱりパソコン起動の優先順位が高い！

電源ボタンを押すと『ピッ…』といつ起動音と共にパソコンのファンが動き出した。

そして次に部屋の電気をつけてお湯を沸かす。これはもちろんやかんのお湯だ。フロなど後でいい。いざとなれば入らなくてもいい。

キッチンの上には大量のカップ麺が入ったビニール袋がある。俺はその中から今日の晩ご飯をチョイスする。これは何時もの作業。そう、夜はカップ麺が基本だ。

今日は何にしようかな……昼を食べてないしな……ボリュームがある方がいいよな…

俺は袋からワンタン麺、麺二倍増量！を取り出した。

お湯は一人分だから速攻で沸く！それを素早くカツプ麺へ入れる！入れたカツプ麺の上に割り箸と後入れスープを載せてから、それをパソコンの机へと置く。

え？ちゃんとしたテーブルで食べないのか？

俺はいつもパソコンをしながら食べる。だからテーブルで食べる事はない！

というかダイニングテーブルの上にパソコンが乗っている。だから一応はテーブルで食べている！という事になるよな？

ウインドウズの起動画面でパスワードを入力！パソコン起動完了！ディスクトップが表示された。

ちなみに言つておくが、背景画像はアニメとかエッチ画像とかじやないぞ？

そういう趣味はないからな。じゃあ何だって？内緒に決まってるじゃないか。

つと…ディスクトップが表示されたら真っ先にメールの確認を…相変わらずくだらない勧誘メールがいっぱい来てるな…あれ？何だこれ？

大量に来ているメールの中に無題のメールが一つある。

無題はよくある事なのだが、何故か迷惑メールに振り分けされていない…何故だ？

俺はウイルスチェックをしてからそのメールを開いてみた。

何だ？これって中国語か？

内容は色々と書いてあるが、中国語か？知らない文字で読めない…

もしかして…この前の夜、海外アダルトサイトを見た時に確か中國語のサイトに飛んだよな…

まさかあの時にスパイウェアでも仕組まれてメールを吸い出されたのか？

確かにこの前チェックした時にはスパイウェアなんて感知しなかつたが…

まあいいか…ウイルスも無いし。

よし、中国語なんてわんねーし、放置…どうせ請求なんて来ないだろうし。

後は…その他はに田立つたメールは無いな…

次はMMOの起動だ。

アイコンをダブルクリックと…

ディスクトップにあるMMOのアイコンをダブルクリックすると起動メニューが開く。

そして告知事項などがあればその時に表示される。

今日は需要なお知らせが出ている。

『アップデートファイルがあります。臨時メンテナンスを行います。

…って？

あれ？何だ？通常のメンテナンスは明日だろ？何で今日？俺は告知の内容を読んでみた。

えつと…十四時から十五時迄の予定つて、もう終わってるな。アップデート内容は何だつたんだ？

『昨日販売した強化アイテムがあまりの性能でクレームが多数来ております。』

セリヤセリヤ…

『弊社の対応としまして、昨日販売したアイテムは…』

え？まさか効果を無効にするつもりか！？そうなら、たら現金で払い戻しして貰わないと…

と言つても俺が買つた訳じゃないんだが…

『調べた所、販売数が十個未満でした。ですので効果はそのまま残す事とします。ただし、今後の販売の予定はございません。』

何だ？回収とかは無いのか？少ししか売れてないのでそのまままでいいのか？

運営が良いのならいいんだろうけど…

まあ確かに普通の奴だったらあの金額のアイテムはなかなか手が出ないよなあ…

ん？まだあるや…

『転売や取引などが出来ないように設定しました』だと？なるほどね…

まあ転売する予定なんてないし、使つのも勿体ない位だしな。

当分は倉庫の肥やしになるのかな…

でもフロワードの奴、「どうだつた？みゆき？」とか聞いて来るんだろうな。

まだ使ってないって言えばいいか…

お…アップデート完了！

パスワードを入れてつと…起動！

起動すると一十四型ワイド液晶ディスプレイの画面に「ぱいにM
MOの画面が表示された。

所謂フルスクリーンという奴だ。

という所でカップ麺にお湯を入れて三分経過した。よし、いつも
のようにながらやるか…う…ん？な？何かがいつもと違つて食
べずらい…

俺はいつもカップ麺を左手に持ち、そして脇を締めてから食べて
いる。

食べずらい理由。それは胸が邪魔！

と言づか、待てよ…おこ俺…

俺はカップ麺を机に置いて立ち上がった。

おい、みゆき…何で部屋に戻つてからすぐにパソコンつけて…カ
ップ麺つくり…普段の日常と同じ行動をしているんだ？

俺は女になつたんだぞ！？それを解決する方法を真つ先に探さな
いといけないんじゃないのか？

そうだよーその通りだ！

じゃあその為には何をすべきかを考えろ…
まず何をする…何をするべきか…と俺の視線はカップ麺に…

カップ麺を食べるか…そうだ、食べながら考えよう…のびたらま
ずいしな…

俺は椅子に座るとカップ麺を再び左手に持った。

しかし…どうするかな…女に戻る方法なんてそう簡単に見つかる
筈もないしな…

董^{すみれ}は今頃何をしてるのかな。無駄にググってるのかもしけないな。

とMMOの画面を見ると同盟チャットで挨拶をされているが、画面の右端にあるメールアイコンが点滅している。

俺は同盟チャットで挨拶を返す前に、メールのアイコンをダブルクリックした。
すると二件のメールが届いている。

一つは『同盟オフ会の』案内

もう一つは『男に戻る方法』

以上二件だ…って待て！男に戻る方法だと！？

俺は慌てて差出人を確認する。無名だと！？

このゲームのシステムだと無名でメールなんて送れないはずなのに…

ゲームのシステムを無視したメールを送るのは運営の人間か…まさか…昨日のあいつか！？

俺はそのメールをダブルクリックした！

するとその瞬間！俺の体に電撃のようなものが走る！

「痛い！いたたたたー！」

痺れた俺の左手からカツプ麵が落下…ぱしゃっ…とこつ音と共に
床に散乱！

だがそれ所、じゃなー…やばー、昨日の電撃の比、じゃない…すげー
痛い！

くそ…意識飛びそうだ…ぐ…ダメだ…

俺はようやく椅子から立ち上ると懸命にベットの方へと歩く。

な…んだよ…くや…

そしてベットまであと少しの所で田の前が真っ田になり、そのまま
意識を失った。

第十一話【俺の田の前にいた小悪魔？】（後書き）

高坂行幸が駐輪場を借りて いる理由

以前はお店の横に自転車を停めていたのだが、ある日盜難にあつてしまつ。

それから行幸は駐輪場を借りるよつになつた。
ちなみに交通費はお店から支給で、ちゃんと両国から秋葉原までの定期代金を貰つている。

乗っている自転車は9980円で購入したママチャリ。

第十二話？【俺とは違う時間・董くすみれ】編？】（前書き）

行幸と別れてからの董の時間での小説です。
この後、董の時間・店長の時間の小説があり、本編に戻ります。
別に董の事なんて興味ない！って方は読まない方が良いかもしません。

第十二話？【俺とは違う時間・董くすみれ】編？

「まだかなあ…おっそいなあ…」

一人の女性が携帯で時間を確認しながらソワソワとしている。

女性は黒のスース姿で、少し茶色がかつたロングヘア。身長は女性にしては高めで少し細身の体つき。運動をやっていたのか体格は良い。

体の出っ張りは殆ど無く（胸含む）…四つさが凜々しく多少の男っぽさを感じる。

「董^{すみれ}、来ないなあ…約束の時間忘れちゃったのかなあ…」

女性は何度も携帯電話で時間を確認している。

「もう約束の時間を過ぎてるのに！連絡もよこさないと…仕方ない、電話してみよっかな」

女性は独り言の様にうつと携帯を耳にあてた。すると、それとほぼ同時に女性の前に董^{すみれ}が小走りで現れた。

「はあはあ…愛ちゃん…」めーん

董^{すみれ}は息を切らしながらそう言つた。

女性は董^{すみれ}の姿を確認すると携帯をバックに仕舞つた。

「…董^{すみれ}…遅いぞ…」

「「」めん、「」めん、色々あつてね」

「え? 何よ色々あつて?」

「え? え? と...」

「何その態度? もしかして男がらみ?」

すみれ 薩は一瞬びくつとしてあせつて方向を向く。

「図星? 何よ? 何があつたのよ? 遅刻したんだから話してもいいつか
らね」

「え... え? と... それは... あ、後で話すねー!」

「後で?」

「つさ、後で」

「本当に?」

「話す、話す、約束するか?」

「...わかった。後でちやんと話して貰つからね

「え? と... あと、今日はちょっと早く家に戻りたいの。今日の打ち
合わせて一時間位で終わりでもいいかな?」

「え? 何よ? 用事? 男?...まあいいわ...わかった、今日は早めに切り上げてあげる」

「あ、ありがとう」

「よし、それじゃ行こうか」

一人はいつも行っているファミレスに向かった。

「董、一応はメンバー全員には告知したんだけど、今回の冬コミはこの前に言ってたあれでいこうかと思うんだよね。もう7日だからもう時間もないし、衣装もある程度は最初から揃ってるじゃん。でも、まだ衣装の出来てないメンバーについてはやつぱり全員で手分けをして作製してもらった方がいいと思うんだ。去年はギリギリまで出来ないメンバーが居て……」

董にふと視線を移すと、董は半分口を開けて何か考え事をしている。

「……董は私の話を絶対に聞いてない！」

「ねえ…董ちゃん？私の話を聞いてるかな？」

董はハッとした表情で「あ！」と言った。
やつぱりというか聞いてなかつた様子だ。

「な、何？聞いてるよー聞いてる」

董は慌ててそう言った。

「へえ…じゃあ私が何て言つてたか復唱をお願いします」

「え…つと…今回のダムは…えつと…」

そこで董は言葉に詰まつた。

「やつぱり聞いてなかつたし！何よ？男の事でも考へてたんだしょ！」

私がそう言つと董は、私から視線を外す。

なんて解りやすい…図星みたいね…

そう言えば…遅刻した原因も男っぽいし…そりだー…まだその話を
聞いてなかつた！

「遅刻した理由の男の事でしょー危ない、聞き忘れる所だった…」

「ビ、ビウシケンなるの。私は男の事を考えていたなんて言つて
ないよー!？」

ちよつと慌てた口調で董は言つた。

「あのや、その態度を見ると言わなくつてもわかるから…で、何
?話してよ」

「…え?」

董は困った表情で言葉に詰まる。

「わつき後で話してくれるつて言つたよね?」

私がやつて言つた董はさりに困惑の表情を浮かべる。

「えっと…話せなことダメ?」

董は小声でやつて言つた。

「あつたり前でしょ!約束したじやないのー。われとも何?私には話せないって言うの?約束を破るつて事?」「

「いや…やつて聞こいやないナビ

「董の男…あーもしかして…それってあの、何だっけ…董が惚れるあの男の名前…あーそだ!高坂だ!高坂!その男と関係ある事?進展したの?ねえ!」「

「え、あつと…関係は…」

「関係はー?」

「あ…る…けど…でもちよつと待つてーまだ惚れてる訳じやないよーちよつと氣になつてるだけ!」「

董は顔を赤らめながら懸念にて否定している。

「何それ…あのさ、バイトまでわざわざその高坂つて奴がいるパソコンショップに移つておこて、よくまあそんな言い方出来るよね。それで気になつてるだけつてありえないでしょ。この前だつて好きなんだつて私に言つてたじやん」「

「あれ?そ、そうだつけ…」

「おーおー…まあいいナビ、でもわ、あの男の何処がいいのよ？すっごく普通じゃん。いや待って！秋葉原のパソコンショップに働いて普通ってないかもよ~」

「えつと…思つたよりは普通だよ？」

「でもわ、バイトまで無理に一緒にする意味がわからなーんだナビ？そんなにあの男がいいの？」

「…いいでしょ。私が誰を好きにならうと、何処でバイトしようつと」

「いこよ？別にいいけど、じやあ何でバイトまで懶々移つて結構経つのにアタックしないのよ？好きなら董から告つちやえばいいじやん。当たつて砕けろつていうことわざもあるしねー。」

「え？ わ、私は告白とかした事ない…って言つたかー男から女に告白するのが普通でしょーつていつか、愛けやん！砕けけやダメだよ」

「あー」めん、そうだね、砕けたらダメだよね。でもわ、告白なんてどっちからなんて別にどうでもいい事なんじゃないの？」

「私は嫌なの、私から告白なん…」

「もしかして董つて乙女の…王子様を待つてるの？そんなに口マンチストだったの？大笑い！あははは！」

私が笑いだと董^{すみれ}の表情がどんどんと不満そつくなる。「の子は自分の意見が通らなくなるとすぐ口不満やつくなるからなあ…

でも少し言こと過ぎてる気もしなくもないけど。

「笑わないでよ…私、本気なんだから」

董^{すみれ}は今にも泣きそうな顔に変化している。

少しやり過ぎた！？

「「めぐ」めぐ、笑つちゃった事は謝る」

「そりや…愛ちゃんが悪気が無いのもわかる…笑われても怒れる立場じゃないけど…」

「わかったわかった、そんなに深刻な顔にならないの！でもあれだよ？告白して貰いたいのならそんなダサい服装と伊達眼鏡をかけるのなんてやめてさ、普通に可愛い服を着て化粧をすればいいじゃん。董^{すみれ}はマジ可愛いんだしさ、高坂っていう男だつてきっと振り向くはずだよ？コスプレの時なんて大人気で今までに何人もの男に告られてるじやん」

私がそう言つても董^{すみれ}の不満そうな顔は戻らない。

「私は…見た目が可愛いから…とかそういうので好きになつて欲しくないの！外見だけで判断して告白してきた奴なんて最低！」

「なんて贅沢な…世の中には男子に告白されない女子なんていっぱいのに…私なんて生まれてこの方男に告白された事なんて…正直、同姓からの告白の方が多いんだぞー泣いちゃうからね…」

「え？あっと…それは愛ちゃんが男のコスプレするから…」

「する以前からやうなんですが？あと、私に男のコスプレをさせたのつて董達じやないのよ」

私は身長が178センチもあり、上には成長したがその他がほぼ成長しなかったという体型。

高校では髪も短くバスケットをやっていた事もあってか、よく女子に告白された。

だが！私は彼氏が欲しかったんだ！百合属性はない！

私は大学に入つてからはそれを打開すべく女性っぽく振る舞うようになつた。

髪だつてがんばつて伸ばした。そして何とか彼氏も出来たのだ…本当だぞ？

まあ男から告白された記憶はほぼ無い。私は董の様に可愛くないからね…

ちなみにコスプレは大学時代から。友人の誘いでちょっととした興味本位から始めた。

最初は女性のコスプレをしていたが、この身長のせいでどうも似合わない場合が多い…

というか…一人ならいいのだけど、多人数だとどうもでかすぎたみたい。

だから他のメンバーの勧めもあり、男装でコスプレをしていた。そのコスプレが自分で言つのもなんだけど、すっごく似合つてるとと思うの…

そうなると…やっぱり女性にもモテる訳で…うーん…あ、私の話はどうでもいいか。本題に戻るね。

「それじゃあ董は中身を、性格を好きになつて欲しいって事？でもさ、その高坂とかいう男だつて中身はどんなだかわからない訳じやん？」

「いいのー、こーのー、もつこーでしょー！私は私のやり方で恋愛するか
うわ…強情だなあ…今頃いつこう考ふのやつてきつと少ないよね。
ある意味希少価値のある子だよ…本当はもういるだらうにあの男に
一途。なんて凄いんだろー。

でも少しだけ考え方がおかしいよね。

「解つたよ…董は董の想つよつにすればいいナビ…」

まあ、董の表情を見る限り、悪い方向にはこつてなによつだし。
あまり言つ過ぎてもダメか。私の意見を押ししつけるのも良くない
しね。

「で…色々とかさつとき語つてたけど、結局は何があつたのよ

「えつと…まあ色々…」

「だから何よその色々つて？あーもしかして寒はつこひの事やつ
ちやつたのー？」

でもからかつのせ画面狂こんだよね。董つて独特な反応するし。

「な、何を言ひしのよー、何よ、そのやつちやつたつてー何をやつ
りぢを何つてー」

董は顔を真つ赤にして否定してきた。

「え？何つて？男と女の間でやる」とつて一つしかなこじやないの

よ

董の顔は更に赤くなる。

うわー面白いー真っ赤ーこれだからこの手をからかうのはやめられない！

強情なのに初心ときたもんだー反応が楽しいー！

「ん、そんな不健全な事…や、やるせすないじやん…」

「ふふふ…何その不健全つて？董つて結構Hなのね…私は何もHな事をするなんて一言も叶つてないよ~」

「え？」

董は皿を机にして固まってしまった。

「あ、ごめん、董があまりに初心で可愛かつたからつ…でもさ、Hはまだとして、キスくらいしたとか？」

「し、してないーその話題はもういいからーふ、冬Hの話に戻そうよ」

董はそういふと私が机に広げたノートを見始めた。
しかし、ここまで話して今更冬Hの話に戻すなんて出来るはずないじやんー

「で？何があったのよーまだ話しあわってないよーちやんと話して

よ

「だから、もういいでしょ……きっと愛ちゃんが聞いてもつまらない事だし、それに…色々複雑すぎて信じてもらえるかわかんないし…」

董はそう言いつと少やく溜息をついた。そんな董態度を見ていると、何があつたのか余計に気になる。

「私は、別につまらないなんて思わないよ。あと何? その色々複雑つて? あの高坂っていう男の話じゃないの? 違うの?」

「まあ… そうなんだけど…」

何、その深刻な顔… 事態は簡単な事じゃないって事なのかな?
でも悪い方向にも見えないし…

「何よ… その深刻な顔… 困ってるのなら私に相談しなさいよ! これでも貴方よりも四歳も年上で恋愛経験だって豊富なんだから…」

しかし董は無言で考え込んだまま動かない…

愛ちゃんはサークルの中でも一番信用が出来る人生の先輩。

ちよつとしつこくて自己中心的な性格だけど、私と違つて恋愛経験も豊かだし、コスプレ知識も豊富だし、下ネタも得意…いつも相談にのってくれるいい人…

でも、きっと今日の出来事を話しても信じてくれるはずないだろう…

まず話しても良いのか迷いつ… でも、話をないとすつしりつしりへ

聞いてくるだらうし、この先もネタにされるだらう。

店長は他言無用つて言つてた…

この事実が他人に漏れるとそれが話題になつて、みゆきに危害が加わる可能性がある。

でも…きっと…愛ちゃんになら言つても大丈夫かな…

私にとつて愛ちゃんは他人じやない。年の差はあるけど親友だと思つてゐる。

私は悩んだ末に愛ちゃんに今日の出来事を話す事にした。

「愛ちゃん…」

「何?」

「私の話、例え冗談みたいな話だとしても、それでも信じてくれる?

「え? 何? それって私を信用してないって事? 私は何時でも董すみれを信じてるんだよ?」

いいよね? 信じても?

「それじゃあ…あのね、私が今から話す事は絶対に内緒だからね!…

「え? そ、そんな重い話しなの!? でも大丈夫! 内緒にするから!…
信用して!」

愛ちゃんはそう言つと右手の拳で胸をドンと叩いた。

その瞬間、「ゴブー！」とこう鈍い音が店内に響く。

右手の拳がみぞおち部分にクリーンヒットしたみたい。

「うぐ…げほげほ…ぐ…」

愛ちゃんは胸を両手で押されて前屈みになつて苦痛の表情を浮かべている。

「あ、愛ちゃん大丈夫？」

愛ちゃんは腕を振るわせながら右手を上げてグッと指を立てた大丈夫のアピールらしいが、額に脂汗をかいしているし、言葉も無い。大丈夫じゃないみたい。

そして数分後…

「…あー痛かつた…ところが苦しかった…」

「愛ちゃん…自分に対しても加減なしだったね…」

「あはは…いや、まあ…信用して…このうのを態度で示さないと思つてさ」

愛ちゃんはそのまま苦笑した。

「よつと馬鹿だけど、いつも所が愛ちゃんの良い所だ。

「董、それじゃあ…話してくれるかな？」

「うん、じゃあ…話すね…」

.....

私は今日の出来事を愛ちゃんに話した。

第十二話？【俺とは違う時間・董くすみれ】編？（後書き）

後書き 人物紹介?
花角愛
はなすみあい

年齢 二十四歳
身長 178センチ
体重 内緒キロ

某大学を卒業して現在は東京田端の小さな会社で事務をしている。
董のコスプレ仲間で、そこのサークルのリーダー的な存在だがリー
ダーではない。面倒見が良く、年上からも年下からも慕われる。
楽観的でポジティブなので行動先行タイプだが、実は考え方はしつ
かりしており場の空気を読む努力は必ずする。

しかし、状況を理解していくにはしゃいだりふざけたりする事多
い。

身長が一般女性より高く、胸が無い為に本人はすぐ気にしている。
彼氏はいるらしい。 誰も会った事は無い。

自称、恋愛経験は豊富だと言っているが、初の彼氏は大学に入つて
から。 これも自分で話をしていた。だから実際に恋愛経験が豊
富なのかは不明。董の良き理解者で、親友である。

第十二話？【俺とは違う時間・董くすみれ】編？

今私はどんなでも無い事を聞いたような気がする…ありえない事…

「ちょっと待つて、董…何それ？董の彼氏がMMOをやつてて天罰で女になつた？ちょっと待つて、流石に即信じりつて言われても無理」

私は董の顔を見ながらそう言った。

董は無言のまま唇を噛みながら聞いていた。

「空想小説じゃないんだよ？漫画でもないんだよ？男が女になる？そんな事があるはずないじやん！夢でしょ？董大丈夫？悩みがあるんなら聞くよ？いくら恋がなかなか実らないって言つても現実をちやんと見なきやダメだよ」

私は董の話を冗談だと思つてそう言つと、突然董が私を睨んだ。私はサークルの中でも董と一番仲が良い。

いつも話をしてるし、慕つてもくれていると思つ。

そして…睨まれた事なんて今まで一度もない…

私はしまつたーと心の中で言んだ。

「…ほら…やつぱり信じてくれないし…やつぱり話すこじやなかつた…」

董の声が震えている。

またか…信じれない…でもその態度…やつせの話つて冗談じゃな

くつて事実？

男が女になるへまわか…でも董すみれが嘘うそをつこつている様には見えない…

「だ…だつてや、普通に考えてよ…あつえないじやん…」

「やうだよ…その通りだよ…普通じゃありえない事だから困つてるの…あと、まだ彼氏かれじゃないから」

え？…や、そこまでやけむことや否ひ定するのね…

「でもまあ、彼氏かれとか彼氏かれじやなことかそんな事はびつでないことしてや…その話は…」

「本当なの…愛ちやん信じじよ…信じがたいけど、事実なの…」

「わ、わかった、信じる…信じるよ…やけめで真剣に董すみれが言つ事だもん…信じるしか無いでしょ…」

私がそつと董すみれは少しだけ安堵の表情を浮かべた。
だがすぐに表情は険しくなる。

「ありがとうござりません…でもどうすればいいんだろ…みゆきが女のままで男に戻らなかつたら…」

辛つらい董すみれ…こんな董すみれはあまり見たくない。

よし、こゝは向むかとか空氣を明るい方向へ変えなければ…

「や、そうね…エエが出来ないわね…」

「や、違つちうちう…どうしてやつなるの…」

し、しまつたあああああーつい何時もの癖で…違う方向へ空気を変えてしまつた!

「い、いめぐ、つい何時もの癖で」

「癖つて何よー愛ちゃんはすぐこの話題に移つていくんだから…」

しかしあいかわらず反応は面白…

「本題にじめんね」

「まつたくもひ…」

すみれ
董が口を尖らせて私を見ている。

とりあえず空気が少し軽くなつた。よかつた。

しかし…男が女にか…それって真面目にすこく深刻だよね…

すみれ
董、「貴方はどうしたいのよ?」

「私は…せりやみゆきに男に戻つて欲しいよ」

「まあそりだよね…」

「うん…」

私と董の会話が途切れた。

うわ…折角軽くなりかけた空気が一気に重くなつた…

そして無言のまま数分経過…

やばこよ… 場の空気が重い… とてもじやないけど私から何か言えそうにない。

何だーこの蛇に睨まれた蛙のような状態は…ぜえぜえ… わ、私が
ら… 話さないと…

そう思つてこると董から私に話しかけてきた。

「「」ねん、愛ちゃん。冬ノリの話だけど今日は頭に入らないから…
もう終わりでいいかな… もう家に戻りたいし」

た、助かったあ… すつ「」く辛い時間だった。

「ま、まあそりだよね… いいよ… だけども、今から家に帰つて何を
するのよ」

「みゆきが女から男に戻る方法をべべつてみる…」

え… 何それ… ネット検索が凄まじく発展してこるこの世の中であ
つても、そんな非現実的な事がぐぐつと出来るはずないじやん…

「待つて、董、まさか男から女に戻る方法を検索するの? そんなの
検索しても出るはずないじやん」

「え? でもやつてみないと解かないでしょ」

「いや、そこはやうなぐつても想像つくでしょ…」

「じゃあ何? 愛ちゃんは私のやる事は無駄だつて言いたいの?」

董は再び不機嫌そうな顔になった。

え？ どうしてそういうのよ…？

何？ 今日の董つていつものポジティブさが無いよ…って当たり前か…

とりあえずはさつきみたいな重い空氣にならないよう口説をしなきや。

「もうじやないよ。だから、もつと無駄にならない事をやる方がいいって事」

「無駄にならない事… それって何？」

うわ… そつは言つたものの実際に無駄にならないものなんてすぐには見つかるはずも無い。

でも、董の為にも解決策を考えないと… 何か無いかな…

しかし… 男が女になるとかねえ… そういう事もあるんだなあ…

そうだ… よし、まずは女になつた原因を考えよう。

女になつた原因は何なのか？… そう… 確か… 天罰？… だつたよね？

そうだとすると… 天罰つて事は悪い事をしたから天から罰を受けたって事…

あれ？ 罰を受けたのなら、その罪を償えば？ もしかすると悔い改めれば元に戻れるんじゃないの？

そうよ… 罰を受けているのであれば、その罰を悔い改めればいいのよ…

さつとやつだ！ そうだそうだ！

「董… わかった！ 罰で女になつたのなら、その罰を悔い改めればいいのよ…」

「え？ 悔い改める…って… 改心するって事？」

「もう…その罰を『えられた原因をきちんと理解して、それを反省するの…』

「愛ちゃん…それってさ、PKをしまくつてカオスな属性にプレイヤーがPKを止めて、逆に良い行動をしていればだんだんとカオス属性が薄れていって普通の状態に戻れるって奴と同じかな…？」

「え？ 何それ… その例え、理解出来ない…『めん』

「えー…？ す、す、わかったやうに思つたのに…」

「PKって何？ サ、サッカー関係かな？ カオスって悪よね？ 悪いサッカー関係者？ あれ？」

「何その解釈… 全然違つし…」

すみれ
董はかなりガツカリしている。

と言つても本氣で理解出来ないのでから仕方ないじゃん！

「まあいいや… 要するに愛ちゃん、みゆきが罪を償えば戻れるんだよね！」

「え？ いや… 言い切らないでよ、そこまで自信ないんだけど…」

午後九時

私は早く帰ると愛ちゃんと話をしてくる。
そしてふと店内の時計を見ると九時になっていた。

あれ？何が重要な事を忘れているような気がする…
何だろ？… 今田すぐき事… その瞬間、私は思い出した！

「あー…そうだー！」

思わず大きな声が出る。
私が突然大声を出して愛ちゃんがびっくりしている。
そして店内で注目の人になっている…

「なー？何よ急に大声出して…は、恥かしいじやん」

愛ちゃんは周囲を気にしながらもひと言つた。

「「」「」ねえ…」

私はみゆきに夜に明日のスケジュールとか集合時間とか電話する
つて約束していたんだ。

愛ちゃんにその趣意を説明した。

「なるほど…へえ…デートの約束をたんだ？相手が女になつてもキ
ッチリやる事はやるのね」

「やめつて向、いやらしく言つて…」

「あははは、いこじやんこじやん。気にしないの…そつか…明日の内でかけルートね…そうね…まあ相手は今は女の子になってるんでしょ？それならやつぱりデートコースは女の子とおでかけするコースになるんじゃないの？」

「やうかな…それでいいのかな？あと、まだこれはデートじゃないからね」

「あらら、相変わらず私はキツチリ否定するのね…でも元はひとまごえ男でしょ？デートでもここじやん。いやなの？デート」「アーッ

「別に嫌じゃないけど…実感ないし…それにみゆきが男に戻つてから一緒にお出かけした時にデートって言いたいし…」

「董^{すみれ}は細かいなあ…だいたいが、『デート』の方が『お買い物』よりも発言しやすいじゃん。だからデートの方向でOKでしょー。」

「待つて！そういう問題ですか？」

「ええ、かなり重要な事ね…」

「…」

「まあ結論は『デート』だらうが『お買い物』だらうがビックリでもいいんだけど」

「えー…ビックリでもこいのかよー。」

「ふふふふ…でさ、デートコースは董^{すみれ}が当田^{とうだ}に決めれば？集合場所だけ決め手おいてさ」

「集合場所だけ？」

「そりそり一食べるお店くらい決めてもいいけど、あとはその場凌ぎでいいんじゃない？」

「え？ テートてそんなもの？」

「私は最初から『ースが決められてるのってやだし、そりー私は自由人だから！ なんちやつて！』

そう言つて愛ちゃんは声を出して笑つた。

なるほど…自由人か…確かにそうかも…愛ちゃんつて普通の人とは考えが一致しない事も多いんだよね…

だから言つた事を信用すると痛い目を見る事もよくあるし。意見は半分聞いておいたとして、せめて買い物をするお店くらいは五星をつけておいたほうがいいかも…

「あはは…参考にするね」

「よーしーじゃあ、早速電話しなさいー」

愛ちゃんはそう言つて私を指差した。

「え？」

「ほひ、今すぐに電話しなよ」

今度はバックを指差して携帯を出せと仕草で表現している。

「うーん？」

「もうだよ？もう九時でしょ？そろそろMMO趣味の男はMMO廃人モードに突入するんじゃない？推測だけどさ…」

愛ちゃんは満面の笑みでそう言った。

確かに… MMOでは今が一番コアな時間帯かもしね。うちのクラシメンバーも九時位が一番集合するし。私もMMOに一旦集中すると電話になんて出れない状態になる。

まあみゆきには電話をすると言つてあるのだから、大丈夫だとは思ひのだけど…

……やつぱり何か心配だ…

やはり一回はかけておくべきかもしれない。

「わ、わかった…でも」「じゃあれだから…外で電話してへる」

「OK! いってらっしゃい」

愛ちゃんは笑顔で手を振った。

私は携帯を片手にアミレスの外に出た。

左手に携帯を持って、みゆきの携帯へ…電話…を…
実は今日初めてみゆきの携帯に電話かけるのだ…
アドレス帳を検索する指が少し震える。

見つけた…高坂行幸つと…

ポチ…

ついに押した！押してしまった！このままだと…！

トルルルルル

鳴った！鳴ったあよお！

十一
十一

ダメだ、緊張する！待て！負けるなー！」^{したて}ドント手にだぬとみなせ
が図に乗る！

冷靜にならなければ

トルルルルル

私の緊張をよそに電話は鳴り続ける。

あれ?みゆきが電話に出ない...

まさかケーハに夢中なの!? 信じられない! あわただけケーハに夢中になるなって言ったのに!

私は一回電話を切つた。

そしてもう一度電話をかける…

呼び出し音だけがずっと鳴り続ける…
でもみゆきはでない…

何よ…電話は私からだつて解つてるはずなのに…わざと出ないの?
それとも…お風呂?トイレ?や、そりだよねきっと…
よし、後でもう一度電話しようつと…

携帯を折りたたむと私はテーブルに戻った。

「おー!おかえりー!どう?彼氏は電話に出た?ちゃんと約束の確認した?」

「愛ちゃんがすひくへ楽しそうに聞こへる。

「いや…電話で出てくれなかつた…」

「えー?何それ…」

「せひとあれだよ。お風呂とかトイレだよ」

私がせひと愛ひと愛ひやんは腕を組みながら険しい顔になつた。

「董^{すみれ}…もしかしてさ、女でも連れ込んでるんじや…」

「えー?ちょっと待つてー今のみゆきは女だよ?女を連れ込むとか

…

「あ…そうだったね!」

ドルルンピープルル!

その時!突然私の携帯が鳴り響いた!

第十二話？【俺とは違う時間・董くすみれ】編？（後書き）

後書き情報

行幸のアパート住人について。

行幸の今借りているアパートは六部屋あり全てが埋まっている。

住人は全員が男子で大学生。そして全員が何かしら特殊な趣味を持っている。

噂です。

首都高速の直下にあり日射をまったく望めないので普通の人間は住みたいとは思わないようなアパートだが家賃が安い！

行幸は引っ越しして来た時にだけしか住人には会つておらず、ほぼ接点が無い。小説には直接接点のある人物としては登場の予定はないはず？

第十二話？【俺とは違う時間・恋次郎《れんじろう》編】（前書き）

店長編です。これも興味無い場合はパスしてOKです。
しかしながら董編^{すみれ}とは接点があるので董編^{すみれ}を呼んだ方は読まないと
多少違和感出るかも？

第十二話？【俺とは違う時間・恋次郎《れんじろう》編】

「店長お疲れ様でした」

「ああ、お疲れ様」

夜の七時。パソコンショップが終了。俺以外のバイトは全員が
がつた。

俺はレジの金の精算と売上金げを銀行の夜間金庫へ入れる業務、
そして在庫の確認と発注をこなしてから帰宅する。

事務所の机に向かって在庫を整理していると、机の横に紙袋か置
いてあるのに気がついた。

中身を確認すると、それは今日、^{みゆき}行幸が着ていたメイド服だ…
^{みゆき}行幸がここに置いて帰ったのだろう。

そのメイド服を見ていると今日の出来事を思いだす。

そして後悔する…

俺は何故あんな狂つたようなひどい事をしたのだろうかと…

今日の俺はおかしかつた。^{みゆき}行幸が女になつた時はすぐ驚いたが、
あの時はまだ精神状態は普通だった…

少しさは素性がばれそうになつたシーンもあつたが、それでもまだ
どうにでもなるレベルだった。

そう…このメイド服を借りてくるまではある程度は自分を抑える
事が出来ていた…

俺はこのメイド服を借りてきて…^{みゆき}行幸がメイドの姿になつて突如
としてリミッターが外れてしまった。

このパソコンショッピングへ勤め始めて早5年…

俺の趣味はこの店に勤め始める前から今と変わっていない。

そして今まで俺の秘密はずつと隠し通せていたし、すげくスポ

ツマンで健全な店長を演じてこれていた。

それが…それがたつた数時間で秘密暴露、健全なイメージが崩壊した…

まだ行幸と董しか俺の隠してきた真実を知らない。そこだけが多少の救いだ。

俺が一人にちゃんと口止めすればこの先もなんとかなるだろう。ああ見ても二人はキッチリした奴らだ。俺はそう思っている。

俺は紙袋を開けて再びメイド服を見た。綺麗にたたまれたメイド服。

このメイド服は呪われているんじゃないのか?…そう思った。

しかし誰に呪われるんだ?…まさかこのメイド服を貸してくれた女か?

そう言えば…このメイド服を貸してくれたあの女…この辺じゃ見かけた事のない女だった…

秋葉原にあるメイド喫茶の位置はほぼ把握している俺が、あのお店の存在を知らなかつた。

それに見ず知らずの俺にこうも簡単にメイド服を貸してくれるなんておかしすぎる。

あの時もつと怪しみべきだったのか?

俺はふと時計を見る。

するともう八時を回っているじゃないか!

確か…メイド服を貸してくれたあの女…八時半までならお店にいるとかいっていたな。

別にすぐに返さなくてもいいとか言っていたが…これは早く返そう

うー

絶対にここに置いておかないとほうがい！

それにあの女に逢えば俺がおかしくなった原因が何か解るかもしない。

俺は慌ててその紙袋を持つて店の外へ出た。

「確かこいつだよな…」

俺は小走りでそのお店へと急ぐ。
そしてメイド服を貸してくれた女の居るまではお店の前までやつ
てきた。

すると信じられない事が…

「あれ？ 店が無いぞ…」

俺は毎回ここにあの女にメイド服を借りた。
その時にはお店が存在していたはず…何故無いんだ…？

場所を間違つたかと思い周囲を見渡してた。間違い無い。ここだ…
俺はメイド服を借りた時の事を思い出す。

俺は行幸に合つ服を行きつけのメイド喫茶の子に借つよつと思つ
てこの道を歩いていた。

その時に借りてこようとしたのは別にメイド服といつて訳ではない。
女性物の服ならば何でも良いと思っていた。

すると一度この場所で見た事の無いメイド服を着た女にいきなり
声をかけられた…

女は銀髪のロングヘアで瞳は透き通るような青色。

身長は170センチくらいだろうか？スタイルも良く、正直客引きをするレベルの子じゃなかった。俺は見た瞬間外人かと思ったが、話しかけてきた言葉は日本語だった。

しかし日本人にはとうてい見えなかつた。

「お兄さん！」

女に突然声をかけられたが、俺は仕事中だったし知らないメイド喫茶になんて寄る時間はないと思つて即断ろうとした。

「あ、今は仕事中だから」

俺がそう言つとその女は笑顔で言つた。

「何か急いでる様子ですかけど？何かお困りごとでも？」

「いや別に？」

俺はそう言つてその場から立ち去ろうとした。
しかし女は俺の手をいきなり掴んだ。

「えー？な、何だ？俺はちょっと急いでるんだけど」

女性は俺の目を見ながら言つた。

「困つているつて顔に書いてある人をほっておけないだけです」

何を根拠にそう言ったのかはわからない。だけど俺は今まで言

われて無視が出来なくなつた。

そして何故か女物の服を借りに行く途中だと呟つてしまつたんだ…
するとその女は言つた。

「そうなんですか？それじゃあつけのお店のメイド服をお貸しあ
しょつか？」

「え？いや、見ず知らずの方に借りるなんて出来ないですから」

「大丈夫ですよ？ほら、たつた今知り合になつたじゃないですか」

女性は笑顔でそう言つた。

「しかし…」

俺が困つているのをよみこ、女性はさつさと店へ入る紙袋を手
にして出て来た。

「後でお店に戻してくれればいいですから、ほら遠慮しないで」

そう言つてその紙袋を俺に差し出した。

「…いいんですか？」

「もちろんー」

俺は疑う事も無く、その女からメイド服を借りたんだ…
確かに存在した。記憶も鮮明に残つてゐる。あの特徴的な女を忘
れる訳は無い。

でも店が無い！

俺は紙袋に入ったメイド服を見た。

真新しいメイド服…

待てよ…考えてみれば、行幸の事は何も教えてないのにサイズが
ぴったりだつた…

まるで行幸みゆきの為に作ったかのように…不思議だ…

俺は一応もう一度周囲を走り回りお店を探した。しかしいくら探してもメイド喫茶は存在しない。

仕方無く俺は服を持つて知り合いのいるメイド喫茶へと急いだ。

その店が消えた場所から小走りで数分いつた所の雑居ビルの4階に俺の行きつけのお店がある。

俺はメチャクチャに遅い油の匂いが漂うエレベーターは使わずに階段を駆け上がりそのままお店に飛び込んだ。

ちなみに、このお店は営業時間が二十時半迄でお店は閉店の準備を始めていた。

お店に入ると田の前に女が一人。

「あー恋ちゃん! いらっしゃいー!」

俺は常連なせいか「いらっしゃいませ、ご主人様」と的な掛け声はない。

「おう! 優理

「今日はどうしたの? もう閉店だよ?」

俺に馴れ馴れしく声を掛けってきたこの女の名前は小鳥遊優理。
『ひとつあるべく『じつ』と最初に言つてすつしぐれられた記憶がある。

この子は確かに何処かの大学に行ってるはずなんだが…毎日ここでバイトをしてる気がする。
ちゃんと学業しないと行幸みゆきみたいになるぞ…

「今日は別にお店に来た訳じゃない」

「え？ じゃあ何？ もしかして私に逢いに来たとか？」

「この子はこの手の冗談をすぐ言つ。

俺は何度も言われて免疫が出来てしまつたので何とも思わないが。

「あ、それは無いから」

そして何時もの様に断る。

「えー残念！」

そう言つ優理の顔はとても残念そうには見えない…逆に楽しそうだ。

「じゃあ何なの？」

「これなんだけど…」

俺はそつと紙袋の中身のメイド服を優理に見せた。

「え？ 何？ これってメイド服？ つわー！ シンプル！ これって実用的ね… いわゆる本物？ でもこれビーフィたの？ もしかして恋ちゃん… こっちの方に向ひついで？」

「ないない！ セーフィじゃない！ セーフィやなくつて、 聞きたいのはこの辺でこのメイド服を着たメイド喫茶とか知らないかって事だ」

「え？ このメイド服を着たお店？」

優理は腕組みをして考えている。

しかしその表情を見るからに、 てっきりいたる節はなせんつだ。

「『』めん… 私の知る限りだと無こと悪い…」

やせりとこいつかそうだよな…

「恋ちゃん、 それ、 ちょっと貸してくれるかな？」

「あ、 ああ…」

「お店の子に聞こへくるが、 うー。」

「ああ、 すまん」

優理は紙袋を持ってお店の奥へと入って行った。

「おおー！ 恋次郎さんー！」

「つわあー。」

俺の左横から声がしたと思つたが、お店の店長が…

店長はビシッとスーツ姿で中肉中背、身長は180センチはある
だろか。

髪型もぱっちり決めているが…正直俺にとっては危険人物だ…

「おやおや入口で何をしてるのですか?もしかして…今日はこの前
話をしたラガーマン喫茶の件、承諾して来てくれたのですか?」

「待て、あれは断つただろ、俺はそういうのに興味はない」

「あら…残念」

「だいたい何だ?そのラガーマン喫茶っていうのは?秋葉原でそん
なお店を開いても流行るはずないだろ」

「え?恋次郎さんは知らないのですか?今、動画サイトでは筋肉男
子系の動画がは流行つているのですよ?筋肉ムキムキ!っていうの
が!女性だけでは無く、男性にも人気があるのです!」

「おい!筋肉男子系つて何だ?ちなみに俺は男に趣味はない!…あと
俺を名前で呼ぶな!」

店長はクスクスと小声で笑つた。

「残念ですね…時給一万円は出そうかと思つていたのですが

え?な、何だと!一万円…時給!…?一日で八時間働いたら八万円
!?

一ヶ月だと…「うおおおおおおおおつお!

そんなにお金があつたら…『メイド地獄放浪物語』十八禁とか『麗しきわが嫁達』十八禁とか『メイドでごめんS.P.テラックスボックス限定フィギュア付き』全年齢とか、何でも買えるじゃないか！

「おや？ 恋次郎さん？ その表情は本気になつて頂いたのでしょうか？」

その時、お店の奥から声が聞こえた。

「恋ちゃん！ おまたせー！」

優理が戻つて來た。

「あい、 小鳥遊さん」

「あ、 店長？ 何してんの？ あ、 とつあえず」のメイド服は返すねー！」

優理は店長を見ながら俺に紙袋を手渡した。

「ちょっと恋次郎さんを勧誘してまして」

「勧誘ねえ… 恋ちゃん、 どうせ時給一萬円とか言われたんでしょ？ 絶対嘘だから信じない方がいいわよ？」

優理がそういって店長の顔色が変る。

「何を言つてゐのですか？ 私は嘘をついた事はありませんよ？」

「えー！ 嘘つきじゃん！ 私がここに入る時だつて、 時給三千円とか言つてたのに、 初日だけ時給三千円とか！ 後はずつと時給八百五十

「田じゅん…嘘つせーこれって詐欺以外の何ものでもないじゃん…」

「時給三千円は実行したのですから嘘では無いでしょ？」

「何よその言い方!」のお店やめかけよ?いんだよ?私はいつ見えても他のお店からいってはスカウトされてるんだから…」

「ちょ、ちょっと待って下をこ。貴方は店長である私を脅すのですか?」

「脅しじゃないよ。意見だよ、意見!でも時給アップしてくれれば考え直すわよ」

「何だ!」のやり取りは…

「よ、よし…じゃあ八百六十円にしましょ!…」

え?おこない、そんなに簡単に時給がアップするのかよ…?

「わい…やった!時給アップ!」

「仕方ないです…他のメンバーには内緒ですよ!」

「わかつてゐわよーえへへ

何だ!このい加減ね…しかしそんな事はどうでもいい。

「おー…優理、このメイド服の事は?」

優理ははつとした表情で俺を見た。

「そりだ！そりよねーごめんー！」

優理は舌をぺろりと出して可愛げに謝る。

しかし何だらうな…俺はいつこう仕草を見ても優理にはあまり萌えない：

今の女になつた行幸^{みゆき}の方が何倍も萌えるな。

…え？

な、何だ！俺は何を考えているんだ！やばい…まだ俺はおかしいままのか！？
も、もしや…このメイド服のせいなのか！？早く手放さないと…。
「で？どうだつた？知つている子はいたのか？」

「いめんね、誰も知らないって…」

やはり予想してた通りか…

しかしこのままこの服を持って帰るのは危険だ…こいつなつたら…

「おこ店長ー！」

「え？は、はい！？」

「お前がこのメイド服を預かれー！」

「えー？な、何故私が！？」

「理由は無い！俺が返せと言つまで預かれ！」

「そんな理不尽な……」

俺は強引に紙袋を店頭に押しつけた。

「よし、俺は戻るー優理、またな」

「え？あ、うんまたね！オープンしてる時にまた来てねー！」

「おひー。」

俺はやつぱり急いで階段を駆け下りた。

ふつ……ヤバイな……あの時俺は一瞬だが行幸のメイド姿を思い出して萌えてた……

危険だ、やつぱりあのメイド服は呪われている……

俺は急いで店に戻った。

第十二話？【俺とは違う時間・恋次郎《れんじろう》編】（後書き）

後書き人物紹介？

小鳥遊優理

たかなし ゆうり

年齢 不明。多分大学二年か三年だと思つ。

身長 163センチ位

体重内緒キロ

恋次郎の通うメイド喫茶のバイトの女の子。

髪の色は黒で普段はポーテールにしている。

痩せてはいなく体は少しふくら系。

特徴は胸が大きくFカップ。おかげでメイド服は特注品。

胸について本人は大きい事が嬉しくもあるが悩みもある。

普段からとても明るい女の子で基本的には誰にでも友好的。

大学生のはずだが昼間からメイド喫茶でバイトをしており、学業はどうなったんだと恋次郎は心配しているようでしてない。

メイド喫茶に働いているが、理由はバイトの時給に惹かれて始めただけで、メイドになりたかつた訳でも、メイド喫茶の意味をわかつていた訳でもない。

行幸や董とは今の所接点は無い。

第十二話？【俺とは違う時間・董&恋次郎そして愛編】（前書き）

もつと「」で本編？へ戻ります。

第十二話？【俺とは違う時間・董&恋次郎そして愛編】

パソコンショップの事務室

俺はメイド服を手放す事に成功し、安心して店へ戻り売上金を集計中。

「なんだと…二四一二十円足りない…いつ間違ったんだ！」

レジのお金が合わずについ声が出た。

くそ…仕方ないな…今回も俺が出しておくか…

レジの精算金が合わない場合、小額だと俺がいつも自分の財布から帳尻を合わせる。

多すぎた場合は店内の金庫に保管する。しかし何故か少ない場合の方が多いんだよな…

自分のお金から清算つてやっちゃダメだとは思つているが、正直言つて原因を追求するのが面倒だ。

それに追求なんてしていると日が暮れてしまう。まあ…既に暮れてるのだが…

とにかくこれで清算も終わりー在庫の発注もした。

もう九時になるし、そろそろ家に戻ろう。

俺は店の戸締りをチェックして事務室の鍵を閉めようとした。
その時、ふと行幸みゆきと董すみれの事が頭に思い浮かぶ。

そうだな…今日はあの一人には俺の暴走で悪い事をしたかもしが

ないな。

きちんと謝つておくのが大人としての筋だろうな……電話するか……

俺は事務室内に戻り椅子に座ると携帯をポケットから取り出した。

まづは行幸だな……

俺はアドレスから高坂行幸を探し、そして電話をする。

トウルルルル

呼び出し音が携帯の中で鳴り響く……

トウルルルル…トウルルルル…トウルルルル…トウルルルル…トウルルルル…

ん？出ないな…ゲーム中か？仕方ない、先に董にかけるか…
俺がそう思つて電話を切ろうとした瞬間！携帯から女性の声が聞
こえる。

「あ、はい、もしもし？」

やつと行幸が電話に出たか。
みゆき

「もしもし？俺だ、今日の件だけど」

「え? え? と...あの? どちら様でしょうか?」

あれ？どちら様？何だ？行幸じゃないのか？
よく聞けば声が違うかもしれないぞ！？

俺は慌てて携帯画面を見て発信履歴を確認した。

高坂行幸と画面にさわやかと出てこる。俺がかけたのは絶対に行幸の携帯だ。

何で他人が、それも女が行幸の携帯に出てるんだー？

「え、えっと、また電話します…」

俺はやつひ言つて思わず電話を切つた。

店内に鳴り響く携帯の音。

私は慌てて携帯を取り出して着信名を見た。

もしかしてみゆき！？

しかし、携帯に表示されていた名前は店長。
何だ店長か…みゆきかと思つてドキドキしたじゅぢゅん…

「董、彼氏じゃないの？出でこなよ。」

愛いちやんはニヤつつきながらひつひつた。

思いつきつ勘違いされてる…

「違う、バイト先の店長…」

「え？あ、そ、わうなんだ？で、でも出た方がいいんじゃない？」

愛ちゃんは電話の相手を勘違いしていたのを理解したらしく、苦笑を浮かべながらそう言った。

しかしいつたい何の用事よー店長が私に電話とか。今日の事で怒つてるのかな?

仕方ないな…出るか…

「あ、うん…えっと、じゃあちょっと待つって」

「うん、こいつらっしゃい」

私は慌てて外へ出て電話に出た。

「はい、永井です」

「あー董^{すみれ}か?」

「はい、何ですか?私、今日の事は謝りませんよ?」

「いや、その事じゃない。その事はもついい。董^{すみれ}の主張は正しい。それに今田の事は俺も悪かつたからな。逆に謝るよ。すまん」

あれ?店長が謝ってきた…普通の店長に戻ってる?あれれ?
今日の昼間はあんなにおかしかつたのに…

「え、あ、えっと…私もすみません、少し我がままでした」

「いいよ。今日は色々あつたからな…仕方ないだろ」

やつぱり普通だ…まあ…いつか。

「で?…どうしたんですか?」

「みゆき行幸の事なんだが…」

「え?…みゆき?…どうしたんですか?」

「今…俺がみゆき行幸の携帯に電話したら、知らない女が出たんだ」

「え!…女!…それって女になつたみゆきじゃなくつて?」

「じゃない…違つた」

「えええええええ…」

プチ!

私は電話を切つた。そして慌ててもう一度みゆきの携帯に電話する。

デキデキデキデキデキデキ
お、女つて…どうこの事よ…

トルルルル…トルルルル…トルルルル…

出ない…出ない…出ない…

力チャヤー…と音が聞こえる。
あ!…出たかな!?

『おかげになつた』

今度は留守電に切り替わった。

私は留守電だと確認した瞬間に電話を切った。そしてすぐに店長に電話する！

「ウ…ガチャ！」

「茨木だ」

まだ「ールしてないのに店長が電話に出た！」

「店長…出の早すぎやー。」

「な、何だ！お前がいきなり電話を切つたから、切れたのかと思つて待つてただけだろ？が！」

「え？あー。」めんなさい

「うだ…私がブチキリしたんだつた！」

「出ないんだけど！」

「誰が！行幸みゆきの携帯か？」

「そう！私が電話しても出ない！」

「そつか？じゃあ俺がもう一回電話して確認してみる

「あ、はー」

「また電話するから待ってね」

「はい…」

私は電話を切った。

そして三分後…

ドルルンピープルル！携帯が鳴る…店長だ…

「はい！永井です！」

「おう！俺だ」

「店長、どうでした？」

「出た…」

「みゆきが？」

「いや…さつきの女が…」

「え？…何それ…」

「でもな、今度は高坂ですって出たから…行幸さんの携帯ですか？」
て聞いたんだ。そうしたら『はい』って

「な、何よそれ！」

「で、どちら様でしょ？って聞いたら、『妹です』だと言つてた

「ぞ

「妹！？存在は私も知ってるけど、でも妹だったとして何で私の電話に出ないの？理由がわからない……」

「しかし、こんな平日のこんな時間になんて妹がアイツの部屋に来てるんだ？俺が知る限りでは確か行幸^{みゆき}の妹は高校生だつたはず……それに行幸^{みゆき}は今女になつてるんだろう？妹を部屋に呼ぶとかありえないだろ？」

「そうよね……店長の言つ通りかも……妹とかは口実で、実はみゆきには彼女が居たの？」

「私の電話に出ないのはその女が他の女からの電話だつて思ったから？」

「そうかも……私なら彼氏の携帯に他の女から電話がかかってきたら絶対出ないもん！」

「店長！私にみゆきの家の住所を教えて！」

「え？教えてつて？まさか行くのか！？」

「もうひるんー確認しに行くー！」

「俺も行こうと思つたんだが？あれだぞ？俺が報告してやるから無理に来なくつていいいぞ？」

「え？店長がみゆきの家に行く！？」

「どうしよう…みゆきのアパートに女がいるのも腹立たしいし、この田でちやんと確認したいんだけど……」

もし本当に店長の電話に出た女性がみゆきの妹で、みゆきには何

もなくって、店長がみゆきの部屋に行って、みゆきから店頭に立つて

の買い物がばれるのも何だか嫌だし…

やつぱり一緒に行かなきゃダメね…

「えっと、あれよ、あれ、私もこの件に関わってるし、確認に行く
義務があると思つの」

「義務? そんなのはお前には無い。俺一人で十分だ」

「ダメー! 店長は今日の一件があるから信用出来ないー! 行くー! 私も行くからー!」

「何だとー? 僕が信用出来ないのか? つてまあ今日の俺じゃあ信用
しきつて言えないな。仕方ない、じやあひょいと待てよ…」

今のお会話を聞く限り店長は普通に戻つているから信用出来るかも
しないんだけど…

と…保留になつてている間に住所をメモ出来る場所まで戻らなきゃー!
私は急いでファミレスの中に戻る!

「あ、おかえり? 用事済んだ?」

愛ちゃんが笑顔で私に言った。

それと同時に保留が解除される。

「愛ちゃんごめん、ちよつと待つてて」

「え? 何?」

愛ちゃんはキヨトンとした表情で私を見ていた。

携帯から姉の声が響く。

「董、いいか?...」

「はー」

「東京都墨田区...」

私は机に出てこぬままの打ち合わせへーーに住所を書き下した。

「OKーー書き下したーーあつがとう」

「おひーー何かあつたら電話くれよーー俺は今から店を出て向かうから」

「わかつたわ

私はそう言って電話を切った。

田の前では相変わらずキヨンとした表情の董さんが...

「な、何?何があつたの?..」

「"いみんね愛ひやん。私、行くねー」

「ちよーーちよーと待つてよー。」

「また私から電話するからー。」

せつまつて私は慌ててスマートフォンレスを飛び出した。

な……何よ……何がどうなったの?

董、何でみんなに慌てて出て行つちゃつた訳!?

もしかして彼氏の家に向かつた?

わーお…そつか!…そうか…董も行動に出たか。

今度結果を聞いてやろつと!

つていうか…待つてよ?食事代もらつてないし!

私は伝票を確認してから自分の所持金を確認する。
あの子…バンバークセット頼んだの!…高いなあ…
でもどうやら大丈夫ね…一千円くらいしか残らないけど。
今月はコスプレ衣装にお金がかかりすぎて大変なのよね。

…………
あーあ…「一ヒー一百円で我慢した意味が無いじゃん…

ダ、ダメよ愛!年下のかわいい後輩じゃないのよ!

急いで彼氏の家に行つたんだよ?いいじょん!…そうよ愛ー…これが
愛なの!って私の名前じゃないよ?

ふう…仕方ないわね…今日は私が喜んで出しておきますか!

よーし…お店からでようかな…

私はテーブルの上の冬コモのノートを鞄に仕舞いこんだ。
するとテーブルの横にファミレスの店員が…

「おまたせしました!季節限定の冬のびっくりパフェです」

「え?私はそんなの…あれ?頼んでましたつけ?」

「はい、お連れの方がご注文されました」

「えー？」

董^{すみれ} 何時の間にこんなものを…

「こちらに置いても直しいですか？」

「あ、はい…」

私の目の前に「コトコ」と重そうな音を立てて超ビックなパフェが置かれた…

「うーん…これはどうしたものか…」

「お客様、請求書をここで入れておきます」

店員が請求書をくるりとまるめるとプラスチックのケースへと入れた。

私はそーと請求書を取つて金額を確認してみた。
えつと…パフェの金額は…

冬のビックパフェ九百円

「高あー。」

私は思わず店内すべてに聞こえるような大声を上げてしまった。
知らない間に店内にはお客様はまったく居なくなっているが、しかし逆に店員の視線を集めてしまった。

「これほどのにかしないこと…

「あはは…お、大きめですよ…ほーりーす、すー」ーーー大きいパフェ
だなあ…えへへ」

今日はキッチンスペースからも店員が出て来て私を見ているじや
ん…

しまつたあー更に注目を集めてしまつたあああ！

田の前に置いてある超特大パフェ…
店員の注目の私…

私は甘い物があまり得意じゃないし…でももつたいないし…注目
集めてるし…

仕方ない…食べますよ、これも運命だと思つて…

「パク…う…甘あーーうえええん…甘いよお…」

私は作り笑顔で、しかし心の中で泣きながらパフェを食べた…
すみれ
董の馬鹿…

第十二話？【俺とは違う時間・董&恋次郎そして愛編】（後書き）

後書き人物紹介？

店長

小鳥遊優理たかなし ゆうりの働いているメイド喫茶の店長。

年齢は恋次郎と同じくらいで、若くして事業？に成功した。いつも黒髪をポマードで固め、黒いスースツ姿で、身長は175センチ。体重は77キロ。

筋肉質の体で体格が良い。

秋葉原に自分のお店を十店出す野望に燃えている

現在はラガーマン喫茶という怪しいお店を企画。恋次郎を勧誘中。店長は本気で誘っているが恋次郎はその気はない。たまにオネエ言葉になるが決してオカマ等ではない。

第十四話【俺の妹のターン！？って何で妹が登場するんだ】

「…いつ見ても汚いアパートね…」

高速道路の脇にある日も当たらないボロアパート。
何でこんなアパートに行幸住んでるんだろ？金銭的に厳しい筈だ
し、自宅からでもアルバイトにも行けるし家賃だってかからないの
に。

あれか…家にいるとパソコンが自由に出来ないし、両親にも煩く
就職しろって言われるからか。

いつからだろ？行幸がパソコンに熱中しだしたのって
何だか知らないけどパソコンゲームを始めてから、行幸はパソコンの画面を眺めてニヤニヤしたり笑つたりするようになつたんだ。
私もそういう行幸を見ていると何だか腹が立つてイライラしてつい文句を言つてしまつ。

両親にも私にもそういうゲームを止めると色々と言われて行幸も家を出て行つちゃつたんだ…

居なくつて清々したと思つたけど、でもやつぱり家に居なければ居ないでなんか寂しい氣もする…あーあ…馬鹿兄貴め…

私の名前は高坂幸桜。高校三年生。

名前を見て解るかと思うけど、私は高坂行幸の妹。

ぶつちやけ言つと私の名前は古風すぎるし、行幸もそうだけど、

当て字すぎて名前を一発で読み当てられた事が無い。

いくら幸せになつて欲しいからつて名前に幸を入れたつて言わ
ても、私にすれば読みやすい名前にしてくれた方がよほど幸せにな
れた気がする。

おまけによく一人の読みだけを見た時は姉妹と勘違いされ
る…

漢字だけを見たら兄弟だと思われる。つと…そんなの関係ないか、本題に戻らないとね。

私は兄の住んでいるアパートの目の前まで来ている。
どうして平日の夜に行幸のアパートに来てるのか?
まあ確かにそういう疑問は起こるわよね。

今日はたまたま錦糸町に寄る用事があつたのと、明日が学校の創立記念日で休みだったのでたまには様子を見に立ち寄らうと思つただけです。

両親にも様子を見て来いとか言われたんだけどね。

えっと、確か二階だよね…

私はアパートの金属製の階段を一段一段上がつてゆく。

カツンカツン…

金属製の階段が軽い金属音を響かせる。

ええと…確かにここかな?私は行幸の部屋の前に立つた。

私の目の前には茶色く汚れた木調のドア。このドアには呼鈴、ようするにピンポンチャイムが付いていない。だからいつもノックするか携帯をかけるかしか行幸に来たという事を伝える方法が無いんだけど…

しかし、何このドアの汚れ…触ると何かの細菌が手に移りそうで怖い…

あとは、ここアパートの住人って全員怪しい男だつて情報を聞いてるから、こんな若い女子高生が訪ねて来てるつてばれたら…まあ何もないかな?

さつき携帯に電話したけど出なかつたし…仕方ない…ノックするしかないか。

私は恐る恐るドアを「ンンンン」と二度ノックをした。しかし中の反応が全く無い。

ドアの横にあるキッチンの窓からは明かりが漏れている。だから中にはきっといるはずなのに…

もう夜八時を過ぎてるし、きっとあのくだらないパソコンゲームにまた夢中になっているんだ。私はそう決め付けてバックの中から合鍵を取り出した。

そして私は何の躊躇も無くドアを合鍵で開ける。

ドアは『ギイイ』と怪しい音を立てて、ゆっくりと開いた。

アパートの中は電気が付いており明るい。

「行幸い？ いるの？」

私は中に入るとドアを閉めた。そして靴を脱いで部屋の中へと入る。すると部屋の中からすさまじいカツチラーメン匂がした。

「行幸^{みゆき}、またカツチラーメンとか食べてるの？」

私はそう言いながら玄関を入りダイニングへと進む。するとダイニングの向こうの部屋に人が横たわっているのが見えた。

しかしダイニングテーブルや間仕切りの建具で足しか見えない。行幸寝てるの？ 私はそつと横になっている人に近寄ってゆく。すると『トゥルルルル！』といきなりダイニングテーブルの上に置いてある携帯が鳴った。

携帯電話はどう見ても行幸の物だ。見覚えがある。

私はそつと着信名を確認した。するとそこには『すみれ』と表示されている。

すみれ？ すみれって女性なのかな？ もしかして行幸に彼女！？

いや… それは無いよね… でもどうしよう…

私がそんな事を考えていると電話は切れてしまった。

あら、切れちゃった…まあ女性からの電話に私が出るのもね…うん…

私は何気なくダイニングの横のベットとパソコンの置いてある部屋の方を向く。

良く見ればパソコンの横のカーペットのカッफラーメンが散乱している。

そしてその横には人が横になっている。

全身を見て気が付いた。先ほどまで行幸みゆきだと思つていたけどよく見れば行幸みゆきじゃない！

え？ な、何！？

そつと体を屈めてその横になつている人の顔を確認すると女性だという事が解つた。

お、女！？って！何で女が行幸みゆきの部屋にいるのよ…？
私は大パニックに陥つた。

落ち着いて…幸桜じはる…落ち着くのよ…一応あれだよ、行幸みゆきだつて男だし…恋人の一人や一人くらい…

無い…考えられない…あんなパソコンオタクの行幸みゆきを彼氏にしたい…とか思う女なんて余程の物好き以外にいるはずない！
待つてよ…じゃあこの女…もしかして物好き女なのかな…
ちょっと待つてよ…もしかして拉致みゆきしたとか！？パソコンゲームの影響を受けてついに犯罪者に！？行幸みゆきが女の子を拉致して監禁！？
そしてこの子に言うの『おまえは今日から俺の奴隸だ、食事は力ツ プラーメンだ』

なんていやらしい…やっぱり一人暮らしなんてするにはこうこう

理由があつたのね！

…つていくら何でもそんな事はしないよね…
だいたい行幸みゆきが部屋に居ない今の状況ならこんなボロアパートから何時でも逃げ出せるし、今も何か特別な事をされている様子も無いし。

きっとパソコンの電源はついているから、この女性が遊んでいる間に寝ちゃったのかな…

つていう事はこの女もゲームオタクなの！？それはありえるかも。類は友を呼ぶつて言うしね…まあ起きたら解るか…それにしても行幸みゆきは何処にいったのかな…

『トウルルルル！』

「うわあ…」

びっくりした…また電話だ…

私が考え込んでいるとまた行幸みゆきの携帯電話が鳴った。

今度は誰！？さつきの女？私は再び携帯電話の着信名を覗き込む。するとそこには『店長』と書いてあった。

店長！？つて…行幸みゆきのアルバイト先の店長？これってもしかして重要な電話なのかな！？

で、出るべきかな…私は妹だし…出ても別におかしくないよね…よし…行幸みゆきが留守だし…出てみよつ…

「あ、はい、もしもし？」

「もしもし？俺だ、今日の件だけビ」

電話の相手は男性だ。声は低く大人っぽい。やつぱりアルバイト先の店長かな？

でも今日の件つて何だろ？…待つて…もしかすると店長とこうのは偽名か何かで、実は普通のお友達とか？「うーん…わかんないから聞いてみようかな。

「え？えつと…あの？どうやら様でしょつか？」

私がそう質問をすると電話の向こうでガサガサと音が聞こえる。この音は携帯電話を弄つてるのかな？つてもしかして私が出したから誰だろ？…とかそういう事になっちゃつてるとか！？おかしいな？妹だつてわからんないのかな？

あーしまつた！妹だつて言つてない！言わなきや！

「え、えつと、また電話します…」

ガチャー！ツーツーツー

「え？あーもしもしー…もしもしー」

私が妹だと言つ前に電話は切れてしまつた…

うーん…切れちゃつたどうしよう…またかかつて来るかな…それとも行幸みゆきが戻つてくるのが先かな…

そして私はこの状態でどうすればいいの？
うーん…

私は部屋の横になつている女性を見ながらしばし考えた。この女性を起こして行幸みゆきの行き先を聞くのはどうかな？

そうね考えてみよう…例えばここで女性を起しす…すると女性は私を見てびっくりする。

私は妹なの！…女性は信じてくれない！
行幸みゆきは戻つて来ない。そして修羅場と化す！

あう…ダメな方向の想像をしてしまった…

そ、そうよね…例えば私が彼氏のアパートで寝てたとして、いきなり私が女に起こされたらその女が私は貴方の彼の妹なのよって言った。

すぐには信じないよね。そうだよね……って私には彼氏なんていないじゃん！

自分に突つ込んでどうするのよ…なんか虚しいよ…

ちょ…ちょっと落ち着こうね私…ほら、深呼吸して…

『トゥルルルル!』

「うわあ…」

まだびっくりした…電話だ…店長かな…

私は着信名を確認する。するとそこには『すみれ』と表示されている。

さつき電話を掛けてきた女！また掛けてきたのね…でもここは私が出るとダメだよね。

きつとすつごく勘違こされる…そうよー出たらダメーうん…

『トゥルルルル! プチ…』

電話が切れた。私は携帯を覗き込むとビックり留守電話になつたようだ。

これでいいんだ…あーもうー早く行幸戻ってきてよー

はあ…溜息が出る…

行幸の様子を伺いに来ただけなのに、何でこんな変な事に巻き込まれないといけないのよ…後でとっちめてやるから…ふつ…

それにしても……よく寝てるわね……こんな汚い部屋でよく開れるわ

……関心する……

『アカルルルル!』

「うわあー…

またまたびっくりした私つて何……
よし……今度こそ店長さんかな……
着信名を確認する。すると『お姫様』と出ていた。店長だー。
よしーちゃんと妹ですーって言わないことー！

「もしもしー高坂ですー。」

私は電話に出ると真っ先に名前を名乗った。

「え？ 高坂？ それって行幸さんみゆきの携帯ですか？」

先ほどと同じ声だ。行幸の携帯電話なのか確認してきてる。

「はい、です

私は即答でそう答えた。だってこれは行幸の携帯だし。

「あの……どう様でしょー?」

今度は誰かを聞かれた。そつかー！ 高坂とは出たけど姉とも妹ともまだ言つてないや。

「私、
高坂行幸の妹です」

「え?妹さんですか?あ、あの…行幸は?」

「えつと…今は外出中です。何か用事でも?」

「あ、大丈夫です。また電話しますので…それではまた」

あれ?用事は何?何だったの?»

「あ、えつと…」

店長からの電話は切れた。うーん…ちゃんと妹だとは伝えたしこれでよかつたのかな…

携帯電話をダイニングテーブルに置くと私はパソコンのある部屋へ顔を向けた。

私の視界の中には部屋で寝ている女性…そうだ…まだこっちがあつたんだよね…

どうしようかな…私はこれからどうしようかを考えた。

そうだ…ここで私がこのまま帰るつてこうのはどうかな?
形跡を残さないようすればいいじゃないのよ!»

……

つて…せつしき思いつきり行幸の携帯に出かけたじゃん!

あーもひ…私がここに来たのつてバレバレ…

もういつなつたらやつぱり行幸が戻つて来るのを待つしかないかな…

な…

私はふうと小さく溜息をつくとダイニングチョアに腰掛けた。
そして部屋で横になつている女性をよく観察してみる。

この女…よく見ればスタイルいいじゃないの？胸も大きいし…なんかわいいし…

女の私が『ムラツ』ときちやいそなオーラがでるし…え？いや！私はGJ系の趣味はございませんよ…って誰に弁解してるので私…

でも何でこんなかわいい子が行幸みゆきの部屋に？まさか本当に彼女なのか…

この子もやつぱりパソコンゲームオタクなのかな？それで行幸と知り合つて同性する仲にまでなつて…世の中には私が理解出来ないような出来事つて結構あるかもしけないし…ありえる？

って事は！？この子と行幸みゆきは毎夜のようにあんな事やそんな事や…まさか、あんなすつごい事までしてるの！？

イヤラシイ！もう…なによ…私の知らない所で行幸みゆきは大人になつたつて事？

か、帰ろつ…もつ帰ろつ…こじにいぢや駄目だ！

その瞬間！リビングに横になつていた女性がいきなり痙攣を起こしたかのように振るえだした。

「え…？えええ！？」

そして仰向けになり口をカツと開いたかと思うと、今度は死んだかのように目から生気が無くなつてゆく。

私は慌てて椅子から立ち上がつた。

何よ！？もしかして心臓発作とか？この子つて死んじゃうの？やだよ！目の前で人が死ぬ所を見るなんてやだ！

私の心臓は動揺してドキドキと鼓動している。そして手が震えだ

した。

やだ…どうしよう…

そうだ、きゅ、救急車？呼なきやー

私は慌てて^{みゆき}行幸の携帯を手にとった。

その時、女性が一瞬だがびくりと動いた。そして『うひ…』と声を出す。

え？動いた！？声を出した！？まだ生きてる！？

私は携帯を一度ダイニングテーブルの上に戻すと急いで女性の状態を確認する為に女性の側まで寄つた。そして私はしゃがみ込み女性に出を延ばす。

「心臓は動いてるのかな…」

そして私が女性に触れたその瞬間だった！私の体に電撃のようなものが走つた！

ビリビリっと凄まじい痛みが私を襲う…

「な、何よこれ！痛いよ！痛い痛い！」

動けなくなる程に強いその痛みと衝撃は私から意識を奪い取つてゆく。

やだ…こんな所で感電とか？私、まだ死にたくないよ…
助けて…お母さん…お父さん…お兄ちゃん…

私の視界はぼやけてゆき、そして頭の中も真っ白になつた…

行幸のターン！
みゆき

「うーん…」

俺は意識を取り戻した。少し硬い床に横になつてするのが背中から伝わる感触でわかつた。

部屋の中なのかな？

俺はゆっくりと目を開いた。そして倒れたまま周囲を見渡す。すると俺の視界には天井まで一十メートルはあろうか大きな空間が広がっている…

え？ 何だここは？ 俺は確かに部屋の中で倒れたはずだぞ？ 俺は慌てて起き上がり周囲を確認する。

大きな石造りの建物…赤い絨毯の敷き詰められている床。ここは奥行きのある大きな建造物の中ようだな…

「何だここは？」

俺は数歩前へと前進する。すると着ている服に違和感を感じた。俺は慌てて自分の格好を確認してみる。すると自分の格好が部屋の居た時とは違う事に気が付いた。

これって…俺が昼間に着ていたメイド服じゃないのか？

見覚えのある色彩、そしてデザイン…そしてひらひら…これは昼間に俺が着せられていたメイド服に間違いない。

待て…おい…なんで俺の格好がメイド服なんだよ…

何だ？ 俺はどうなったんだ？ ここは何処なんだ？ おいおい…

俺は気を失つて氣が付くと俺は石造りの巨大な建物の中に入メイド服姿で放置されていた。

一瞬夢かと思つたが、凄まじく鮮明な周囲の景色や服のリアルな感覚からすると夢とも思えない。

俺が気を失つた後に誰かがここに運んできたといつか？
そんな馬鹿な…どうやつてこんな場所に？俺の知る限りでは俺の住んでるアパートの近くにはこんな建物は無い。もしかしてこれは映画のセットか何かなのか？

まさかな…頭の中を疑問符が埋め尽くす。

とりあえず探索してみるか。

俺はゆっくりと赤い絨毯じゅうたんの上を歩き出す。

ふわりふわりと俺の足型で凹む赤い絨毯じゅうたんはいかにも高級だぞとアピールしているようにも感じる。

「誰か居ないのかよ！」

俺は大声で叫んでみた。しかし返事などあるはずも無い。
と思っていたら！

「はーー居ますーちょっと待って下さーー。」

何処からともなく大人びた女性の声が聞こえた。

え？誰かいいるのか？

俺は取り合えずその場でしばらく待つてみる事にした。
そしてゆっくりと周囲を見渡す。

すると何処からともなく「きやああー！」という悲鳴が聞こえた。

先ほどとは違う子供っぽい女性の声だ。

俺は周囲を確認した。前も後ろも右も左も人の気配などまったくない。

すると…ヒューン！…という空気を切る音が真上から聞こえる！

俺は慌てて上を向くと…上から凄い勢いで何かが落ちてきている…

「うわああああー！」

俺は慌ててその場からダッシュで離れた！

それとほぼ同時に『ズドーン！』という激しい音がしたかと思つと、先程俺が居た場所に女性が落ちてきて床に叩きつけられた。落ちてきた女性はまったく動かない。

「おーい…生きてますか？」

俺はゆっくりと女性に近寄る。

女性はうつ伏せで倒れており顔は確認出来ないが、銀色の長い髪で魔法使いの様な青ローブを身に纏つているのだけは解つた。よく見れば体が小さい？体つきから見るとどうやら子供のような感じもする。

「ちょっと？死んじやった？」

とは言つても、傍から見ただけでは外傷は見えないし、出血しているとか腕が曲がっているとかそういう外見変化もみられない。しかし動かないのだけは確かだ。俺は女性の背中を恐る恐る触つてみた。

『ふにゅ』…とした柔らかい感触…そして横によるととても甘い香りがした。

女性とこう事は間違いない様子だ。しかし動かないな…
もう一度そつと触つてみる。やはり動かない…
よし、今度はすこし強めに。しかし動かない。まるで屍の様だ…
やつぱ死んだのか？

いきなり目の前に女が落ちてきて動かないとか…俺はどうすればいいんだよ…

俺は女性が落下してきた天井を見上げて見た。

何度見てもすごく高い天井だ。その一番高い天井部分に小さな窓らしきものが見えた。

さつきはあんな窓なかつたような…まさかあそこから落ちたのか？
もしそうだとすると助かるはずねーよな…

その時、俺の両胸が勢いよく掴まれた！

俺が慌てて正面を見ると田の前には先ほど倒れていたはずの女性とこつか子供が！？

「うわああああ！」

俺は思わず驚いてその場にへたりと座り込んだ。

その女の子は一ヤリと不気味な笑みを浮かべると俺の左頬に右手を伸ばす。

俺の左頬に一瞬ひやりとした感触が伝わる。
な、何なんだこつは！？

そしてその女の子はゆっくりと口を開いた。

第十四話【俺の妹のターン！？って何で妹が登場するんだ】（後書き）

後書き人物紹介！？

高坂幸桜【こうさかこうはる】

年齢十八歳

髪の色 黒（肩にかかるない程度・ストレート）

身長161センチ 体重52キロ B79 W62 H??

スリーサイズまでほぼ公開出来るこの小説では珍しいキャラ
某県立高校の三年生で受験を控えており現在日々勉強中。

小説にも書いてあるが、名前にコンプレックスを抱いている。

兄である行幸の事は行幸と呼び捨て。行幸も幸桜と呼び捨てにして
いる。

兄弟の関係は決して仲が悪いという事で無いが、行幸がパソコンに
没頭し始めてから幸桜の態度が変化した。

行幸は妹に嫌われたと思っている様子だが、幸桜にしてみれば行幸

は憧れの兄であつた（勉学も結構昔は出来た）。しかしパソコンと

いつ機械に兄を取られてしまいかなり怒つている。結局は兄である

行幸の予想を反して、兄が大好きな妹である。

何をするにも考えて行動をするが、その考えた結果が必ずしも正しいという事は無い。間違つてしまふとか考えすぎとか日常茶飯事である。

現在の目標は行幸を自宅に連れ戻す事とパソコンを辞めさせる事。

第十五話【俺の知らない非現実的な世界】

「そんなに驚くな。僕は化け物じゃないから」

女の子はそう言って冷たい笑みを浮かべ俺を見た。

女の子の身長は145センチくらいで、胸はぺたんこ。顔の幼さからして十一歳か十三歳くらいに見える。声はアニメでいう口リ系の高く可愛い声で『僕』という一人称がとても似合つてない。

見た目はとても日本人では無いが日本語を普通に話している…

それにもしても、先ほどの悲鳴の声と似ている。やっぱりさつきの悲鳴はこの子のものだつたのだろうか？

「どうか！ 何であそこから落ちてきたのに生きてるんだ！？」普通は死ぬだろ…

俺は再び天井を見上げた。

「あれ？ 何を上なんて見てるんだ？ あ、そっか、何で僕が生きてるのかって思つてるのか？」

女の子はそう言つと俺の頬から添えていた手を離した。そして腕を組んだ。

「あのや、正直に言つとすつごく痛かったんだよね。僕の意識が飛びくらいい。でもまあこの世界では死ぬという設定が無いから死ななかつたんだけどね。でも痛かつたんだぞ？」

女の子は腕を組んだまま無い胸を張つてそう言つた。

「それも訳の解らない事を…この世界とか、設定とか、死なないと何なんだ？」

「そういえば今こいつは『僕』とか言つてるよな…もしかしてこいつ

つは男なのか？

俺はそんな疑問を抱いてジロジロと女の子の全身を見る。しかし
どう見ても女にしか見えない…
もしかして、こいつも体だけ女とか？俺もこんな格好で中身は男
だしな。

俺がそんな事を考えていると女の子が俺の名前を呼んだ。

「高坂行幸」

突然名前を呼ばれて俺は焦った。

こいつ俺の名前を知ってる！？何でだ？教えてもいないの！？

「そんなに驚くなよ」

女の子は俺の周囲をぐるりと一廻りすると俺の方を横目で見た。

「ふーん…元は男の癖にかわいいじゃないかよ…それにムカつくほど大きい胸だし…お姉えもこんなかわいい女にしなきゃいいのに。バスでいいんだよバスで」

女の子はすぐ不満そうな顔だ。

今この女の子が言つた言葉は俺の頭に引っかかる。

『お姉えもこんなかわいい女にしなきゃいいのに』？って…
この女の子は俺を女にした奴と関係あるのか？そつなのか？

「お、おい…お前、もしかして俺を女にした奴を知ってるのか？」

俺は座り込んだまま女の子にそう聞いた。

「え？何の事かな？僕は何も言つてないよ？」

女の子は明後田の方向を見てそう言った。

「誤魔化すなよ。言つただろ？俺の質問にちやんと答へろよ」

俺が問い合わせると女の子の顔はかなり不機嫌な表情になる。

「何？何で僕がお前にそんな事を教えないといけない訳？」

「俺も好きでこんな姿をしてる訳じゃないんだ！お前は俺が元は男だつたって知ってるんだろう？という事は他にも何か知ってるんだろう？教えてくれよ。ここは何処なんだよ？お前は誰なんだよ？俺はどうやつたら男に戻れるんだよ」

田の前で女の子の頬がひくひくと痙攣しだした。そして顔がどんどんと真っ赤になつてゆく。

「煩いな！答えてやるよ！まず、ここは魔法で作られた世界！そしてこつ見えても僕は女！男に戻る方法は別に人に聞け！」

「何だこいつ…何でキレてるんだ？最悪な性格だな…

しかし、良く見ればこいつ怒った顔が妙に可愛い。結構アニメ顔だし、銀色の髪だし、目もパッチリと大きいし、見た目は本当にアニメキャラだ。これで胸があつて大人しかつたら完璧なのにな。

そう思いながら俺は無意識にじつと女の子の胸を見た。

「おい！お前！何で僕の胸を見るんだよ…無いからだろ…どうせお前と違つて僕の胸はべつたんこだよーでもお前みたいに饅頭を入れたような無駄にテカイ胸はきつとすぐに垂れるんだからなー」

何でまた逆切れするんだよ……」こつマジで性格悪いな。

「待て！何でお前が切れてるんだよ。俺はお前の胸がビリビリして言つてないだろ？」「

「煩いーもう僕は怒つたぞ

いや待て……だから何で怒るんだ…

「まあ待て、冷静になれ。可愛いのに女の子は怒っちゃダメなんだぞ」

俺がそう言つと女の子の顔は更に真っ赤になる。

「か、可愛い女の子とか馬鹿にしゃがつて！」

女の子はそのままこきなり右手を高々と上げた。

「風の精霊よー僕に力を貸してー！」

「おい、馬鹿にしてないだろ？ いつか精霊つて何だよ？」

気が付くと俺の周りの空気が序所に俺に向かつて動き始めている
じゃないか。

押し返せない程に重いその空気は俺の自由を奪った。

そしてその空気に持ち上げられる様に、俺の体はゆっくりと空中へ浮かんでいく。

「ちょ、ちょっと待つたー何だこれはー？ 待て待てー俺は何も悪い事はしないだろ！」「

大声でそう言つと女の子は俺に向かつて怒鳴つた。

「煩い！黙れ！」

「え…いや…マジで何で？」

「よし！僕を馬鹿にしたお仕置きだ！」

「ま、待つた！だからお仕置きつて何だよー。まつたく馬鹿にしてないだろ！」

女の子は右手を自分の頭の上でぐるりと時計回りに回しだす。

「いけえええ！すぐりゅうひひひひひじりござああああー！」

女の子は先ほどとは打つて変わり楽しそうに、まるで格闘ゲームの技を出すかのように言葉を発した。

するとその瞬間に俺の体はまるでドリルの如く勢いよく横回転しながら一気に上昇してゆく！

「ひゃあああー！」

キュウウウウウンー・ピタ！

天井ぎりぎりの所で俺の体はぴたりと止まった。

自分の額を冷や汗が流れるのがわかる。危なかつた…こんなの直撃したら死ぬ…

つていうか、何だ？何なんだよーこれって普通じゃないだろー！あいつオカシイだろー？

つて言つてる場合じゃないな…とりあえずここから降りなければ…

「お、おーい…あの…降ろしてもいいませんか?」

俺は大きな声でそう言った。

すると下から先程の女の子とは違う女性の声が聞こえる。
しかし俺は体が完全に硬直していて様子を伺う事が出来ない。

「ひらー・シャルテ!何をやつてるのよ!」

「の声は…最初に返事をしてくれたあの女性の声?」

「うわー・リリア姉え!」

あの女の子はシャルテっていう名前なのか。さつきの大人びた声の女性がリリアか…しかし、どうかで聞いたような名前だな…って
いつか俺の声は届いてないのかよ…

「ちよーとシャルテ!何でみゆき君があんな所に居るの?」

「どうやら俺の話題のようだ…とこの事は床に降りれるのか?」

「だつてー・あいつ僕がペチャパイとかチビとかブスとか言つたんだ
よ?」

な、何を言つてるんだあいつはー可愛いくて言つたんだぞ?チビ
もブスも言つてねー!

「ひらー・おー・シヤルテつていうのー!俺はまつたくもつてー言もせん
な事は言つてないだろー!」

俺は硬直したまま大声で怒鳴った。

「お前、わざと僕に可愛いつて言つたろー。」

「それは褒め言葉だろー。」

「嘘つけー可愛いつとか思つてもないのに可愛いつとか言つなー。」

すつげー素直じゃないっていつか…もう向つて言えぱいのか、
言葉にならなー…

「シャルテ、とにかく降ろしてあげなさいー。」

リリアという女性が慌てた調子でわざと言つ。

「はーはー、解つたよ…降りせばいいんだろ…せいのーほーー。」

その瞬間！俺の呪縛が解けた！

やつた！硬直が解けたぞ！ってえ？何だ？体が…

その後…

俺の体で二コートンの法則が忠実に実行された。

万有引力というのはこいつ事なんだ…勉強になるね！
つてそうじゃないだろ！

空中で制御も効かずに勢い良く落ちてゆく俺…そして見る見ると
近寄る真っ赤な絨毯！

このままじゃ俺の血で真っ赤な絨毯を更に真っ赤に染める事にな
るじゃないかあー！

「うわああー助けてええ！」

俺はじたばたと体を動かしながら叫んだ！

お、落ち着け…

考えてみろ、どんなゲームでもそうじゃないか、主人公がピンチに陥った時はギリギリで誰かが助けてくれるんだ。

そして主人公は最終的には助かる！だから誰かがきっと助けてくれ…

その瞬間！俺は凄まじい衝撃に襲われて氣を失つた。

「うーん…」

俺は意識を取り戻した。少し硬い床に横になっているのが背中から伝わる感触でわかつた。

俺はゆっくりと目を開いた。そして倒れたまま周囲を見渡す。すると俺の視界には天井まで二十メートルはあるつか大きな空間が広がっている…

石造りの建物…赤い絨毯じゅうたんの敷き詰められた床。

ここは何処だ？俺は確かに空中から落下して床に叩きつけられたような気が…

どう見ても見覚えのある空間だし…

さつきと同じ場所じゃないかよ！？俺は慌てて立ち上がった。

「おい！誰か居ないのかよ！」

俺は大声で叫んだ。

「はいー居ますーちよつと待つてー！」

何処からともなく女性の声が聞こえる。
つていうかわ…これってさつきと同じパターンじゃないのか…
あれ？さつき俺は確かに空中から落下して床に叩きつけられて…
さつきのは夢か何かだったのか？それともデジヤブ！？
そういうば服装は？やっぱさつきの夢と同じメイド服のままな
のか？

俺は慌てて自分の格好を確認した。

確認すると…メイド服のままだつた…しかし！何故かメイド服に
真っ赤な血が大量についている！

「な、何じやじつやあああー！」

俺は思わず叫んでしまった。

これって血だよな？、何で俺が血まみれのメイド服を着てるんだ
！？

よく見れば足元の真っ赤な絨毯が更に血で真っ赤になつてゐるじ
ゃないかよ。

という事はさつきのは夢じゃなかつたのか！？

その時、俺の目の前にはさつきの女の子とは違う女性が…

女性は銀髪の腰まであるロングヘアで瞳は透き通るような青色。
身長は170センチくらいだろうか？スタイルも抜群でまるでゲ
ームのヒロインか女神かと思う程に綺麗な女性だ。
誰だろ？もしかして…この女性がさつきの声の主なのか？

「あ、あの…貴方は何方でしょ？」

俺がそう聞くと女性はすぐに返事をしてくれた。

「私の名前はリリアです」

聞き覚えのある名前…確かに空中にいた時に…

「リリアさん、俺はどうしてここにいるんですか？そして何で血まみれなんですか！？」

リリアは困惑の表情を浮かべた。

「すみません…ちょっとした手違いでみゆきさんは先ほど普通だと死ぬ程のダメージを体に受けてしまいました…」

「え？普通だと死ぬ程のダメージって何だよ」

「はい…たぶん記憶にあるかと思うのですが、先ほどみゆきさんは空中から落下して床に激突してしまって…それでみゆきさんは見るもグロテスクにグチャグチャになってしまい…思念まで消えてしまった…」

女性はそう言つと苦笑を浮かべている。

「え…？ちょっと待て！グチャグチャって何だよ…思念まで消えてしまって何だ？」

俺がそう質問すると女性は申し訳無さそうな表情で俺から視線を外した。

「あ、おいー何だその態度は…何があるんだよ？俺はもしかして死んだのか？今の俺はゾンビなのか？それとも幽霊なのか…？」

俺は女性に向かつて叫んだ。

すると女性は視線をはずしたまま俺に向かつて話す。

「い、いえ…大丈夫ですよ。私の魔法で思念の再構成をして無事に元の思念の状態には戻りました。ですが…」

「思念とか再構築とか元の状態とか訳わからぬ一けどまだ何があるのかよ」

「ええと…バストサイズを間違つて三センチ小さく構築しちゃつて…」

「へ？」

俺は自分の胸をメイド服の上からじつと見た。
正直どこが変化しているのかまったく解らない。

「(めんなさいね…)

「え…いや…胸とかそんなのどうでもいいんだけど…」

「大丈夫です！現実世界の貴方の体のバストサイズは変わってません！」

現実の世界？何だそれ…ここは現実世界じゃない？っていう事は何なんだ？

これは説明をちゃんととして貰わないとな…

「あの…リリアさん。まずは何処なのか。貴方は何者なのか。

さつきの俺を酷い目に遭わせた女の子は誰なのか。俺が男に戻るにはどうすればいいのか。そこらを教えて貰えませんか？」

女性は俺の質問を受けるとキヨロキヨロと周囲を確認する。そして話を始めた。

「えっと……質問に答えますね……まことに……私の作った魔法世界です。今の貴方は思念体で、本当の肉体は現実世界に、貴方の部屋にいます」

「何だそれ？ 魔法世界？ 思念体？」

「うーん……どう言つたらいいのかな……私が作り上げた現実には存在していない夢の世界？ のようなものです。思念を具体化する事によって現実世界と同じような感覚で存在、行動が出来る世界です」

「ようするにこれは夢なのか？」

「近いですが、夢では無いです。この世界から出たとしても私も貴方も同じ記憶が残ります」

「じゃあにじにはリリアさんの作った世界って事なのか？ 仮想の世界？ ゲームの世界みたいなもんか？」

「そうですね、ネットゲームは仮想空間で皆と遊び、その空間での出来事を他のプレイヤーと共有しますよね。ここはそれがもつとリアルになつたという感じですね。肉体は貴方の部屋にありますが、思念はこちらへ完全に移っていますので」

「なるほどな……って言われても信じがたいけどな」

「そうですね、なかなか通常では経験出来ないです」

リリアという女性は少し落ち着いたのか、緊張した感じがいつの間にかなくなっている。

「で？リリアさんは何者なんだ？正直さつきの話もまだ信じれないが、俺は自分の体が女になつたという有り得ない事が現実に起つてゐる。だから何を言つても驚かない」

リリアはおどおどとして少し考へると、突然真面目な表情で俺の目を見て話を始めた。

「「」迷惑をかけたのでお話します……私は……」

「お姉え！ちょっと待つた！」

いきなり甲高い声が建物内に響く。

気が付くとリリアの目の前に先程の女の子が立つてゐる…？

「シャ、シャルテ！？」

リリアは驚いた表情でシャルテを見ている。

そしてシャルテはむつとした表情でリリアを睨んだ。

並んでみればシャルテとか言つ女の子はリリアにすごく似ている。二人が姉妹というのは本当みたいだな。

「お姉え！何で正直に話そつとする訳？今回の目的はそんな事じゃ無いだろ？」

「え？ ですが… もつあまり隠すのも悪いかと…」

「何を言つてんだ？ 今話たら折角の作戦が台無しだろー。」

「人が言い合いになつてゐる… それも妹の方が強い… つて何の会話をしているんだこの二人は？ 作戦とか台無しとか。俺に関わる事には違ひないだろ？ が。

「おい！ みゆきー。」

シャルテは突然俺の方を向くといきなり俺を呼び捨てにした。

「な？ 何だよ」

「僕の名前はシャルテだ！ こつちのは僕の姉でリリアー！ こはリリアお姉えの作った世界。あんたはさつきグチャグチャになった！ 以上！」

女の子はそう言つと『ふん！』と鼻息を噴出し腕を組んだ。

本当に可愛い容姿なのにこの最悪な行動態度と話方は一体何なんだ…

お姉ちゃんに似て無さ過ぎるだろ！ 見た目以外のすべてが！
補足！ 年齢差を考えてもバストサイズはまったく似てない！ リリアは結構ありそうだがシャルテは成長しそうに見えない。
つて何を馬鹿っぽい事を考へてるんだ… そつだよ…

「おい！ 男に戻る方法を言つてないぞー。」

「煩い！ 今から説明するんだよー！ ちゃんと聞け！」

な、何だこのガキは…さつき以上！って言つただろ？が！
あームカツク！」『『『奴はいくら可愛くても大嫌いだ！』

「は、早く話せよ…」

「ふん…じゃあ話してやるーリリアがな！」

「ぶ」

お前が話すんじゃねーのかよ！

「お姉え、解つてゐ？余計な事を言つちやだめだからな」

シャルテはリリアに「…」と下がった。

「えつと…それでは私から…みゆきさんが男に戻る為にやらなければいけない事を」説明致し…」

ジジジジジジ！

リリアが話をしている途中でいきなり空中から何か電気の感電するような音が聞こだした。

その瞬間！ドガーン！ガラガラ！

激しい爆発音が聞こえたかと思つと辺りは霧か煙か解らないが、突然真っ白になつた。

「えー？な、何だ！？」

「ちょ、ちょとー！リリア姉え！誰か魔力転送してきたぞ！もしかしてみゆきの体に掛かってる転送魔法つてそのまんまなのか！？」

「あー忘れてました！」

「ば、馬鹿！それじゃダメじゃん！」

真つ白な霧の中で一人の言い合いが聞こえる。
しかし・・・何が起こったんだ？転送魔法？

俺はゆっくりと霧の中を歩いてみる。

すると真つ赤な絨毯じゆうたんの上に誰かが倒れていた。

薄つすらと見えるメイド服…女の子か？誰だろう…
さつきの一人の話からすると俺の部屋から来た人間って事になる
のか？

それにしても何故メイド服なんだよ…あの一人の趣味か？

俺はその誰かを確認しようとゆっくり屈み始めた。

すると！その瞬間！周囲の白い霧のようなものが一気に晴れる！

そして…俺の目の前の絨毯の上にはメイド服姿の良く知っている
人物が気を失っていた…

「…、幸桜さちざくらー？」

第十五話【俺の知らない非現実的な世界】（後書き）

後書き人物紹介！？

シャルテ 女の子 一人称は『僕』で口調も男っぽい

年齢不詳 見た目は十二か十三歳

髪の色 銀色で腰まであるストレートヘア（現実世界ではツインテール）

身長 145センチ 体重 35キロ 胸なし？

見た目はおもいつきり異国人っぽいが、行幸に對して日本語を普通に話してきた。

二十メートルの高さから落下しても大丈夫な程に頑丈な思念体を構成出来る能力者。（行幸はぐちゃぐちゃになつた…）

魔法も使えるので人間じゃないと確定。

見た目の可愛さとは裏腹に男っぽさ全開で生意氣な小娘。

男に褒められる免疫が無い為にちょっとした行幸言動に顔が真っ赤。（女の格好でも行幸は男で認識している）

リリアとシャルテは姉妹で今後？行幸と重要な部分で関わりあうと思います。この子は見た目や年齢以上に考えはしつかりしており、リリアが素直な分シャルテが助言をしてリリアを制御？しています。やはり欠点は我慢。

第十六話【俺の妹の困惑】

今、俺の目の前にはメイド服姿の幸桜が氣を失つて倒れている。

「何でここに幸桜が居るんだよ！」

俺は両手をぎゅっと握り締め、怒鳴りながらリリアとシャルテのいる方へ振り返った。

無意識に両手はブルブルと震えている。

リリアを見ると幸桜が現れて驚いたのか意気消沈した表情になつていて。

シャルテは動搖する事なくリリアを心配そうに見ている。

ここにちらにとつて幸桜がこの世界に現れた事は想定外だったのだ。

しかし、今俺の目の前に現れたのは現実だ。

「おい、答えるよ…どうしてここに幸桜が居るんだ！」

再び怒鳴つたがリリアはとてもじゃないが答えられそうな状態ではない。

それを察してか、シャルテがムツした表情で話を始めた。

「リリアお姉さんは別にお前の妹を呼びたくって呼んだんじゃないんだよ！これは一種の事故なんだ。そんなに責めるような口調でお姉えを怒鳴るな！」

強い口調にもかかわらずシャルテの言葉に刺々しさは感じられない。

「どうやらライシもトンでもない事になつたと思つてゐるのだろうか。

「事故？事故で済む問題なのか？いいのかよ？この世界に俺以外の人間を連れ込んで。そしてお前らの存在がばれても」

シャルテは言葉に詰まる。

「……この世界を消失させます……」

リリアの力の無い震えるような声が聞こえた。

その言葉を聞いたシャルテは慌てた表情でリリアの方を振り返る。

「な、何を言つてるんだよ！この世界を消失させるつて！…じゃあ、今までの苦労はどうなるんだよ？これでこいつに用件を伝えれば全て終わるんだぞ？」

「シャルテ……それは私が人間界に行つて改めてみゆきさんにお話をすればいいだけだから……」

「お姉え！何を言つてるんだよ！約束したじゃないか、人間界に降りるのはあの一度きりだつて！あの時だつて僕は反対したんだぞ！僕たちが人間に姿を見せちゃ駄目なんだぞ！今回のこれだつてそうだよ！解つてるの？ねえ！お姉え！僕たちは……」

シャルテはそこで急に言葉を止め、俺の方をチラリと見た。

「……もうこいよ、この話はここでは止めとく」

シャルテはそのままうつと話の途中で会話を完全に止めた。
人間界に降りる？何だそれは？こいつらの正体って何なんだ？

「おこーお前らは何者なんだよー人間界に降りる？姿を見せる事が
駄目？どうこう事なんだよーどうして俺が女にされたのか含めてち
ゃんと説明しろよー」

「すみませんみゆきさん……その問い合わせ今はお答え出来ません…
…」の続きをまた後日」

リリアはやうやくと俺には理解出来ない呪文のような言葉を唱え
始める。

すると急に石造りの建物も赤い絨毯が見えなくなり、田の前は真
っ暗になつた。

いや、リリアやシャルテ、そして幸桜の姿が見えているという事
は暗くなつたのでは無く、全ての物が消えたという事なのか？

「おいー待てよー」れははどうこう事なんだよー結局この場所に俺を
呼んだのはどうこう意味があつたんだよー俺や幸桜はどうなるんだ
よー」

しかしリリアとシャルテは無言のまま俺の目の前から姿を消した。
その瞬間、周囲が明るくなり俺の意識は飛んだ。

「じーか…行幸みゆきのアパートは…」

店長はもう一歩と腕組みをして田の前に立つアパートを見上げる。
ところ立派なアパートじゃないか。

といつか……本氣でボロアパートだった……

「よし、店長、行幸の部屋に突入するよ」

「おひ……」

私と店長は行幸の部屋へ向かつ為にアパートの金属製の階段を上る。

緊張する……初めての行幸の部屋……どんな部屋なんだろう……あれ? そう言えば……私はふとある事を思いついた。

「ねえ、店長」

「何だ?」

「行幸の部屋なんだけど……」

「ん? 部屋がどうした? 部屋番号ならぱしちだぞ?」

「もしも鍵がかかってたらどうあるの?」

「え? か、鍵?」

「そひ、鍵」

店長は顔を引きつらせて無言になつた。

どうやら鍵がかかっていたらという事はまったく考えていなかつた様子ね。

私も慌てて来たからそこはまったく考えてなかつた……

ここはどうみても管理人も居ないような小さいアパートだし、鍵

をぶち破って入るのつてきひとこの住人に通報されるレベルだし、
どうしよう……

「だ、大丈夫だ……多分かかってない！」

店長は何を根拠にしてか、いきなりそう言った。

「何でそういう想うの？」

店長はニヤリと笑みを浮かべると血氣ありげに言った。

「それは……男の感だ！」

私は思わず頭を抱える。

駄目だ……店長の感とか、かなり信用出来ない……

「店長の感なんてあてになるはずないでしょ……普通だったら鍵を閉めるよ……あーあ……どうしようかな……ここまで来たのに鍵が閉まつてたら……」

「すみれ、そう深く考えるなーなせば成るー！」

「いや、考えるべきでしょ……」

と、無駄な話をしている間に部屋の田の前に到着。
横の小窓からは光が漏れている。どうやら中に行幸みゆきかは解らないけど、誰かは居る様子ね……

「一応……廻してみるね」

私はゆっくりとドアノブに手を伸ばした。そしてゆっくりと廻してみる……

すると……行幸^{みゆき}の部屋の鍵は私達の予想を良い意味で裏切つてくれた。

『力チャヤリ』と音をたててドアノブは廻つたのだ。

私はドアノブをゆっくりと元に戻すと一度手を離した。

「店長、空いてた……」

「お、そうか！ それじゃあ突入だ」

店長は嬉しそうな顔をして躊躇も無くドアノブに手を伸ばす。

「ま、待つてよー！ いきなり入る気！ ？せめてノックくらいした方がよくない？」

「ノック？ わざわざ？ 行幸^{みゆき}の部屋なんだぞ？ それにこれは緊急事態だろ？ もしかすると中に行幸^{みゆき}以外に女が、それも行幸^{みゆき}に携帯に勝手に出るような女がいるかもしれないんだぞ？ ノックしてたら逃げられるかもしれないじゃないか」

「そうだった……この部屋は行幸^{みゆき}以外の女がいるかもしないんだ……って行幸^{みゆき}って男じゃないのよー女じゃないよー！」

「まつてよ店長、行幸^{みゆき}は男だから……」

「あ、ああそつか……でもほら、今は女だし……いいだろ？ 早く入るぞ」

店長はそう言つてドアノブを廻し、そしてドアを開けた。

その瞬間、いきなり漂つカップ麺の匂い……

「な、何だ? このカップ麺の匂いは…凄まじいだ…」

そう言つと店長は左手で鼻をつまんだ。

私はとりあえずは行幸みゆきを呼んでみる。

「行幸みゆき? ここののみゆき? 行幸みゆき? 」

しかしまつたく返事は返つて来ない。

「おい董すみれ、奥の部屋からゲームの音が聞こえたんだ……きっと奥にいるんじやないか?」

店長はそう言つと靴を脱いでダイニングキッチンを奥へと進んで行つた。

耳を澄ませば確かに行幸みゆきのやり込んでいるMIMOの街の音楽が聞こえている。

という事は行幸みゆきは中に居るって事なの?

私も靴を脱いでダイニングに上がる。するとそれと同時に奥から店長の声が聞こえた。

「董すみれ! はやく來い!」

私は慌てて奥の部屋へと入つて行つた。

そこには……カツブラーーメンが散乱していた。

じゃなくつて……行幸みゆきが横たわり、そしてその上には彼女のよう

に私の知らない女性が倒れている。

一人とも息はしている様だから死んではなさそうだけど……でもこの女性は一体?

「董、^{すみれ} 行幸^{みゆき}の上で倒れている」の女って何だと黙つへ
「.」

「そんな事、私に聞いても知りてゐねやしないでしょー」

本当にこの女性は誰なんだろつ……

行幸^{みゆき}の部屋に入つてゐるといつ事は、どう考へても行幸^{みゆき}の知り合
い?

やつぱり彼女! ? そんな話は一度も行幸^{みゆき}から聞いてないし……
じゃあ何? この女性がもしも彼女だとしたら? この女性が私の恋
のライバルになる訳! ?

よく見ればまだこの子は高校生位じゃん! 何なのよ? 行幸^{みゆき}って女
子高生に手を出したの! ? 好みは年下?

しかも何? 行幸^{みゆき}は女になつたのにこの子は平氣つて事?

そんなに信用信頼出来る関係なの! ?

「董^{すみれ}? デリしたんだ? セリから俺の話を聞いてるか?」

「え? あ……な、何よ?」

「何よつて……だからとつあえず行幸^{みゆき}を起そつて言つてるんだよ
店長と私は被さつてゐる女性をゆつくりと行幸^{みゆき}の上から移動させ、
行幸^{みゆき}を揺さぶり起しにかかつた。

「あ、ああーそうね、起そつか」

「おい、行幸^{みゆき}、おいー起きるー行幸^{みゆき}」

店長が軽く揺すつてみると、「アーン」と呟つ声を出して行幸^{みゆき}が目

を開く。

「おお、行幸！起きたか！」

私達を見てびっくりしたのか、行幸はきよとんとした表情で、何があつたんだ？と言わんがばかりの表情で私達一人を見ている。

ここは何処だろう……

何も見えない……

俺はどうしたんだろう？

あれ？何だろう……誰かが俺を呼んでる？

「おい、行幸……」

待つてくれよ、俺はここに居るから……
俺はゆっくりと目を開いた。

「おお、行幸！起きたか！」

目を開くと視界には店長と董の顔が飛び込んできた。
つていうか……何でこの二人がここに！？
あれ？確かに……俺はこの部屋で気を失つて……それでどうしたんだっけ？

「行幸?大丈夫なの？ねえ?わかる?私、董だよ」

董は心配そうに俺を見ている。

思い出せない……俺は何で寝てたんだっけ……

「おー、行幸、どうなってるんだよ？俺が携帯に電話したらお前じやなくつて女が出るし……多分その女の子だと思つが……あとあれだ！董が電話すると今度は誰も電話に出ないんだ。だから俺と董はお前が心配で様子を見に来た。そうしたら何だ？ ここ女の子と行幸は一緒になつて寝てるし」

え？ 何？ 電話した？ そーか、俺が気を失つている間に店長と董は俺に電話をしてきてたのか？

でもつて何だ？ そここの女の子つて？

俺はふと横の見た。するとそこには妹の幸桜が横になつているじゃないか！

その瞬間、俺は先ほどまで起つていた出来事を一気に思い出した。

「そうだ！ リリアは！ ？ シャルテは！ ？」

「え？ な、何？ どうしたのよ行幸？ リリアとシャルテって誰？ 何なの？」

董は驚いた表情で俺を見ている。

その時、俺の横で気を失つていた幸桜が目を覚ました。

「うーん……」

「い、幸桜？」

俺は咄嗟に幸桜の名前を口にした。

幸桜は名前を呼ばれたからか俺の方を見る。

「え？ な、何！ 何があったの？ つていう何で人が増えてるの？ え？ どうなってるの？ 確か私は体がしびれて……あれ？ あれれ？」

幸桜は混乱状態に陥っている。

「おい行幸？ この子は何だ？ お前の何なんだ？」

店長が幸桜を見ながら聞いてきている。

「え、あつと……」 いつは俺の妹で幸桜つて言つんだ
店長と董は信じられないという表情で幸桜を見ている。

「え？ い、妹！ え？ この子は本当に本物の行幸の妹なのか？」
店長と董は信じられないという表情で幸桜を見ている。
と言つた本物つてどういう事だ？ よく意味がわからんねーし。
その幸桜本人は目を点にしてじつと俺を見ている。

「何なの？ 何を言つてるの！ 私は貴方の妹なんかじゃなし！」

「そうだ、幸桜は混乱真っ最中というか女になつた俺を兄貴だとまだ理解出来てないんだ。」

「そりやそりやよな、説明もしてないし、理解出来ないのは当たり前だ……ちゃんと説明しないと。」

「俺がそう思い説明しようとした時、幸桜がいきなり顔を真っ赤にして話を始めた。」

「も、もしかして……貴方……行幸と既に籍を入れているとか……実は……け、結婚していく……それで私を妹とか言つてるとか……」

おい待て……どうしてそういう解釈になるー！

「馬鹿か！何で俺がお前に報告も無しで結婚するんだよー……とか待て！俺に先に説明させてくれ！」

「え？ 説明つて何！？ 何の説明なの！ もしかして行幸との関係の話！？ 結婚相手じゃないとすると…… 友達？ 彼女？ それとも…… もしかして…… か、体だけの関係とか…… 俗に言つてセ・・・セフ的なの！？」

幸桜は茹で上がった蛸のよう^{ひはる}に顔を真っ赤しながらとんでも無い事を言つてゐる！

よく見れば店長や董^{すみれ}まで顔が真っ赤になつてゐる。
つていうか俺もすっげー顔が熱い！

やばい！ やばいぞ！ ここは俺が行幸だと早く説明しないとー！

「聞け！ 幸桜！ 俺だ！ 今は女の姿だけどお前の兄貴の行幸なんだよー！ 正真正銘のお前の兄貴なんだよー！」

「へ？ 嘘…… 貴方が行幸？」

「そつだ！ 俺は行幸だ！」

「あの……」

「何だよ……」

「大変申し訳ないのですが、そのようなリアリティの無い嘘はやめて頂けますでしょうか？私なら大丈夫です！例え貴方がセフレであつても……私は……私は受け入れます……ぐす」

幸桜は目に涙を浮かばせた。

「こら待て！俺はマジで行幸なんだって！セフレなんかじゃない！だいたい俺にこんなに可愛いセフレがいるはずないだろ！いたら本気で俺は喜んでる！幸桜ならわかるだろうが！俺はゲームオタクなんだよ！モテナイ男なんだよ！彼女なんて出来ないような男なんだ！」

モテナイとか彼女なんて出来ないと自分で言つとなんかすっげー悲しくなるな……

というか何だ、この痛い視線は……

ふと見上げるとそこには蔑んだ目で俺を見る董が……

「行幸の馬鹿……」

何だ！？なんで董^{すみれ}に俺が馬鹿つて言われなきやいけないんだ！？

「馬鹿つて何だよ？何で董^{すみれ}に馬鹿つて言われないといけないんだ！？」

「鈍感馬鹿！？え？よく意味がわからんねえ……

鈍感馬鹿！？え？よく意味がわからんねえ……

「うぐ……まあいい……良くないけど、いい……というか、董^{すみれ}と店

「俺がそつと店長は俺の顔をじっと見た。

「俺も幸桜に俺が行幸だつて言つてくれ

「な、何だよ店長？」

「もつ一度確認しておきたい事がある」

「確認？つて何だ？」

「本当にこの子はお前の妹なのか？」

「何だ？疑つてるのか？こいつは正真正銘の俺の妹の幸桜だ！」

「よし、わかつた…」

店長はゆづくつと幸桜の前にしゃがみ込むと、少し店長に怯えている幸桜に向かつて笑顔で話しを始めた。

「幸桜ちゃんだけ？大丈夫だ、俺は行幸の働いているバイト先に店長だ。ほら、この声を覚えてないか？さつき俺と携帯で話をしたじゃないか」

店長の話を聞いた幸桜はハッとした表情になつた。

「あーそういえば……この声…あの電話の人…？」

「ははは。覚えててくれてありがとう。でね、行幸の事なんだけども、ここにいる女性……本当に行幸なんだよ。嘘じやない、本当に

……」

「え？ 嘘？ 「冗談ですかよね？ 店長さんも行幸と一緒になつて私をからかってるんでしょ？ あれ？ 本当の行幸は何処なんですか？」

幸桜は辺りをキョロキョロと覗渡し始めた。

「幸桜ちゃん……冗談ならいいんだけど……」 しゃって冗談じゃないんだよ…… 行幸は訳あつて女の子になつちやつたんだよ…… 現実なんだ」

幸桜はゆつくつと俺の方を見る。そして一人の視線が合つた。
俺は幸桜の目を見ながら小さく頷いた。

「え…… 嘘…… じゃあこの女性が本当に行幸なの？」

真剣に話す店長の言葉と俺の真剣な顔もあつて流石の幸桜も少しは理解をした様子だ。しかしその表情はまだ完全には信じきれていないといつ感じもする。

いや、信じたく無いのかもしれない。

「幸桜ちゃん…… 私だつて信じたくなかったんだよ…… 行幸がこんな姿になつちやうなんて……」

董が震えるような声で言った。

すると幸桜が俺に向かつて話しかけてきた。

「本当に行幸お兄ちやんなの？」

「ああ……」

「やだー…信じたくないー！」

「でもこれは現実なんだ」

「何で？何で行幸みゆきがそんな姿になつたの？もしかしてやつぱり嘘とか？そうよね！ありえないもん！皆で私をからかってるんでしょ！…本当の行幸みゆきなら私の誕生日とか家の住所とかあれとかこれとか全部言えるはずだよ？言えないと…」「…」

「全部……言える……」

俺はムキになつて質問していく幸桜の問いに全て完璧に答えた。いはく

「じゃ……じゃあこれは解る？私が小学校の時に大好きだったぬいぐるみの名前…」「…」

「俺がUFOのキャラで取つてきた茶色い熊のぬいぐるみだよな。確かおばあちゃんの家に行く途中で電車の中に忘れて、お前、ずっと泣いてたよな……名前は無かったと思つけど？」

幸桜はガクリと頭を垂れた。

「信じれない……何で……何で女の子になっちゃったの…」

「何でつて…俺にもよく解らないんだ……だけど…」

俺は幸桜に昨日の夜に起つた出来事をすべて話した。

第十六話【俺の妹の困惑】（後書き）

後書き人物紹介！？

リリア 年齢不詳 見た目は二十代前半

髪の色 銀色で腰まであるストレートヘア（現実世界でも同じ）瞳は透き通るような青色

身長 165センチ 行幸の予想では170センチの身長だが、実はヒールで高く見えただけである。

体重 ??キロ 容姿端麗であるで女神？

シャルテの姉で清楚なイメージの女性で行幸を自分の作った世界？に誘う。

魔法で仮想世界を構築できる程の魔力の持ち主。行幸の妹である幸^{さち}桜^{さくら}が自分の世界へ転送されてしまい、責任感ですぐに世界を消してしまう。おかげで行幸^{みゆき}は男に戻る方法を聞けないで終わる。この先の物語における重要な人物である。

第十六話番外編 【俺の妹の困惑 幸桜くじはる】編（前書き）

幸桜視点でのおまけ小説です。

困惑する幸桜がどういうふうに行幸みゆきが女になつたという事実を受け取るのかを書いています。

ちなみに読まなくつてもこの先の展開にはまったく支障はありません。あくまでもおまけです。

第十六話番外編 【俺の妹の困惑 幸桜くじはる】編

「うーん……」

私はゆっくりと目を開いた。
ここは何処だっけ……
あ、そうか……行幸の部屋か……
確か私は倒れていた女人を触つて感電して氣を失っちゃったのかな……

「！」、幸桜？』

私を呼ぶ女人の声が聞こえる。
誰？私は声のする方をゆっくりと見た。
そこにはさつきまで気絶していた女性が起きて私を見ている。
そして何時の間にか周囲には見ず知らずの人が一人も増えている。
おかしい、この部屋は行幸の部屋なのに何でこんなに知らない人がいっぱいいるの！？

「え？な、何！？何があつたの？つていう何で人が増えるの？え？どうなってるの？確かに私は体がしびれて……あれ？あれれ？」

無言だと何をされるか不安もあり、思つた事を口に出してみた。
「おいまゆき？」の子は何だ？お前の何なんだ？」

体格の良い男性が私を見ながら言つた。それも私の横の女性に向かつてみゆきとか言つてゐる。

みゆきって何?」この女性は行幸と同じ名前つて事なの!?

「え、あつと……！」こつは俺の妹で幸桜つて言つんだ

「え? い、妹! ?え? この子は本当に本物の行幸の妹なのか?」

何? 何を話してゐる? 私がこの女性の妹? 何それ! ?
理解出来ない会話が飛び交う。

そして体格の良い男の人とその横いる女の人私が私の方を見た。
って何? このみゆきとかいう女性の言つ事を信じて私をこの女性
の妹だと思つてるの! ?

違う! 違うし! 否定しなきや!

「何なの? 何を言つてるの! ? 私は貴方の妹なんかじゃなし! 」

私は懸命に否定した!

といふか……この人……ここまではつきりと私を妹だと言い切つ
てた……

「これは行幸の部屋……

行幸の部屋でこんなラフな格好で平氣でいられる……

そして私を妹だと言つ……もしかして……この女性は行幸の彼女
! ? いいえ、婚約者かも! 待つて! もしかしてもう既に籍まで入れ
てるとか! ?

だから私を妹とか言つてるの! ? か、確認しなきや!

「も、もしかして……貴方、行幸と既に籍を入れてゐるとか……実は
……け、結婚していく……それで私を妹とか言つてるとか……」

みゆきという女性は驚いた表情で私を見た。
そして上ずつた声で話を始めた。

「馬鹿か！何で俺がお前に報告も無しで結婚するんだよ！」
待て！俺に先に説明させてくれ！」

何か言つてる！俺とか言つてる！何これ？何？おまけに馬鹿とか
言われた！

え？私って馬鹿？それに何？説明させてくれとか言つてるけど何
の説明？わかんないよ！

もしかして……行幸との関係の話？結婚相手は間違つてたつて事
？じゃあ何？何なの？も……もしかして……か、確認しよう！

「え？説明つて何！？何の説明なの！もしかして行幸との関係の話
！？結婚相手じゃないとすると……友達？彼女？それとも……もし
かして……か、体だけの関係とか……俗に言つセ・・・セフレなの
！？」

恥ずかしい！聞いちゃつたよ！あーもう！顔が熱いよー…きつと
顔が真っ赤なんだ！

でもこれは必要な質問なんだ！恥ずかしがつちゃ駄目だよ幸桜！
つて……あれ？私だけ顔が真っ赤になつたのかと思つたらみんな
顔が真っ赤だ……

「聞け！幸桜！俺だ！今は女の姿だけどお前の兄貴の行幸なんだよ
！正真正銘のお前の兄貴なんだよ！」

へ？この人……自分を行幸だつて言つてる…？冗談？

「へ？嘘……貴方が行幸？」

「そうだ！俺は行幸だ！」

何これ？ドッキリカメラか何か？ありえないよ。だって行幸^{みゆき}は女の子じゃないし、女が男になるとかありえないし。

そ、そうか……セ…セフレだって事実を突きつけられたから誤魔化そうとしてるの？

だからこんなリアリティの無い嘘をついてるんだ！

「あの……」

「何だよ……」

「大変申し訳ないのですが、そのようなリアリティの無い嘘はやめて頂けますでしょ？ 私なら大丈夫です！ 例え貴方がセフレであつても……私は……私は受け入れます……ぐす」

何か悲しくなってきちゃったよ……行幸^{みゆき}が私の知らない間に大人になつてたなんて……

色々な事を考へているうちに段々と田頭^{たとう}が熱くなってきた。

やだ……涙が出ちゃつてるよ……もつ……

駄目じやん、これも現実なんだからちゃんと受け取らなきゃ……

今の時代はセフレなんて当たり前にいるのよーきっと……

「こら待て！ 僕はマジで行幸^{みゆき}なんだって！ セフレなんかじゃない！ だいたい僕にこんなに可愛いセフレがいるはずないだろ！ いたら本気で僕は喜んでる！ 幸桜^{さちざくら}ならわかるだろうが！ 僕はゲームオタクなんだよ！ モテナイ男なんだよ！ 彼女なんて出来ないような男なんだ！」

な、何？まだ自分の事を行幸^{みゆき}だって言つてるし！？ま、まさか本当に行幸^{みゆき}とか！？

「行幸の馬鹿……」

え？立つている女人までこの女性を行幸だつて言つてる……

「馬鹿つて何だよ？何で董に馬鹿つて言われないといけないんだ！」

「鈍感馬鹿だからに決まつてゐじやん！」

おまけに言い合ひしてゐ。

「うぐ……まあいい……良くないけど、いい……といつか、董と店長も幸桜に俺が行幸だつて言つてくれ」

何でそこまでムキになつて私を納得させよつとするの？行幸が女子になるなんてありえない話なのに……

早く戻つてきてよ行幸……幸桜はもつ混乱してよくわからなくなつちやつてるよ……

気がつくと田の前には体格の良い男の人がしゃがんでいた。
何？私に何をする気？」「怖いよ、体が震えるよ……
私が怯えていると、その男性は笑顔で私に話しかけてきた。

「幸桜ちゃんだけ？大丈夫だ、俺は行幸の働いているバイト先の店長だ。ほら、この声を覚えてないか？さつき俺と携帯で話をしたじゃないか」

え？ええええ？私と携帯で話た？あれ？あれれ？
待つて……そういえばこの声……聞き覚えがあるかも！

「あー…やつこえば……」の声！あの電話の人…？」

「ははは。覚えててくれてありがとう。でね、行幸の事なんだけど
わ、ここにいる女性……本当に行幸なんだよ。嘘じやない、本当に
……」「

何？嘘だよね？冗談だよね？やだ！もうこれ以上からかわないで
欲しい。

「え？嘘？冗談ですよね？店長さんも行幸と一緒になつて私をから
かってるんでしょ？あれ？本当の行幸は何処なんですか？」

そうよ！行幸が戻つてくれればいいのよ！何処！？
もしかしてこの部屋に隠れて聞いてるとか？

私は辺りをキョロキョロと見渡して行幸を探し出した。

「幸桜ちゃん……冗談ならいいんだけど……」れつて冗談じやない
んだよ……行幸は訳あつて女の子になつちやつたんだよ……現実な
んだ」「

嘘……

私はゆつくりと行幸だと言われている女性を見る。
すると視線が合つた……そしてその女性は「そなんだよ」とい
う意味なのが小さく頷いた。
本当なの？まさか……でも……

「え……嘘……じゃあこの女性が本当に行幸なの？」

信じたくない。本心でそう思つてる……

でもここにいる人達は嘘を言つてゐるよつたのは聞こえない。

ここまでして私を騙す意味も無いと思つし、騙す為に狙つていた

訳でも無いと思つ。

だつて私がここに居るのは行幸にすら教えていない……偶然なのだから……

「幸桜ちゃん……私だつて信じたくなかったんだよ……行幸がこんな姿になつちゃうなんて……」

震える声が聞こえた……

見上げると体格の良い男性の横に立つてゐる女人人がすこく悲しそうな表情でみゆきといつ女性を見ている。

この女性……嘘はついてないみたい……だつて本当に悲しそうだもん……

やつぱりそつなかな……このみゆきって呼ばれてこるこの女性は私のお兄ちゃんなのかな……

「本当に行幸お兄ちゃんなの?」

「ああ……」

「やだー…信じたくないー!」

「でもこれは現実なんだ」

「何で? 何で行幸がそんな姿になつたの? もしかしてやつぱり嘘とか? そうよね! ありえないもん! 皆で私をからかってるんでしょ! 本当の行幸なら私の誕生日とか家の住所とかあれとかこれとか全部

「聞えるはずだよ～聞えないでしょ～」

「全部……聞える……」

答えないで～否定したい～嘘だと聞つて欲しい～だから私は……

子供っぽいかもしない……でも私は事実を事実だと受け取りたくなかった。

だから私はムキになつて質問をした。しかし行幸は私の全ての問い合わせに完璧に答えた。

本当に行幸なの? やだよ……まだ信じたくない。そ、そうだ! 最後にこの質問を!

「じゃ……じゃあこれは解る? 私が小学校の時に大好きだったぬいぐるみの名前!」

「これは行幸じゃないと絶対に解らないはず!」

今までの質問は事前に調べる事だつて不可能じゃないもん!

「俺がUFOのキャラで取つてきた茶色い熊のぬいぐるみだよな。確かおばあちゃんの家に行く途中で電車の中に忘れて、お前、ずっと泣いてたよな……名前は無かつたと黙つたけど?」

やだ……正解だよ……駄目だ、やつぱりこの女性は行幸なんだ……ここで夢だつたつて落ちて欲しいけど……私も馬鹿じやないもん……これが現実だつて理解はしてる……でも何で?

「信じれない……何で……何で女子になつちゃつたのよ……

「何でつて……俺にもよく解らんのだ……だけだ……」

この後で行幸みゆきは私に昨日あつた出来事を話してくれた。

幸桜みゆきの困惑 終わり

第十六話番外編 【俺の妹の困惑 幸桜くじはる 編】（後書き）

たまにこういう別視点のオマケを書くかもしれません。気分次第なので期待はしないでください。
しかし幸桜は良いキャラです。（私の中で）

第十七話【俺が見た夢・男に戻るには?】（前書き）

十七話予告！？

突然の幸桜の暴走！？幸桜が起こす予想も出来ない展開に行幸は！？次話【俺が見た夢・男に戻るには?】をどうぞお楽しみに！ついこの回の予告を書いてどうするのだ…

第十七話【俺が見た夢・男に戻る事は?】

幸桜に全ての説明は終わった。

しかし、俺の説明を聞いて幸桜は納得できたのだろうか?

その表情からはとてもじやないが納得できて無いように見える。

だが事実は事実なんだ。いくら幸桜が信じなくても俺が今こうして女になつているのは事実。

「幸桜? 納得出来たのか?」

「え…えっと……」

やはりマイナミ納得出来ていらない様子だな…

「おい、幸桜…さつきは俺が行幸みゆきだつて納得したじゃないか」

「うふ…でも…やつぱり…」

幸桜はそう言つと唇をぐつと噛んだ。

そんな幸桜を見て俺は考えた。

もしも俺の目の前に男の子が現れて、その子が幸桜なんだと言つた時、俺はそれを事実だと受け止められるのか?

そう俄に信じられるものじゃないよな…

店長や董がやけに物わかりが良かつただけで、と言つても時間はかかつたが…しかし幸桜よりは物わかりはよかつた。

いや、物わかりがいいんじやない…こいつらはアニメとかゲームとかそういうた非現実世界を知つてゐるから、その中で起きる出来事、性転換・変身等を今の俺に起こつてゐる事に被せて考へてゐるんだ。だから俺が女になつた事を受け入れやすかつただけなんだろう。

「……普通の人が信じなって事か。と言つ事は幸
桜は普通の女の子なのか？」

「私……ゲームの罰とかそんな事で女の子にされるなんて……やつぱりあり得ないと想つ……やつぱり信じられない」

幸桜は困惑した表情で頭を抱えた。

「ねえ、本当の本当に行幸なの？」

幸桜は少し潤んだ目で俺を見ながらそつと話した。
そんな幸桜を店長と董が優しく説得する。
経緯の説明の事例がちょっとマニアックだが、その説明をずっと
聞いていた幸桜も流石に納得せざるえない状況になつたみたいだ。
幸桜は俺を再び見ると言つた。

「信じないけど信じるよ……」

幸桜によつて今日ここに意味不明な日本語が完成した……
つていうかどうこいつ意味だよ……

「貴方はたぶん行幸……」

たぶんつて何だよ……

「たぶんじゃなくつて俺は行幸なんだよ」

「え……あ……じやあ……み、行幸……」

「何だ」

「もしも今までの言つていた事が事実だとして、**行幸**^{みゆき}は男には戻れないの？」

男に戻る方法？それが解るならば俺も知りたい。

だいたい俺は何で女にされたのか？本当に天罰だったのか？その理由も知りたい。

誰か教える！俺はどうしてこうなったんだ！その時、俺の脳裏に一人の女性が思いだされた。

その女性は銀色の長い髪で、まるで天使のような女性だった。そしてもう一人、男の子みたいな女の子も思い出した。

「あれ？ そういうえば俺ってさつき何処か違う場所に居たような……」

俺がそう言つと三人は『え？』という表情で俺を見る。

「何を言つてるんだ？お前は氣を失つてそこにずっと横になつてたぞ？」

店長が言つた。

「あ……えっと……私がここに来た時にはもうリビングで横になつてて……それから色々あって……で……あ！ 私がその人を触つたら感電したの！」

「感電？ 感電……つていつかその人つて言うな！ お前の実の兄だ！
行幸^{みゆき}だ！」

「え……だつて……」

まあそんなのはいい。しかし何だ？感電？そういうえば俺はアパートに戻つてからパソコンをやりつつカツチラーメンを食べようとしたら…

『ゾクゾク！』と俺の体が震え上がった。
思い出した！俺も感電して氣を失つたんだ！そして…そうだ！そして石造りの建物で目を覚ました！紅い絨毯が広がつてた…鮮明に蘇る記憶！

いや待てよ……あれは夢だつたのか？いや違う！すぐリアルにはつきりと記憶がある。

そうだよ、夢にしてはリアルすぎる……だいたいこいつが夢をはつきりと覚えているとかありえない。

そう、色や声色まではつきりと覚えている…

やっぱつさつきの出来事は夢じやない！もしかしてせつを思い出したあの一人の女は実在するんぢや？

「みゆき 幸運？どうしたの？」

すみれ 董が心配そうに言つた。

「俺…男に戻れるかも…」

俺がやつと店長達が再び『え？』といつ表情で俺を一斉に見た。

「何かの条件さえクリアすれば俺は男に戻れるのかもしれない」

「条件！？何それ？何なの？お兄ちゃんが元に戻る条件って何なの？何かしないといけないの？何処か行かないダメなの？どういう方法なの！？」

幸桜が形相を変えて俺に質問を浴びせる。

「行幸、ホント…戻れるの？ねえ！」

董は両手で俺の両肩を持つと激しく前後に揺する…

「す、董…吐く吐く…やめてくれ…もつ今日は散々揺りされたんだすみれ！」

俺がそう言つと董は顔を赤くして俺の両肩を離した。

でもそのお陰でまた思い出した。

銀色の長い髪の女性の名前はリリア、そしてもう一人の女の子がシャルテ！一人は姉妹だ。

そしてリリアは言つていた、『…私の作った魔法世界です。今貴方は思念体で、本当の肉体は現実世界に、貴方の部屋にいます』って。

確信した！そつるのは夢じゃない！魔法で作られた仮想世界だつたんだ。

そして俺はその仮想世界でシャルテに殺されたんだ…くそ…あいつ…

じゃない！今はそんな事を思い出してる場合じゃない！

そう、あの時に俺は男に戻る方法を教えるつて言つたんだ。

するとシャルテが言つた。リリアが説明すると…

しかし幸桜がその仮想世界に現れたからリリアは世界を消失させたんだ！

最後に言つてたな、男に戻る為にどうすればいいかを話をしてくれるつて！

「おい、みゆき？どうした？そんな真剣な顔をして考え込んで？何

が思い出したのか？

「あ、ああ、少しね」

しかし……この事を話すべきか？

実は俺は魔法で造られた仮想世界に行つて、そこで男に戻る方法が聞けるはずだつたんだ！って……

いや……こんな事はいくら話しても信じてくれねえよな……つていつか、余計に話がややこしくなりそうだし……

「俺が男に戻る方法……あるかもしない……だけどまだ店長達には話せない」

「え？ 何でだ！？ 俺には話せないのか？」

店長は俺が教えない事が不満そつに俺を見る。

「まだ確信もないし方法も正確に聞いてないから

「聞いてない？ って誰にだよ？」

「まあ、やひはんと解つたら話すよ」

「でも、男に戻れる可能性はあるつて事よね？」

すみれ
董すみれが真剣な顔で言った。

「可能性はあるかもしれない……」

「おー、教えてくれよ。俺達はみゆきに男に戻つて貰いたいんだ！」

店長は真剣にそう言つてくれた。

しかし、やはり今は話すべきじゃない。俺はそう思った。
いや違う、心の奥にある何かが他人には教えるなと訴えかけてきてる気がするんだ。

「店長」めん、確信が持てないのもあるけど、きっとこれは俺以外の人に教えるべきじゃないかもしれない。何かが俺の中で教えたなら駄目だつて言つてる

「何だそれ！？」

「わからない

「店長、それ以上突っ込んじゃダメだよ。行幸だつて考えがあつて言つてるんだし、ここは行幸の言つ事を聞こつ」

董がそう言つと店長は理解をしてくれたのか、それ以降は質問をしてこなかつた。

幸桜は一人無言で俺達の会話を聞いている。

そしてしばらぐして店長と董はアパートを出て行つた。

あれ？ 店長と董がアパートを出てからふと思つた事が…

そう言えれば……店長がすつげー普通だつたぞ？ 董も普通だつたよ

な？

どうしてだ？ 今日お店で店長はかなり崩れて怪しかつたのに？ 普

段の店長に戻つてたな…

董も普通に戻つてたというか… まあ今日は少し感情的になつてただけだけだ。

俺がそんな事を考えていると部屋に残つてゐる幸桜が声をかけて

来た。

「ねえ、たぶん行幸^{みゆき}」

「……まだタブンとか言つか?」

「……じゃあ…行幸^{みゆき}かもしれない人」

「かもつて何だ!まだ信じないのか!」

「ううん…信じたけど信じてないだけ」

だからそれって意味不明だつて…

「で…何だよ

「さっきの事…男に戻れるかもつていう事を…私にも教えられな
い事なのかな?」

俺は幸桜には教えるべきかを考えた。

だが考えてみればリリアは幸桜が仮想世界に現れたが為にあの世
界を消したんだ。そう考えると例え妹であつても教えるべきじゃな
いんだろうな。

「ああ、教えられない」

「そつか…」

幸桜はとても寂しそうにそつ答えると膝を抱えてまるくなつた。

「幸桜？」

幸桜は返事も無く、ただただ背中を震わせていた。

幸桜はあれから一時間も動かなかつた。しかしさつきまでの姿が嘘のように元の元気な妹に戻つた。

少し話しをした所で幸桜は俺に終電が終わつたから泊めて欲しいと言つてきた。

流石に俺も幸桜を一人でタクシーで帰す訳にもいかないので仕方なくOKをした。

しかし……ここで気がつくべきだつた……まだ終電なんて終わつてなかつたんだ！

え？ 何があつたのか？ それは……

数時間前

「ごめんね、泊まる事になつちやつて……」

「いや……別にいいけど……」

「初めてだね、行幸の部屋に泊まるのつて」

「そうだなつていうかさ……妹を俺の部屋に泊めるとか考えられらないだろ……俺は男だしお前は女なんだぞ」

俺はそう言つと幸桜は目を細めて俺を睨む。

「何それ？それって何か変な事を考へてるの？ねえ…ねえ…」

「うわ…しまった！余計な事を言ってしまったかもしれない！」
俺は思わず後すだりをした。するとその拍子に俺のパソコンの横のラックへぶつかり、中に入っていた俺の秘蔵十八禁エロゲコレクションがボタボタと床に落ちた。妹の視線はそれに釘付けになる。

「え…えっと…これは違つ！」

俺は慌ててラックへと秘蔵コレクションを戻す。

「ねえ、その『妹と僕の秘密の関係』って奴…何それ？」

「うわあ！タイトルすっげー見られてた！それも一番見せたらダメっぽいやつ！」

「いや、こ、これは店頭に並りてや、まだやつてないんだ」

待て…これって言い訳になつてねーし！

「ふーん……じゃあ一緒にやるっ！」

「え？」

「冗談だよ……」

幸桜は俺の秘蔵コレクションが隠してあるラックを漁り始めた。

「待て！幸桜やめろ！そこはお前が見ちゃダメなものがいっぱいあ

る！」

るんだ!」

しかし幸桜は漁る事をやめない。

そして何本かの秘蔵コレクションを手に取つてソフトの裏に書いてある説明を凝視している。

「ある日貴方の部屋に突然訪ねて来た女性…その女性は貴方と…」

「読むな…声を出して読むな!」

やばい…ただでさえ無かつた兄としての威厳が完全に無くなつた…俺はヘタリとその場に座り込んだ…

第十七話【俺が見た夢・男に戻るには?】（後書き）

作者と対談？

作者「はい、作者です。今日は主人公の行幸さんに来て頂いてあります」

行幸「おい作者、何だこれは？」

作者「対談です」

行幸「何の意味があるんだよ」

作者「ええと…ちょっと行幸さんの妹について質問が来てまして」

行幸「幸桜に対する質問なら俺にするな！本人を呼べ！」

作者「まあまあ…ちょっと本人には聞けないから」

行幸「むう…で？何だよ」

作者「質問です。幸桜さんは処女ですか」

行幸「ゲホ！ゴホゴホゴホ」お茶を吹き出す

作者「あれ？どうしたんですか？」

行幸「な、何て質問だ！っていうか俺が知るか！何で俺がそんな事を知ってるんだよ！だいたい何の意味があるんだよ！」

作者「気になつただけです。では次の質問」

行幸「もういい！俺は帰る！あ！作者！」

作者「呼び捨てにしないで貰えます？これでも作者なんですから」

行幸「知るか！この台詞だってお前が書いてるんだろ！」

作者「あ、触れちゃダメな部分に…」

行幸「とりあえず俺は絶対に男に戻せよ！わかつたな！」

行幸退出

作者「はい…全然対談になつてなかつたけど…読者の皆様、これらも宜しくお願ひします。あと、質問とか感想とか受付てます。キヤラ個人に対しても可能ですので宜しくお願ひします」

第十八話【俺の妹は知らないうちに成長してました】（前書き）

久々の連続投稿！一気に進む展開！果たして幸桜はどうなるのか？
行幸の運命は！つて何これ…

第十八話【俺の妹は知らなーうひて成長しました】

「ふーん……」いつのやつてるんだ……」

幸桜は特に怒る事も無く平然とした表情でそいつ言った。

「え……？」

まやかにこいでやつてないなんて言えないですよね……

「はい……一応男ですので、そういう事には興味がありまして……」

「へえ……」

「あ、でも基本はネットゲーだからこそ、あんまりいつのプレイしないんだぞ」

「これって言い訳になるのか？　

「ふーん……そもそも、別にいいんじゃないの？」

「え？　いい？　って何が？」

「見た所はボーイズラブやガールズラブ、女装ものの要素ものは無いし、ロリコン系のゲームもないからね。でもまあ妹系があるのがちょっとあれだけだ」

「何だこいつ？　何でそんな台詞が？　っていうか良く知ってるな！？」
「こつもしかして腐女子なのか？　って事は無いよなあ……幸桜がそ

んな趣味を持つてるはずないし。

しかし一体どこでそんな卑猥な言葉を覚えてきたんだろ？

高校時代には既に全ての用語を知っていた自分の事は棚にあげております。

「妹系があるって事はさ、私の事も…」

え？ 事も… 事も？ 続きを話してくれないと返事できねー！

「えっと… 幸桜は何を言いたいのかなあ？」

「私をあのゲームみたいな、そつこいつ田で見てるの？ って事」

「うわああー！ ストレートにきたああー！ 直球だー！ しかしー！ これは打ち返しやすい！」

「無いー！ 無いー！ 無いー！ 無いー！ 無いー！ まつたく無いー！」

「……全く？ ふーん……どうせ私は行幸みゆきには女だつて思われてないしね」

「つおー！ 変化球きたー！ うー…… しゃってビリ答えるべきだ？

俺が頭を抱えていると幸桜が急に立ち上がった。

「まあいいや。じゃあ先にお風呂に入つてくるね」

「え？ あ、ああ……」

幸桜は部屋の隅に置いてあつた俺のトランクスとシャツ、バスタオルを持つとお風呂場へと向かった。って何だ？ 俺の下着…？ 何故

「一.

「おこ.」

「何?」

「何で俺の下着を…」

「だつて着替えなーい」

「いや、俺のとか使わないでくれよ…」

「私は別に気にしないから

「いや、俺が気にする」

「ふーん…まあ気にしないでいいよ」

幸桜はそのままキッチンへと消えた。
ちなみに俺のアパートはキッチンのある場所から直接お風呂に入
るからそこでも着替える事になる。
よってコベリングとキッチンとの仕切りを開めないとおもこきつ見
える。

「おこ、今このままやめて開めるよー」

「わかったよ」

「おこ、本当に俺の下着とかでいいのか?」

「いいのここのー兄弟なんだしさー」

マイチ納得できないが拒みすぎてもダメだらう...

「ねえ！みゆき行幸！」

「え？ あ、な、何だよー。」

「覗かないでよっ。」

「馬鹿か！ 何で俺が覗くんだよー。お前の裸なんて見たくもねーよー。」

「え…ひどい！ 私だつて出る所は少しあてるんだよ。」

え？ つていうか何でせつこう返せばいいんだよー。へセー！ つこう場合は何で返せばいいんだ？

さつきからじう返せばいいかわかんねー事ばつか言いやがつて…
『そつなんだ？ じゅあ見せてみろよ』 ……ダメだらー見ちやダメだ
るー…

じゅあえつと…

『証拠を見せるー。』 ……余計にダメだらー。言こ方が違つだけで内容

がさつきと回じじやねーかーうわ… 困つた…

「行幸？」
みゆき

「え？」

俺が顔を上げるとそこにはバスタオルを巻いた裸の幸桜さちざくらがー！？

「ちゅーまーおまーえ？ まだ俺は何も言つてないぞー。？」

幸桜は俺の慌てる姿を見てケラケラと笑いだした。

「な、何だよ！そんな格好でいるな！早く風呂に行けよ！」

「別にいいじゃん。中学校三年まで私と一緒にお風呂入ってでしょ？一人暮らしを初めてから急に私に対して冷たくなったんじゃない？」

「待て！何年前の話だ！今は俺は社会人でお前は高校生なんだぞ！それに冷たくないだろ？俺はいつだってお前の事を…心配してるんだぞ…」

あー顔が熱い！はずかしい台詞を言ってしまった…

幸桜はそんな俺の赤いであろう顔を見ると再びケタケタと笑う。そして急にその笑いは止まった。

『ふう…』

妹の大きな溜息が聞こえた。

「どうした？」

「やっぱり行幸みゆきお兄ちゃんなんだね…確信したよ」

寂しそうな笑顔で幸桜はそう言った。

「どうか、幸桜は俺の事を試していたのか。まだ何処かで俺が行幸みゆきだと信じれなくって…それでわざと…」

「こんな自然な会話が出来るつてや、行幸みゆきとじやないと無理だもんね…」

今にも泣きそうな幸桜の顔を見ると俺は妙に悪い事をしていろといふ気分になつた。

「『めんな幸桜、こんな事になつて…』

俺は俯きながら幸桜に謝つた。

「ううん…別にいいよ、仕方ない事もんね……それにさ、男に戻れるかもしないんでしょ？だつたらいいよ。でも…早く男に戻つてね…」

「ああ、絶対に男に戻るよ」

俺はそう言いながら顔を再び上げる。その時！
幸桜のバスタオルがバサリと床に落ちた！

「へけ！？」

俺は思わず変な声をあげて目を閉じた！がしかし…

「あーびっくりしたー！でも下着をまだ脱いでないから大丈夫だよ
？」

ゆつくりと目を開くと幸桜はしつかりと下着を着ていた。

それを見て俺はとても残念な気分に…じゃない！よかつたと思つたんだろ！

しかし……なんというか……下着とはいえ……

俺は思わず幸桜の全身を上から下へとじつと見てしまつた。
まだ大人の体になつたとは言えないかもしない…
だけど幸桜は俺の知らない間に確実に子供から女になつっていた。

俺はこれからも幸桜の成長を見届けてゆかたこと願ひ。

『幸桜成長記』

【完】

つで終わらない！何で終わる！何で終わるのさ？俺は女ままだ
し…それにそんなタイトルにいつなつたんだよ…

「あ、あんまり見ないでよ！恥ずかしいじゃん！」

幸桜は顔を真っ赤にしてキッチンへと消えて行つた。
やばい…幸桜の下着姿が脳裏に焼きついてしまつた。
妹とはいえ女の下着姿を生で見てしまつとは…
あれ？冷静に考えると俺も今は女なんだよな。

という事は……ブラとかパンティーとかつけないと幸桜みたいな感じになるのか？

つていうか、俺つて幸桜より胸があるし……胸……おっぱい…？
俺は自分の胸を凝視した。

つおおーリアルおっぱいにあるし…やつか…そうだったのか…
俺はゆっくりと自分の胸を触つてみる。
うわ、やわらかい…つていうか変な感じがする…
あ…ひ…ひ、ひを弄るとどうなるんだろう…

「あ…」

「あ、やばい…思わず声が出てしまつた…

幸桜はまだお風呂に入ってるから大丈夫か……となると気になるのは……

俺は自分のトランクスをじっと見る。下ってどうなってるんだろう？ 実は俺はこの歳になつてもまだ経験も無い。だからエロゲームやエロサイトやエロ漫画以外でそこは見た事が無いんだよ。

俺はゆっくりと体の下腹部へと手を伸ばしてみた。そこには男とまつたく違う何かがあった。

な、何だろ？……よくわかんないけどちひく興奮してしまつたぞ？

待てよ……上からじゃ良くみえねーな……鏡でもあれば見えるかな？ 俺は小さな鏡を床に置くとゆっくりとトランクスを脱いだ。そしてゆっくりと鏡の前へ…

その瞬間『ガタン』とキッチンの方から物音が聞こえた。え？ ガタン？ 俺はゆっくりと音のした方向を見るとそこには……

「行幸…………何やつてんのよ…………」

幸桜がいるじゃん！

「へー?」、幸桜？ な、な？ え？ あ……これは

「何やつてんのよー変人ー変態ー！」

「ま、待つてーこれには訳が！」

「言ひ訳しないでよーさつきから見てたんだからねーやだーお兄ちゃんもうやだ！」

俺の横には再びバスタオルを巻いた幸桜が顔を真っ赤にして怒っている。

「ま、待て！俺も男なんだ！女体の神秘が気になるといつのは自然な事なんだ！」

「何が神秘よ！行幸はさつきのエロゲとかエロ本とかエロビデオとかでいっぱい見てるでしょ！」

「うわ……幸桜がすっぽりい事を言つてる！？」

「待つた！」「めん！俺が悪かった！すまん！」

「つていうか、何でこんなに怒られてるんだろ……」

「駄目！許さない！行幸の馬鹿！」

幸桜は右手を大きく振り上げた。

その瞬間！幸桜のバスタオルがバサリと床に落ちた！
つてさつきもあつたようなシチュエーションだな……

つて……え！？えええええ！？

「キヤアアアアアアア！」

幸桜は両手で胸を押されてその場へしゃがみ込んだ。

〃テキシマッタ……「ハルノ……ハダカヲ……

「み、み、み、行幸！あっち向いてよおおー！」

俺は慌てて幸桜とは反対の方向を向いた。

「ねえ……見たでしょ……」

「い、いや……見てないよ……」

「絶対に見た……」

「いや……」

「正直に言つてよ……見たでしょ……」

「えつと……いや……」

「やばい……確実に見てた所を見られてた！」

「言ひなさいよ…見たでしょ…」

幸桜は背中越しに俺に向かつて怒鳴つた。

「え！？あ、見た」

し、しまったあ！

『ドガー』

部屋の中に響く重低音。そして俺の背中に衝撃が走った。
その瞬間に俺は前のめりに倒れ込む。

『ドサ！』

俯せになつた俺の後ろから幸桜の震えた声が聞こえた。

「 も… 最低… 」

幸桜の立ち上がる音が聞こえたと思つと、すぐに『ドン…』とキッキンとコジングとの間にある扉をおもにつきり閉める音が聞こえた。

やばい所を見られてしまった… それも幸桜に…
おまけに幸桜の裸まで見てしまった… それもかなりハッキリ…
つていうかさ、何で裸にバスタオルで来るんだよ？
さつきみたいに下着くらしつけてくれよ… そうすれば問題なかつたじやないか…

…そつか… 僕が変な事をしてたから！？

風呂に入る寸前に気がついて物音が気になつて覗いてたのか？
つていう事は全部見られたって事ですよね…

俺は少し反省した。少しであつて大いに反省しないのが俺の良い所だ。

そして思つた。妹の居ない日に続きはしょりつと…
じゃない！ そうじやないだろ！ さてどうする？
幸桜が戻つて来たら何を話せばいいんだよ…

第十八話【俺の妹は知らないうちに成長しました】（後書き）

作者と対談？

作者「はい！今日は幸桜さん来て貰いました」

幸桜「こんにちわ

作者「はい、こんにちわ

幸桜「では、そろそろ…」

作者「いや、ちょっと待つて！まだ何も聞いてないよ」

幸桜「じゃあ早く聞いて下さい。私も暇じゃないんです」

作者「行幸じゃない人には冷たいんですね」

幸桜「ば、馬鹿じゃないの？私は別に行幸に優しくないし！」

作者「はいはい…そうですね」と

幸桜「な、何よ！質問あるんぢゃないの？もう帰るよ！」

作者「あ、ごめんなさい。じゃあ質問です。幸桜さんのバストは7
9という事はBカップですよね？女性になつた行幸よりも小さいと思ひますが不満はありませんか？」

作者「え？な、何ですか？その振り上げた右手は！？あ…やめ……」

作者代理です。

申し訳ありませんがこの対談はここで急遽終了とさせて頂きます。

それでは次話を楽しみに！

第十九話【俺の妹は暴走します】（前書き）

何が起こったんだ！？幸桜が狂つた！？実の妹に迫られる行幸！どうなる、二人の関係は！？っていう感じでどうですか？

第十九話【俺の妹は暴走してます】

シーンとした部屋の中に僅かに聞こえるシャワーの音。

俺は脱ぎ捨てられたランクスを取り、それを履くと床にへたりと座り込んだ。

はあ…しかし何で俺は幸桜がいるのてあんな事をしちゃったんだよ…

『チリリリリ』

考えに耽っていると突然目覚まし時計のアラームが鳴り出す。音のする方向を見るとパソコンの横に置いてある目覚まし時計が鳴っていた。

あ、そうだ…ショップの更新時間で毎日タイマーセットしてたんだった。

俺はパソコン机に移動してその時計のアラームを止める。あれ？

そいやショップの更新時間って…俺は慌てて時計の時間を確認した。

「えーちよつと待てよ…せっぱりまだ一十四時じゃないか…」

そうだよ、NASAのショップは毎日深夜二十四時に更新なんだ…ぐそー何が「終電がもう終わつたから今日は泊めて」だ…今でもまだ電車は動いてじゃないか！

と…こういう事があつたんだよ。

十七話からの回想があつと終わり。

幸桜の言つ事を鵜呑みにして完全に幸桜の戦略に嵌つてしまつたようだ。幸桜を家に帰してたらあんな事にはならなかつたのに…

これこそ『後悔先に立たず』って奴だよ。俺は思わず頭を抱えた。

「**行幸**、どうしたの？頭なんか抱えて？」

「わあー！」

すっげー驚いた：

いつの間にかバスタオル姿の幸桜が俺の横に立っている。

「こ、幸桜、いつの間に出了んだよ？っていうかそんな格好でうろつかないでくれよ」

「え？別に気にしないでいいよ。あ、もう一枚タオル借りるね」

幸桜は俺の心配を他所に平然と別のタオルで髪を拭き始めた。

しかし、どうやら今の幸桜の様子を見る限りではさつきの事で怒つてはいない様子だ。

それ所かまたバスタオル姿で俺の田の前にきやがったし。またさつきみたいな事になつたらどうする気だよ。

もしかしてこいつ俺を誘つてやがるのか？いや待てよ、いくらなんでもそりゃ無いよな。

しかし…何がどうあれさつき幸桜の裸を見てしまった件は謝るべきか？

俺は幸桜の顔を見ながら考えた。

「なに見てるのよ？いやらしい。またさつきみたいな事になつて裸が見れるんじゃつて期待してる訳？」

「え？馬鹿！何で俺がそんな事を期待するんだよ！逆だよ！逆」

くそ、これって俺が幸桜に信用されてないって事か？
信用して無いならそんな格好で俺の目の前にいるなって言つんだよ。

って言つてもあれが、やっぱりわたくしの事はやっぱり謝つておこうか。後で何か言われるのも嫌だしな。

「幸桜、あれだ… さつきは」めん… 俺が悪かった

俺が謝ると幸桜は髪を拭く手を止めた。

「……いいよ別に

幸桜は小さな声でそう言つと俺の方を向いた。

「いいよつて？」

「お兄ちゃんも男だし、そういうのって興味があつて当たり前だし……さつきのだって本当は私も悪かったんだし……別に兄弟なんだし…裸くらい見られても平気だよ」

あれれ？思つた以上に幸桜が大人な対応をしている。

「でもお前、すげく顔が真っ赤だぞ？恥ずかしかったんじゃないのか？」

「そりやそりよーいくら見られたのが行幸みゆきお兄ちゃんにだからって普通に恥ずかしいよ……私だって一応女だもん」

そう言つと幸桜は更に顔を赤らめて俯いた。

濡れた髪にバスタオル。そして右手で口を覆つて恥ずかしそうな

素振りの幸桜を見て俺は一瞬ドキッとした。

な、何で妹を見て俺はドキッとしてる訳！？実の妹だぞ！？

と思いつつ幸桜の姿をもう一度見る俺が居る。

やばいな、幸桜がマジに女らしくなっちゃってるよ……

「でも私、さつき行幸みゆきがしようとしてたの変な事……あれはやだ

変な事ってあれか。あれね、あれ…

「でもな、あれは男としてはとても興味がある事なんだよ…」

「わかるよー私だって男の子に興味あるし、まだ経験は無いけど、
だけど好きな人とエッチだつてしてみたい！」

「ちょっと待て！何だその爆弾発言はーっというか好きな人って誰
だよーあと俺はエッチに興味があるなんて一言も言つてないぞ？」

「おい、幸桜待て、それってちょっとそれは違わないか？」

「行幸みゆきはどうなのよ？嫌でしょ？私が男の子になつても、行幸みゆきの日
の前で×××を弄つてたりしたらどう思うのよ！

俺の話を聞いてない。つていうか何を言つてるんだよー？

「わかった、そんな事をされたら確かに嫌だ。だがそれ以前にそん
な卑猥ひわいな台詞を女の子がストレートに言つんじやない！」

「嫌でしょ？私も嫌なのー！わかるでしょ？」

「聞いてねー…

「だからもう一度とあんな事はないでー。」

顔を真っ赤にして俺に向かって怒鳴りまくった幸桜は『はあは』と息を切らしてくる。

「わかった、もうしないよ……」

幸桜の前ではしないよ。ここが重要です。

『プリン……』

あれ？今なにかプリンとか聞こえたぞ？何の音だ？
俺は部屋を見渡す。しかし変な所は特に見当たらぬ。
そして視線を幸桜に戻すとさつきまで怒鳴りまくっていた幸桜の
田が虚ろになつてゐる。

何があつたんだ？幸桜がやつやけどはあるで別人の様になつてゐる…

「幸桜？どうしたんだ？」

幸桜は田を虚ろにしたまま四つん這いになつた。そしてゆっくり
と俺に迫つて来る。

「行幸お兄ちやん……」

「お、おー、何で寄つてくるんだよ？どうしたんだ？」

「いこよ……お兄ちやんがそんなに女の子に興味あるのなら……私
の……」

え？どういう意味だ？何がいいんだ？幸桜の「ピー」を見てもい
いとか、幸桜と「ピー」な事をしていいとかー？つて俺は何を考え

てるんだあ！

変な事を考える前にこの幸桜をどうかしないと駄目だろー。

「幸桜落ち着けー。どうした？冷静になれー。いつものお前らしくないぞ？」

「私は冷静だよ…」

何処がだ！おかしい、これは絶対にいつもの幸桜じゃない。
何がどうしてこうなったのかの理由は解らないが、幸桜が急におかしくなつてゐるだけは事実だ。

「行幸お兄ちゃん……私ね 行幸お兄ちゃんの事がずっと前から好きだったんだよ……」

…え？何それ…まさか告白？…というか実の妹から告白とかマジ無いだろ！マジでどんなエロゲーなんだよ！…いつそんなフラグが立つたんだよ！…つていうか初めての女の子からの告白が妹からとか…

…じゃない！そんな事は今は関係ないだろ。返しちゃひつかぬ？…うまく返さないと。

「え？えっと……それってどうこの事かなあ？」

「わあ…なんだこの微妙な返しは…

「お兄ちゃん…覚えてる？私が小学校一年の時の事……」

え？一年の時？…って事は俺が中学一年の時か？
何だ？何かあったつけ…フラグが立つイベント…

「えっと、何かあったつけ？」

「夏休みに私が一人で神社で遊んでたら大きな犬が私の目の前に来たんだ。私は犬は平気だつて思つて寄つたらいきなり手を噛まれて……それで私は泣きながら逃げ出した」

犬？あ！もしかしてあの時のあれか！？近所の大型犬が逃げだしたあの事件か！

「それでもやつぱり犬の方が大きいし、早いし、強いし、私は足も噛まれてもう駄目だつて思つた。そうしたらそこにお兄ちゃんが来てくれた」

思い出した……あれはすっごく思い出したくない痛い思い出なんだよな……

「お兄ちゃんは犬を棒で叩いて一生懸命追い払おうとしてくれた……でもやっぱり大きな犬は強くって……お兄ちゃんすっごく血がでてる……」

「あの時はすごく痛かつたな……確かに太ももを噛まれて大怪我をしたんだ。俺もすごく無謀な事をしたつて思うよ。大人が来なかつたら死んでたかもしれないよな」

幸桜は俺の左足の太ももに手を置いた。

「おい、幸桜？」

「い……怪我して縫つたんだよね……あ……縫つた後が残つてる……」

…やつぱつお兄ちゃんだ…

俺は自分の左太ももを見た。そこには犬に噛まれた時に縫つた傷
がちゃんとある。

女になつても傷は残つてたのか……つていつ事はこの体は俺の体
つて事なのか？

「病院のお兄ちゃんが寝ていたベットの横で泣きじゃくる私に言つ
たよね『泣くな幸桜、これはお兄ちゃんの役目なんだ。幸桜を守る
のはお兄ちゃんの役目なんだからな』つて……私、あの時に絶対お
兄ちゃんと結婚するつて決めたんだよ」

「せうか、そうだったんだ」

「馬鹿だよね……兄弟つて結婚出来ないのに……あの時は知らなく
つて……」

幸桜の田からぼたぼたと涙が床に落ちる。

「お兄ちゃんは何でお兄ちゃんなの？お兄ちゃんじやなかつたら良
かつたのに…」

「幸桜…」

「いんなに大好きなのに……」

何だこの展開は…まるで恋愛ゲームのヒロインと会話を繰り広げ
ているプレイヤーになつた気分だぞ。

でもこれは現実なんだよな？まるでゲームの様な展開が現実的に
俺の目の前で起こっているんだ。それもヒロインが幸桜とか…

しかし、何で本当に幸桜がこんな状態になつたんだ？
普段のちょっとツンツンした幸桜は何処へ行つたんだ？
それとも「これが本当の幸桜の姿なのか？」

「泣くなよ、俺も幸桜が大好きだよ。でもな、お前は俺の妹なんだ。
そして俺は兄だ、わかるよな？ 幸桜だつてきっと俺を兄貴として好
きなだけなんだろ？」「

俺がそいつと言つと幸桜は首を横に振つた。

「ううん……私は一人の男性としてお兄ちゃんが好き……」

禁断の台詞連発！ これで関係持つと近親相姦だろ？ マジでゲーム
じゃないんだぞ！？ マジ駄目だろ？ 幸桜は頭がいいからそのくらい
解つてるはずだ。きっとこれはいくら何でも「冗談だろ？」

「えつと……幸桜？ 冗談だよな？」

「冗談なんかで……冗談なんかでこんな事を言えるはずないよ……」

ホンキナンデスカ！？

「うー、幸桜？」

「これって強制イベントみたいだな……」

「お兄ちゃん……やつぱり私じゃ駄目かな……こんなに行幸が大好
きなの！」

幸桜は泪にいっぱいの涙を浮かべたまま俺にぐつと顔を近づけて

めた。

もう十数センチの所まで顔を寄せている。そして俺は逃げる様にゆっくりと後ずさりをする。

やばいな、幸桜は正気じやないな。

『ドキドキドキ』

何だよ、自分の心臓の鼓動がハツキリと聞こえるぞ……妹に迫られて俺はなんでこんなにドキドキしてるんだよ。もしかして俺は妹に好意があるのか？禁断の関係でもいって思つてゐるのか？実の妹とやつちやつのか？つてやつちや駄目だろ！

落ち着け、きつと乗り切れるはずだ……
その時、四つん這いになつていった幸桜からバスタオルがゆっくりと床へと落ちた。

俺の目の前にはまたもや裸の幸桜が……それも今度は四つん這い！待てー！こんな事ばっか起こつて落ち着いてられるかああ！

「幸桜！バスタオル！バスタオルが落ちた！丸見えだ！」

しかし幸桜はまったく動じない。

「別にいいよ……」

俺が良くない！俺が良くないんだよ！

「何がいいんだよ！はやくバスタオルを！」

しかし幸桜はそのままゆっくりと俺に接近して来る。

「幸桜、お願ひだから俺の話を聞いてくれよ……」

「幸……みゆき」

やつぱり聞いてねえー

待てよー良くみれば、幸桜の田が更に虚ろになつてこるじゃないか。

そして今度は幸桜の唇が俺の唇に接近中じゃないかよー！

「ストップ！ストップ！まで幸桜！それは本気でマズイ

俺は更に後ずさりをする。しかし『ドーン』といつ音と共に俺は壁際まで追い込まれた。

もう後が無い…

ファーストキスが女になつた時に、それも相手が妹だなんてマジありえねえ。

そ、そうだ！

俺は首を左に廻して何とかキスを回避しようと考へた。

しかし幸桜は俺の頭を両手でグツと持つとこんなに力があつたのかと疑う程の馬鹿力で俺の顔を強引に元に戻す。

「お兄ちゃん、私が嫌いなの？」

「い、いや…嫌いじゃない…けど…」

「じゃあいいよね？私のファーストキスを…そして初めてを全部お兄ちゃんにあげるね」

「いや、いりません！」

な、何かないか！？これを打開できる何かいいアイテムはー…あわふたしていると俺の左手に硬いものが当たつた。

これはもしかして！

俺はその固いものを左手で持つて持ち上げて見た。

するとそれは…『妹と僕の秘密の関係』！？なんでお前がここに

落ちてるんだよ！

幸桜はそのエロゲを見ると虚ろな笑顔で言った。

「うん、秘密の関係になろうね…」

「いや、結構です！」

あまりにも無駄アイテムすぎだろ！俺はエロゲを投げ捨てた！勢い良く飛んで行ったかと思ったら壁に当たり俺の頭に直撃して

再び足下に落ちた。

なんで戻つてくるんだよ！

続く

第十九話【俺の妹は暴走します】（後書き）

『妹と僕の秘密の関係』というソフトの内容は？

十八禁ソフトで実の妹と関係を持つといつくり近親相姦ゲームです。

フルボイスで展開され、最後に妹に襲われるという結末もあり。

妹は最初に三人の中から選択が可能でマルチエンディング！しかし無名メーカーで人気は無く、特価商品としてワゴンセールされた。

現在はメーカーも無くなり、偏ったユーザーからのみプレミアがついている。

第一十話【俺は妹の…言えませ】（前書き）

ついにファーストキスを奪われそうになる行幸^{みゆき}！迫り来る幸桜^{ひやく}の反則的なフォーメーションチェンジに行幸^{みゆき}はどう対応するのか！そしてその結末は！っていうのでどうでしょ？

第一十話【俺は妹の……言えません】

俺の手元には『妹と僕の秘密の関係』が落ちている。これはもしかすると幸桜とそういう関係になれといつ導きなのか…なんであるはずねーじゃねーか！俺はそんなアブノーマルな奴じやないんだ！

再び俺はそのエロゲをデタラメに投げ捨てた。

ぐわ…迫り来る幸桜をどうにかしないと…

「幸桜、やめひーき、近親相姦は駄目だ！」

「そのゲームの内容も同じでしょ…」

「馬鹿！これはゲームなんだ、ゲームーあとな、このゲームの内容は現実にはやつちや駄目な事なんだ！」

「私はいいよ…」

「良くない！良くないの！それに俺は今女になつてるんだー何を求めているか知らないが、そういうのはタブン出来ないから…」

「あ……そつか…じゃあ私の初めてはお預けかな…」

「違うーそういう問題じゃないんだよ」

「大丈夫だよ、ちゃんと行幸みゆきお兄ちやんの為にひとつおおくらいな

「いやいいーいいからーそれおかしいからー。」

お願いだ！あの冷静でツンツンして俺に嫌みな文句を言つ妹に戻つてくれ！

じゃないとこのままじゃ俺は…

「でもね、ファーストキスは行幸のものだよ……」

「いや、それもおかしい！そういうのは俺じゃ駄目なんだよ！」

無意識に視線が幸桜のやわらかそうな唇に……

駄目だ、駄目だ、駄目だ！

「幸桜！ストップ！」

「…………」

幸桜の動きが突然止まった。そして少し首を右へ傾げる。

「こ、幸桜？やっと駄目な事だつて理解してくれたのか？」

「行幸おにいちゃん…」

「な、何だ？」

「こ、の姿勢ちょっとキスしちゃうね……本当は今すぐにでもファーストキスを捧げたいけど……お兄ちゃんちょっとだけ待つてね……」

駄目だ、まったく理解してねえ！

幸桜は四つん這いから姿勢を変え始めた。

今の俺は壁際に追い込まれて壁を背中につけて足を体育座りの時のように折りたたんだ状態になっている。

幸桜はさっきまでは俺の足の間から迫って来ていた。

つていうかあのままでも十分キス位は出来たはずだ。

何で姿勢を…つて何だその格好は！

幸桜は床についた両手を上げると、俺の足の間で正座をした。

俺の目の前で妹が全裸で正座だと…？

俺は思わず幸桜の裸を見ないように目を閉じた。

すると両肩をぐつと掴まれた感触が伝わってきた。

俺は思わず目を開ける。すると俺の両肩を幸桜がしっかりと掴んでいるじゃないか。

やば…これは逃げれない？

そして幸桜は全裸なのにまったく動搖する気配も見せずに俺の折りたたんだ脚を平然と乗り越えると、ちゅうど股間に上あたりにちよこんと座り込んだ。

「…、幸桜…ちょっと待て！何処に座るんだよ…」

やばい…完全に動けなくなつた…

俺の目の前には火照った顔に虚ろな目をした、そして怪しくも優しい笑みを浮かべた全裸の幸桜が…

「えへ、流石にちょっと恥ずかしいな…」

幸桜は恥ずかしそうにそう言った。

見てるこっちの方が恥ずかしいって…

「じゃあ隠せ！…そして俺の上から降りろ！…お願いだから…」

「えへ、お兄ちゃん、お…ま…た…せ

聞いてなさすぎだろ！

幸桜は両腕にゅうわんと俺の背中へ廻しながら、そのまま唇をゆっくりと俺の唇へ寄せてきた。

「ま、待つてないからー・マジ本気でストップー！」

しかし幸桜は止まらない。両手でがんばって押し戻そうとしたが、すげい力でびくともしない。っていうか俺の力が弱すぎるっぽい…これはもう完全にイベント発生条件達成。回避不可能状態。無理ゲーだよ！

まるで狙つてもいなかつたヒロインに何故か知らないうちにラグが立つていて、発生条件すら知らないのにエッティベントが発生したような感じだよな…

もう駄目だ… 将来の俺の彼女よごめんなさい。俺のファーストキスは全裸の暴走した妹に奪われます…

これより妄想モード

『ねえ…行幸…行幸のファーストキスの思い出つてどんなの？』

『え？俺のファーストキス？え、えつと… 実は全裸の妹に強引に奪われたんだ』

『え！？行幸つてそういう人だったんだ… やだ…もつ別れる…』

『あ、待つてくれ！あれは事故で…』

『実の妹に手を出すなんて最低… わよつながら…』

妄想終了

つてそんな事になるじゃないか！ そつそつなりません。

そんないやだあああ！

くそー何か別の意味で涙が出て來たよ…
どうしてこうなるんだ…

幸桜を押し戻す事を諦めて、手をじたばた動かすと何かが手に…
俺の手元には『妹と僕の秘密の関係』って何でお前がまたそこに
あるんじゃ！って待てよ…このゲーム何度も俺の手元に戻つて来た。
も、もしかするとこれつてエロゲの神様の俺に対する罰なのでし
ょうか？

もしもこれがエロゲの神様の罰だつたら謝ります！

今までエロゲのデータを改ざんして全部のCGを見てて『めんな
さい！

面白かったのに全ルート見れずにネットで酷評して『めんなさい！
ロリ系やGJ系も持つてゐるのに別の場所に隠してて』『めんなさい！
マジでエロゲの神様』『めんなさい！助けて下さい！

俺は思わず神頼みをした。 そんな神はたぶん存在しません。

「幸…好き…」

駄目だ…ついに幸桜の唇が俺の唇に…

『byssin』

「byssin？」

変な音がまた聞こえたかと思つと幸桜は俺に抱きつゝ前に前の
めりに倒れた。

え？ 何が起こったんだ？ 神頼みが効いたのか！？ 幸桜が気を失つ
てるぞ？

裸の幸桜は俺に抱きつゝようにもたれ掛かつてゐる。

本当に何があつたんだ？ 幸桜は大丈夫か！？

「幸桜？ 幸桜？」

名前を呼んだが返事が無い。

その後、恥ずかしながらも幸桜をゆっくりと退かせて体を調べた

が、特に外傷などは無くただ気を失っているだけだった。

あつと…別にイヤラシイ事は何もしてないからな…

しかし、いい訳の効かない位に幸桜の裸を堪能して…じゃない！

見てしまったな… 気を失う前も… あ、後も…

まあ、幸桜は氣を失つただけみたいだし、良かつたとしよう。

俺は迫つて来た幸桜を思い出していた。

…何だかんだと良いながら俺は幸桜を拒んでなかつたよな…
結構あのまま幸桜とならキスしちゃつてもいいとか思つてたかも
しれない…

俺が女じやなくつて男だつたらもしかすると…

妄想中…妄想中…妄想中…危険な妄想中。

馬鹿！何を考えてるんだ！そんなの犯罪だろ！ 何を想像したのですか。

落ち着け行幸みゆき 別に事を考える…

そうだ、そうだな…な、何で突然氣を失つたんだろう？
もしかしてこれはマジで工口ゲの神様のご加護のお陰なのか？
俺は何か起こつたのかを理解出来ないまま部屋を見渡した。
その時、俺と幸桜以外はいなはづの部屋から突然声が聞こえた。

「ここつやつぱ変態だよ…」

「ふーな、何だ！？ 部屋の中に誰か居るのか？」

「だ、誰だ！」

部屋を再度見渡すが人氣は無い。そしてまた声が。

「仕方ありません。男性ですから」

「でも妹とやつちやうのは駄目だらへ。」

「そうですね……」

「マジで誰だよ…幽霊?…じゃないよな…って言ひかこの声は聞き覚えがあるぞー…?」

「しかしあつばかりたな。いくら感情増大フェロモンが行幸から出てるといえ、まさかこんな事になるなんて思つて無かつたよ。お姉え、こいつの妹つて行幸の恋愛対象リストに入つて無かつたよな?」

「血縁の家族は恋愛リストには入らないのです。しかし妹さんがこんなにも行幸さんを好きだつたなんて知りませんでした……これは行幸さんのご家族の感情をちゃんと調べなかつた私達の落ち度です。あのフェロモンは妹さんに対する効果があまりにも絶大すぎました」

「マジで聞き覚えのある声だ…えつと…ええと…あーこの声はある時のあるいつらじゃないのか?」

「えつと…名前…ええと…シャ…シャ…シャ?…そうだ!…シャルテとリリア!…?」

俺は慌てて周囲を再度見渡した。しかしあつぱり誰の姿も見えない。

「おい、シャルテ、リリア、お前にこの部屋にいるのか?…いるなら出て来い!」

「そう言つと俺の目の前にまるで透明人間が実態を表すかのよつたスーと二人が現れた。」

「呼ぶから出てきてやつたぞ、変人の行幸」

マジで出て来やがつた……しかしきなり変人とは相変わらずシヤルテは口が悪いな。

「何か変人だ！っていうか何でお前らがここに居るんだよー…

ん？ 何だ？ 何か違和感がある…

俺は一人の格好を見て俺は違和感を覚えた。

シヤルテつてツインテールだつたつけ？ それにジーパンにパーカー？

リリアも可愛らしいワンピース？ 普通の人間の格好？
前に出会つた時は確かローブみたいなのを身に纏つてたよ…
そうか、前と感じがまったく違うのか。

「これは人間界での格好だ」

シヤルテは俺の心を読んだのか如く、ムツとした表情で言つた。

「おい、俺まだ何も聞いてないぞ」

「聞いてなくつたつてそう思つてただろ？だから先に答えてやつたんだ」

やつぱり「いつなんかムカつく…」といつか違う、本題はこんな話じゃない。

「おい、幸桜をこんなにしたのはお前らなのか？」

「僕らじゃない。でも間接的には僕らにも責任はある。だから寸前で止めて（気絶させて）やつたんだ」「

「おー、もしかしてずっと見てたのか？」

「当たり前じゃないか。妹に迫られて本氣で逃げない変人行幸君の行動はちゃんと見てたよ」

「こ、こ、こ、こ、ムカツク！」

「見てたんなら早く止めろよ。」

「ん？ そう言いつつも本当は止めて欲しくなかつたんじゃないのか？ 続きも期待してたんじゃないの？」

シャルテは人を小ばかにするよつこいひと言つた。

「馬鹿か！ 何で俺が実の妹と…」

「ふん… 本音はどうなのかね、まつたく。でも良い経験出来ただろ？ 実の妹に告白されるとかさ」

すつげームカツク！ そして頭に血が上る…

「ふざけるな！ 全然よくねーよ… だいたい何であんな事になつたのか説明しろよ」

俺が怒鳴るとリリアとシャルテは顔を見合わせた。

「説明？ 面倒だな、リリアお姉え、お姉えから説明してよ

「え？ 私ですか？」

「僕は説明とか苦手なんだよね」

「え…えっと…解りました。では私から」^い説明します。^{みゆき}行幸さん、宜しいでしょうか？」

くそ、シャルテの奴逃げやがって…まあ取りあえずは話を聞くしかないな。

「いいよ…」

リリアは幸桜をジッと見ていく。

「あ、でもその前に妹さんをどうにかしないといけませんね」

確かに、裸で床に横たわる妹をここままにはしておけない。

「あ、ああ…そうだな…」

待てよ、俺が幸桜を無理に移動させたりして起きたら、それこそ修羅場になるんじゃないのか？

「どうしたんですか？ 何を考え込んでいるのですか？」

「いや、幸桜を無理に移動をせると起きやしないかつてね」

「ああ、大丈夫ですよ。今は触れてもそう簡単には起きませんから」

リリアは間髪いれずにそう言った。。

俺はリリアの言葉が少々ひっかかりながらも裸の幸桜にトランクスを履かせてシャツを着せた。

ちなみに、下着を装着時（下半身）に先ほどは確認が出来ていなかつた見てはいけない部分を見た気も、じゃない！見えてしまった氣もするが、これは不可抗力といつ事にしておこう。

そうだ、そうだ！不可抗力万歳！

というか絶対に幸桜には言えないな……殺される。

「そろそろ続きをお話しさせて頂いてもよろしきのうりうつか？」

「あ、ちょっと待てーべット連れていってもよろしきのうりうつか？」

「あ、はー」

俺はゆっくりと幸桜を抱え上げた。む……思った以上に重いな……そして幸桜をベッドの上にゆっくりと寝かせた。

「ふう……OK、終わつただ

「あ、はーではお話し致します

俺はそのままベッドの端に座った。

続く

第一十話【俺は妹の…言えませ】（後書き）

おまけですー幸桜のヤキモチシリーズー（対恋愛ゲーム）幸桜本音付『ここ本音』

「ねえー行幸は何でそんなゲームばつかやつてるの」

『最近は何で私の事を相手にしてくれないの…私よりもゲームが大事なの?』

「え?俺はリアルで彼女いないしな」

「それは行幸が彼女を作ろうとしないからでしょ」

『だからって彼女を作つてっていう意味じゃないんだよ』

「だつて俺は格好良くないしや、取り柄もないだろ?」

「別にかつこわるくもないじゃん!取り柄は…無いかもだけど」

『馬鹿!私にとつては格好いいのに…それにとって優しいの?…』

「だから俺は一次元でいいんだよ。お前だつて彼氏いないだろ?」

「それつて現実逃避してるだけだし!それに私の事なんてほつといてよ!」

『私だつたら何時でもデートしてあげるのに…それに彼氏なんて…お兄ちゃんがまだ私の中で一番なんだもん…無理だよ』

「おつとー今日は『水色フレンド、夏休みの思い出』の発売日だつたーお兄ちゃんはお出かけするか?」

「ちよ、ちよっとーもうこいじyan!ゲームいっぽい持つてゐじやん!」

『馬鹿!お兄ちゃんの馬鹿!やだーもつやだー絶対にいつかお兄ちゃんを駄目にしてるゲームもパソコンも捨ててやるんだからー』

「じゃな
にひして幸桜は更にシンキャラになつてやあおもしたとぞ。
終わり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2502p/>

どうしてこうなるんだ！

2011年10月27日03時30分発行